
けいおん！ 大切なモノを見つける方法

タローボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 大切なモノを見つける方法

【Nコード】

N5147X

【作者名】

タローボー

【あらすじ】

それは目に見えないけれど、暖かくて、優しくて、持っているだけで幸せな気持ちになれる、そんな夢のような。それでいて、ありふれていて誰しもが持っている。そんな大切なモノ。

んなモンあるワケねーだろって人も、もうとっくの昔から持つてるよって人も、そんなん探してるヒマあったら勉強か仕事しろって人も。ちよつとだけ心を優しくして、俺の長話に付き合ってくれると嬉しいね。

プロローグ

「なあ、父さん」

俺がそう声をかけると父さんは、どしたん？と視線を変えずに返事をした。カチャリと父さんが洗い終わった食器をおれに渡してくる。

「やっぱり俺…………あの高校入るのヤメる」

俺は台所で父さんの隣に立ち、食器を拭きながら、ずいぶん前から腹に仕舞っていた気持ちを捻り出す。父さんは何も言わず、ただ食器を洗い続ける。

「新しい家のいっちゃん近いトコの普通の高校でいいよ、情けないけど授業料免除取り消しになっちゃったし。通学に時間食われんのヤダしな」

俺は努めておどけた風に言った。自分に対して気を遣って欲しくないからだが、それを聞いた父さんは少し困った様に食器を洗う手を止め、そうか、とだけ言った。

「そ、それに俺さ、姉ちゃんとかの大学での話聞いてると自分も大学まで行きたくなっちゃってさ、…………それにさっ」

言えば言うほど父さんに気を遣わせてしまっているのが良く分かる。父さんはあたふたしている俺の方を向き、顔を上げた。

…………いつもしてニコニコ明るい親。そんな人がひどく悲しそうな顔をして、俺を見ていた。正確には俺のギプスがまだ取れていな

い右足を。

「……無理すんなや、オマエの好きなようにやったらええんやぞ？」

15年間俺はこの声を聞いて育ってきた。この方言丸出しの温かい声を聞くとホッとするはずなのだが、どうしてだかこの時の俺の耳には機械みたいに平坦な音に聞こえた。ムリしてないよマジで大丈夫だから、という自分の声もまるでロボットみたいだ。

「今1番ツライんはオマエやるおが。ホンマにこの子は……そんな顔して」

そんな顔ってどんな顔だよ、と窓に映った自分の顔を見る。そこにはあとひと押しされたら泣きベソをかき出すガキの顔が映っていた。

……俺だった。

俺が初めてバスケットボールをついたのは幼稚園を卒業して八ナたらしながら小学校に入学したばかりの頃だった。バスケットを始めた理由はしょーもなく、確か姉ちゃんに遊んでもらいたい、とか

んかそんな感じだったと思う。4つ上の姉は当時小学校のバスケットラブに入っており、ロクに構ってくれなかった、だから俺もとガキ丸出しの考えで姉ちゃんにくつついてクラブに入った。

そこからは一直線だった。日が暮れるまで友達と茶色いボールをダムダムついて、学校や公園で毎日遊んだ。姉ちゃんは中学に入ると同時に吹奏楽部に入部しバスケットをやめてしまい、少し寂しく思ったが自分までやめるなんて発想は1ミリも浮かばなかった。そのうち学校のクラブだけでなくミニバスのチームにも入り、この頃にはもう完全にバスケの魅力に取り憑かれており、小遣いのほとんどをバッシュ代に当ててハイペースで履き潰していた。

中学に上がると当然のようにバスケットに入り、生活の中心が部活になっていった。在学していた中学校のバスケット部が全国区なことも拍車をかける一因になっていたと思う。

中3の夏にはウチのチームは全国大会で3位にもなった。これは奇跡としか言いようがないが、俺はMVPとは別に選ばれる特別賞——ベスト5のひとりに選ばれ、いくつかの高校からスカウトも受けた。そのうちの一校が偶然父親の転勤先に近かったので、その推薦の話に飛びついたのだ。長年のチームメイトたちとお別れすることは滅茶苦茶寂しかったが、男手ひとつで俺を育ててくれた父さんに負担は掛けたくなかった。

それでも俺は幸せだった。高校生になっても大好きなバスケットができる。そしてもっと上手くなって、夢のまた夢だけど田臥選手みたいにアメリカに行ってNBAプレイヤーになりたいと人生の目標にしていた。

本当の本当に幸せだった。ずっとこんなさやかで汗臭いモンだけれどおれにとっては最高の幸せが続くと信じて疑わなかった。

そんなモン、一発の出来事でブツ壊れるということをおれは知らなかったんだ。

交通事故だった。
雪がしんと降る冬のことだった。

新しい家と新しい学校、春に引越す予定の新しい町に俺は家族と一緒に下見に来ていた。新居の様子を見に行く父親と妹と別れて、これから入学する予定の高校を見学しに行く最中のことだった。

俺が浮かれていて不注意だったのかもしれないし、車の運転手が急いでいたからかもしれないし、路面が少し凍結していたからかもしれないし、他にも原因があつたからかもしれない。

俺は右脚を前輪後輪合わせて2回、ワゴン車にガッツリ轢かれた。後日のお医者さんの言葉は今でも夢に出てくる。

『本当に残念だけど、キミはもう走れない。脊髄損傷ではないけど右脚に障害が残る。最悪、車椅子生活かもしれないな』

多分こういう風にハッキリと患者に言うことが医者仕事のひとつなんだろうと後々分かったが、その時の俺はその医者をブン殴ってやることしか頭になかったんだろうな。

こうして全てが終わった。

大げさでもなく比喻表現でも何でもなく、全部終わってしまった。高校の推薦や授業料免除の話は当然なくなり、他の高校のスカウトの電話もパツタリこなくなった。

そして何より、バスケットができなくなってしまった。ドリブルもシュートもパスも。みんなと一緒にコートに立ってゲロ吐くまで、ラントレしたり鬼みたいな監督にマジで怒られたり試合に勝って喜んだり試合に負けて落ち込んだり、笑い合ったりすることがもう一生できないらしい。

「…………俺もう寝るな、父さん」

俺はこれ以上いると本当に泣き出しそうになったので、オヤスミと言って部屋に戻ろうとした。

立てかけてあった松葉杖を手に取り、台所を出たところで後ろから父さんの声がした。

「見つかるぞ」

足を止めずに耳を傾ける。

「バスケみたいな大切なモノが、オマエにもいつかきっと見つかるて」

俺は部屋に戻るとベッドに顔から倒れこんだ。松葉杖を床に放り投げ、ゆっくりと天井を眺める。

……バスケみたいな大切なモノ？

「んなモンあるワケねえだろ」

そう口にした瞬間目頭が熱くなり、涙で天井がぐにやりと歪む。
喉から漏れてくる嗚咽を噛み殺しながら、布団をかぶる。

明日なんて一生来なけりゃいいと、俺はガキみたいに布団の中で
丸まりながら、そう思った。

第1話 正しい学校を選ぶ方法

「さっくらーがおかー、こーこー」

そう、桜ヶ丘高校。

俺はこの春、この学校の生徒——高校生になった。

「——ああ、さっくらーがおかー、こーこー」

ついさっき入学式で覚えたばかりの校歌を口ずさみながら、俺は自分のクラスの教室を探しながら校舎を歩いていた。

生まれて初めて締めたネクタイが妙にくすぐったく、落ち着きなく首回りをいじる。買ったばかりの真新しい上履き。ちょっと裾が長めのスラックス。体に馴染んでいないブレザー。下ろし立ての制服と窓の外から見える春の象徴である桜たちが、高校生になったということを実感させる。

高校なんて中学の延長だろ、とかそんな冷めたことを思っていたけどそんなことはなく、少しは大人に近づいたんじゃないかと錯覚してしまう。

「イイ雰囲気为学校じゃん」

桜ヶ丘高校は全部の校舎ではないが大半が木造校舎で占められている。そのせいか変に気取ったところがなく、特別に厳しい校則も進学意識もなく、好感が持てるような気がした。おまけに数年前まで女子高だったこの学校はなかなか女子生徒の数が多く、我ながら邪だなあと思いつつも健全な男子である俺は嬉しく思う。

最高だ、この学校に入ってよかったな、と俺は素直にそう思った。

俺のクラスは1年2組、教室に入ると何人かが無遠慮な視線を寄越してくる。

……そりゃこのトシで杖ついてるヤツいたらちよつと変だよなあ。ちなみに比較的根気よくリハビリを続けていたので右脚の状態はかなり良くなっている。だけどまだ脚に長距離を歩くほどの負荷はよろしくないらしいので杖を持たされている訳だ。まあ学校までそんな距離ないから平気だと思ったんだけど家族の人が持つて行けとうるさく心配してくれたので、こうして持つてきている。

ジイさんっぽくて格好悪い、なんて子供っぽいことを考えながら自分の学籍番号に割り当てられた席に着く。

俺は後ろの席の生徒に声をかけることにした。

「よっす。男女比ひでえとか思ってたけど案外そうでもないのな」

こういうとき、ほとんど人見知りしない自分の性格を、俺はけっこう気に入っていたりする。数少ないセールスポイントだな、とか適当なこと考えながら周りを見渡す。

「俺ら含めて10人はいる――ね」

俺は言いながら声をかけた男子生徒を見る。ぽっちゃりした体格で悪い意味で眼鏡が似合う造形の顔だなあとか失礼なことを思っていると、手元にあるクラス名簿を凝視していたそいつはゆっくりと俺を見た。

「……………まさか、お前もなのか？」

……………は？

「お前も桜校にはレベル高い女子がわんさかいるという噂を聞いて桜校を受験したのかっ!？」

そいつは驚きながらもその暑苦しい顔をこちらにずっと寄せてきた。ヤメテ。

「フツ、まあお前程度の地味なモブキャラが何人いようとこの僕が主人公補正で速攻カノジョつくっちゃまうがナ」

そのポツチャリくんは、前衛的なデザインのセルフレームメガネをクールにクイッと持ち上げ、ドン引きして喋れないおれに気持ち悪い台詞を言い放つ。何気に地味でモブとかキツイこと言うなや。入学早々絶対に近づいてはいけないカテゴリーの人間に俺は話しかけてしまったようだ……………。

「だが、モブキャラとはいえこの高校を選んだことは評価してやるぜ」

「いや、今すっごい勢いで入学を後悔してるんスけど、俺……」

こんな学校でマジ大丈夫なんか……！？

「確かにお前の言う通り今年は男子生徒の数は多い。それでも7割以上が女子！数が多いとそれだけカワイイ娘が多くなる、これ真理ナ」

コイツヤバイ……っ。

しかし、結構舌が回って喋るのが好きそうなので、会話を続けてしまう。

「そんな理由で学校選んでるヤツいねーよ！……まあちよつとは嬉しいけどさ」

俺はポツチャリくんの机に頬杖をつきながらクラス名簿を眺める。

「随分女の子に飢えてるみたいだけど、ひょっとして中学、男子校だったんか？」

「普通に共学だよ悪かったナ、ってかこの辺りで男子中学校とかあるわけねえだろ。……ん？お前地元民じゃねえのか？」

「そーだよ。この春に2コお隣の県から引越してきた」

「女のためだけに越境してくるとは……、さすがモブキャラ、根性

「が違うナ」

「親の仕事の都合だよっ！っか俺ただけチャライキャラなんだ！？」

ちよつとムキになって大声でツツコミを入れてしまったので、周りの生徒が数人おれの方に振り向く。

その時——ひとりの女子生徒と目があつた。
すぐに目を逸らされてしまったけど、この変態とこんな内容のトークを続けるのもナンなので、その女子生徒に話しかけることにした。

「なあさ、キミってこちらの中学の人なん？」

俺がそう声をかけると、その子はビックリと小さな体を硬直させ、驚いたように目を大きくしてこちらを見た。

「……わ、私のコト？」

うんそう、と言いながら俺は彼女を見る。

その女の子はとても小柄でクリっとした大きな目が、どこか小動物を髣髴とさせる。長い黒髪をツインテールにして縛っている。

……ポツチャリくんじゃないけど、確かにこの学校の女子はレベルが高いよな。すっげー可愛い。

「う、うん。ちよつと遠いけど南中だよ」

「あれ？お前中野じゃね？」

と、ポツチャリくんが食い付く。

知り合いかなんかな？

「そうだけど……」

「僕も南中なんだヨ。クラス一緒になったこと1回もないけど、お前のこと知ってるぜ！」

喰い気味に中野さんに話しかけるポツチャリくん。

なんで知ってんだよ、と思ったがこいつなら自分と同じ高校に進学する女子ぐらいチエツクしてんだろーな。

って中野さんちよつと引いてる引いてる。顔引きつつてんぞ！

「中野さん、中学でもコイツこんなだったんか？」

「わかんないけど、多分そうだと思う」

困ったように答える苦笑いな中野さん。どうやらポツチャリくんが強烈な個性の持ち主であって、同じ中学でも他の人は常識人のようだ。ホッ、一安心。

「俺さ、他県から引つ越してきたからまだ友達はこの変なヤツしかないんだ。よかつたら中野さんも仲良くしてやってな」

俺がそう言うと、中野さんはちよつと恥ずかしそうにモゴモゴしながら、こちらこそよろしく、と言ってくれた。

些細なことだけど、えらく嬉しく感じるのは多分恥ずかしそうにしている中野さんが大層可愛く見えたからだろう。

「入学早々ナンパとは……、さすがモブキャラ、根性が違うナ」

「どこがナンパに見えんだよ……っ」

「いいか、漫画とかだとお前みたいなチャライモブキャラはフラま
くって学校中の女を敵に回した拳句、ドロップアウトして不良にな
って主人公に倒された後あっさり改心しちゃう程度の小物だぞ？」

「俺どんだけ安い量産型キャラなんだよ！？あとどうせなら最後ま
で悪役やらせろや！」

こいつはマジで何考えて生きてんだ、漫画読み過ぎ。

そんな俺たちのバカなやり取りが面白かったのか、中野さんは俺
たちを見てクスクス笑っていた。硬い表情がようやくだがほぐれて
きたらしい。

俺はなんだか嬉しくなつて、ワザとらしく、ナンパじゃねえから
ホントにつ、とオーバーに弁解する。

するとまたポツチャリくんがバカなことを言つて俺と中野さんを笑
わせてくる。

新しく始まった高校生活。

もうバスケはできないけど。もう昔のように走れないけど。

きつとバスケを忘れて楽しい3年間を送れる。

そう思つた瞬間――

「……あのっ！」

急に後ろから声をかけられたので、振り向く。

直後、それこそ漫画のように俺の顔からサァーと血の気が引いた。

「私のこと、覚えてますか？」

忘れるわけがない。

……平沢、憂。

最悪だ、こんな学校入らなけりゃよかった、と俺は素直にそう思った。

第2話 憂と仲直りする方法

「私のこと、覚えてますか？」

そこに立っていたのは、俺たちと同じ桜校の制服に身を包んだ、栗色の髪をポニーテールにしている可愛らしい女の子だった。

「えつとごめん、どちらサンだっけ？」

ナニ忘れたフリしてんだよ嘘付くなや、俺。

「平沢、憂です。その節は本当にすみませんでした……っ！」

その女の子は顔を強張らせてそう言ってくる。

そんな泣きそうな顔されるとなんかこっちが悪いことしたみたいでバツが悪い。前にも同じ印象感じたなあ、と思っていると平沢さんはさらに続ける。

「あの数ヶ月前の事故のときにお世話になりました」

「あーあーあー、思い出した。あのときの！」

我ながら大した大根役者っぷりである。ハイハイ完全に思い出したワ、と呟きながらポンと手を打つ。

忘れるワケがない。本当にこの子を思い出さなかった日はなかったし、なんてったって夢にまで出てきた張本人だ。ここまで言うともうで俺がこの子に一目惚れでもしてしまったような風だが、正直会いたくなかった。むしろ2度とその顔を見たくなかったと言っても過言ではない。

「平沢さんが謝ることないってばさ。つーかあんな事故、誰が悪いってワケでもないし」

「いえでも、あたしがボーっとしてなければ……。私の所為なんです」

「前にも言ったと思うけど、そんな言い出したらキリねーよ。気にせんでいいから」

「ごめんなさい、ホントに……」

「ごめんなさい、と繰り返す平沢さんを見て、俺はさっさといなくなってもらいたいと切実に願っていた。安物の愛想笑いがいつまでもつかわからない。」

「怪我、まだ治ってませんよね？」

平沢さんは机に立てかけてあった杖を一瞥する。

「大丈夫、ヘーキ。こんなんすぐ治るよ！」

俺は一生治ることのないポンコツの脚をバシバシ叩いた。

「とにかく、なんてお詫びすればいいか……」

「気にせんでいいって」

「私の所為で怪我させちゃったんです」

「もういいってば」

「でも――」

「だからもういいって!!」

思わず。語気が荒くなる。

……ひょっとして、俺は平沢さんを怒鳴ってしまったのだろうか。案の定、平沢さんはあからさまに驚き、その大きな瞳から今にも涙がこぼれそうだった。

入学早々八つ当たりで女子を泣かしてしまうとか、俺はどんだけ格好悪くなれば気が済むんだ。

自己嫌悪で死にたくなっていると、丁度タイミングよく担任の教師らしき初老の男性が教室の扉を開いた。周りが雑談を止めていっせいに自分の席に戻り始める。

「ホ、ホラ先生来たぜ、席に戻ろう? な?」

気色の悪い猫撫で声で平沢さんをなんとか席に帰す。

ポツチャリくんが犯罪者を見るような湿度の高い目でこちらを見ていたが、俺は何も言わず教壇に顔を向ける。

「えー、皆さんご入学おめでとうございます。このクラスの担任の――」

そんな先生のかつたるあいさつを聞いている場合じゃない。なんで俺はこう優しくできないのだろう。あの子は純粹に謝ってくれただけじゃないか、俺を氣遣ってくれただけなのに。アホか俺は。

「…………ハア」

俺は溜息をつきながら頭を抱える。

もう1度溜息をつき、どうしたもんかと考える。

そんな俺のことを中野さんがじっと見ていることにも気が付かず、平沢さんと初めて会ったときのことを思い出していた。

あの交通事故について誰も悪くないと言ったけれど、実際のところ誰が悪いのかといえばやっぱり俺が悪いんだと思う。

あのとき、運転手の不注意や路面凍結の他に、事故のきっかけとなるある要因があったのだ。それは横断歩道で俺の前を歩いていた平沢さんだった。

はつきりとした意志で助けた訳じゃない。単純に自分が逃げようとした結果だったかもしれないし、本能がそうさせたのかもしれない。

俺は突っ込んでくる車に轢かれそうになっていた平沢さんを突き飛ばして助ける形になった。彼女の持っていたエコバッグから食材がぶちまけられたことも覚えてる。周りの人間や平沢さんは、それを自己犠牲による美しい救出に見えたかもしれないが、実際はなんでそんなことをしたのか自分でもわからない。

俺がそうしなければ平沢さんは事故の被害者となり、下手したら死んでいたかもしれない。彼女を庇えたことは良いことだし誇つていいことかもしれないが、それでも後悔が無いと言えど真つ赤な嘘になる。あのとき助けに入らなければと、もしものことを考えたのは1度や2度じゃない。こんなことを考えてしまう時点で自分の器の小ささが窺い知れるが、それでも自分なりに折り合いをつけて事故のことを忘れようと努力してたんだ。

「なのに、なんで」

呟きながら、涙を瞳いっぱいに内包した平沢さんの顔を思い出す。とにかくにも、さっきのことを謝ろう。今更だけど、男らしくしっかりと頭下げよう。そんでついでに本当に気にしなくていいということをおわかってもらおう。

担任の先生の息子さんの自慢話を聞き流しながら、平沢さんの席を横目で確認する。早く先生の話終わんねえかな。逸る気持ちを抑えよう。

きりーつ、れい、ありがとーございましたー！

ホームルームが終わると同時に俺は勢いよく席を立ち、平沢さんの席へと急いだ。

「平沢さん！……あのさつ、さつきの——」

「ごめんなさいっ、私お姉ちゃんと待ち合わせしてるからっ！」

サヨウナラッ、と文字通り脱兎のごとく平沢さんは教室から飛び出してしまった。俺の顔を見るや否や速攻で逃げ出していった女の子を呼び止める隙もなく、俺は逃げられた方向に伸ばした情けない自分の手を空しく見つめた。

……ほんのちよつとぐらい話を聞いてくれてもバチは当たらないんじゃないかねえか？

「いきなりあの憂にナンパとかスゴいねえ」

そんな惨めな俺に声をかけてくれた人がいた。

「憂つてば男子の人気高い上にガード硬いからアンタみたいな男じゃムリだと思うよ？」

そいつは自分の机に座ったまま面白そうにニシシと意地悪く笑いながら俺の顔を見ていた。クセの強い茶髪を両サイドで団子のようにならめている快活そうな女子生徒だった。

確か、鈴木さんとかだったかな？先ほどのクラスの自己紹介でそう言っていた気がする。

「……………」

ポツチャリくんといい、なんで皆は俺をナンパ野郎にしたがるの
だろうか？

「さっきも言われたけどさ、俺ってそーんなチャライ男に見える？」

「うん、超見える」

「……そっすか」

俺は脱力したように平沢さんが座っていた席にぐにやりと力なく
座る。

「俺さ、さっきさ。平沢さんにちよつとひでえコト言ったかも、し
んない」

「うん、知ってるよ。さっきあたし憂たたちのこと見てたもん」

なのにこんな絡みしてくるとはなかなかSな性格してやがんな。

「キミって平沢さんと仲いいん？」

「うん、そうだよ。あたし憂と同中だし」

俺は机に突っ伏しながら聞いてみる。

「なあ、平沢さん、俺のコトなんか言ってた？」

「なーんも」

そうかい。

本格的に平沢さんは俺と関わりを持ちたくないんだろうか。

「……何見とん？」

「いやあ、男子がフツーに落ち込んでるとか面白くなって」

「ひっでえ」

アハハと笑いながら、鈴木さんは癖のある前髪をいじるように触った。

「鈴木さん、帰らんの？」

「アンタこそ帰らないの？」

そーな、と言いながら俺は立ち上がった。
愛用のデイバッグを担ぎ、杖を握った。

「じゃあ帰ろうや。家どっちら辺なん？」

俺がそう言うと、鈴木さんは少し驚いたように目を見開き、こちらを見てきた。

「ちょっとばっか俺の愚痴に付き合ってやってや」

「……別にいいけど」

こうして俺たちは教室を出て、並んで歩く。
まだ1日しか履いていない真っ白な上履きを靴箱に押し込み、履

き古したスニーカーをポンコツの脚を乱暴に動かしてつつかける。

「ひよっとしてさー」

鈴木さんはローファアを履きづらそうに装着しながら、続ける。

「憂のこと庇って大怪我した男ってアンタなの？」

「ナニそれ？平沢さんがそう言ってたんか？」

「うん。去年の冬あたりだったかな？憂が事故りそうになったけどある男の子が助けてくれたって。私の所為で大怪我させちゃったって。……それってマジ？」

「美化されスギ。助けたっつーより、偶然そうなったってだけだよ」

「ふーん。……でも憂はきつとそう思ってるよ。そうじゃなきゃあんなに責任感じゃないでしょ」

「あーあーあー、あの子思い込み激っしいのな」

「受験前の大事な時期なのに憂ってば落ち込みまくってホント大変だったんだから」

そら悪うござんしたね、と漏らしながらポケットに片手を突っ込んで茶化しながらポカポカ陽気あふれる桜並木を杖を突いて歩いていく。

雲一つない青空を見上げながら、俺はひそかに罪悪感を感じていたりした。

「気にせんでもいいのになあ。でも、まさかこんなトコで再会するとは思ってなかったからこそそのリアクションだった気がするよ。俺がこの町に引っ越して来なきゃ一生会わなかっただろうし」

「アンタって県外から来たんだ？」

少し前を歩いていた鈴木さんは意外そうにこちらを振り返った。

「おお、余所モンだぞ。自慢じゃないが、住み始めてもう2ヶ月だけどこの町で何度も迷子になってる」

「マジで自慢にならないからっ」

自分の方向オンチを自ら露呈してしまったので、強引に話を戻す。

「んなことはどうでもよくて！……平沢さんのことだよ」

「どうやってたら愛しの憂と付き合えるかって？」

とか抜かしやがるのでドツいてやろうと腕を振り上げると、鈴木さんは悪戯っぽく笑いながら駆け足で逃げていく。

よく笑う子だなあ、と半ば感心しながら薄目で鈴木さんを見てみると、彼女は横断歩道の前で急にくりと体をこちらに向け、こう言った。

「で！……アンタはとどのつまり、どうしたいの？」

どうしたい？

「どつって……そりゃあ、さ」

どうしたいのだろう？

もう気にすんなって言いたいんだろうか。それともよくも俺の脚ぶつ壊してくれやがってと恨み言を言ってやりたいんだろうか。

それとも。

「——そうやってね、言いたいコト言えずにウジウジ我慢してるから憂に逃げられるんだと思うよ、アタシは」

容赦の欠片もねえオンナだ。

ブン殴られたみたいに、鈴木さんの遠慮ナシの直球の言葉が頭に響いた。

横断歩道の青信号がチカチカと点滅している。やがて信号は赤へと変わり、自動車が軽快に動き出した10秒後。

俺は鈴木さんをまっすぐ見ながらこう言った。

「仲直りがしたいんだ」

口を突いて出た言葉に、俺は自分でもびつくりした。

「や、そもそも平沢さんと友達ですらねえし、もう遅いかもだけど……。でも、仲直りっつか、ちゃんと謝りたい。せつかく氣い遣ってくれたのに八つ当たりしてゴメンって。そんでちゃんと話して、あの子に俺のこと嫌いにならないでほしいんだ」

もう2度と会いたくなかった子のはずなのに、気付いたらそんなコトを言っていた。

「ダメか、な？」

鈴木さんのまつすぐな瞳が俺のことを見ていた。

「ダメじゃないか聞いてみたら、……ねえ憂？」

「……………え？」

鈴木さんが楽しそうにそう言った瞬間、俺はギョツと体を強張らせて恐る恐る振り向いた。

そこには――

「平沢、さん……………」

「謝るのは私の方です！仲直りしたいのは、私だよ……………」

そこには、平沢さんが立っていた。泣きそうな顔で立っていた。

「い、いや、俺の方こそ……ってか、平沢さんいつからいたの!？」

「さっきのアンタの話は全部聞かれてるよ。たまたま憂の姿が見えたから、つい……………ね？」

ついね、じゃねーよ!？ナニ渦中のド真ん中の人放り込んでんだよ!？

あんな思春期真っ只中の主張聞かれるなんて……………恥ずかしすぎるっ。

鈴木さんは意地悪そうにニシシと笑いながら、そう言った。

「あの、私……………」

「ちょっと待ってや!」

口を開きかけた平沢さんの言葉を俺はムリやり遮る。

自分の顔面が熱を帯びているのがよくわかる。緊張からか歯の裏側がジンジン痺れてきた。

「さっきは怒鳴ってゴメンとか、事故の怪我のことは気にしないでいいとか、今度会ったら言おうと思ってたコトいっぱいあったけど。そんなことなんかより平沢さんに言いたい大事なコトあるんだ」

俺は照れながらも、勇気を出して言うことにした。

「仲直り、しよう」

妙に素直に言うことができた。

それはおそらく、そこにいるお節介なクラスメイトのおかげなんだろう。

「平沢さん？……泣いてんの？」

「仲直り、したいよ……っ！私も仲直りしたいっ」

平沢さんは俺の右手を、その小さな両掌でぎゅっと掴み、そう言ってくれた。

そして、とうとう彼女は嗚咽を漏らしながら泣き出してしまった。

「お、わっ！オイオイオイ、ナニもそんな泣かんでもいいだろ！？」

平沢さんに手を痛いほど握りしめられながら、あたふた狼狽していた俺はポケットからハンカチを取り出して押し付けるように泣きじゃくっている平沢さんに渡す。

そして、そんなテンパっている俺と平沢さんを見守りながらニヤニヤ笑う鈴木さん。

平沢さんが泣き止んで俺の手を離してくれて、状況に収集がついたのは、信号が10回は切り替わった頃だった。

「ぐすっ……、ごめんね。泣いちゃったりして」

鼻をすすりながら、ハンカチで涙をぬぐう平沢さん。

「それと、私も言いたいコトあるよ。大事なコト。……今までごめんねごめんねって謝ってばかりだったけど」

一瞬、間を開けて。

「——ありがとう。あの時、私のこと助けてくれて。仲直りしようって言うってくれてありがとう」

目と頬を赤くしながら、彼女はそう言った。
そう言うてくれたんだ。

「よろしく、これから仲良くしてね?」

「おっと、アタシも忘れちゃダメだよ!？」

言いながら、2人はこっちを見ている。

「あつ、そーだ!アンタの名前って――」

「フユ」

俺はすぐに口を開く。

「冬助。みんなフユって呼んでるよ。2人もそう呼んだってや」

そう言っで、俺は自然に素直に子供みたいに笑っていた。

こうして、俺たちは友達になった。
いつでも一緒にいて、笑ったり泣いたり怒ったり。

どうしてもいいコトから大事なコトまで思い出と感情を共有して、
つるみ続ける。

——いわゆる、親友というヤツだった。

第3話 友達を勇気づける方法

「軽音部？」

それは、とある昼休みのことだった。

「うん、そーだよ。私のお姉ちゃんが新歓ライブやるんだって！」

憂はまるで自分のことのように嬉しそうに、弁当をつまみながらそう言った。

「あーあーあー、例のお姉ちゃんね」

「はいはいはい、例のお姉ちゃんね」

机を寄せ合って一緒に昼食をとっていた俺と純は呆れながらそう言った。

知り合ってまだ間もないが分かったことがある。憂という人物を表現する中で1番合っているモノはシスコンだ。二言目には『お姉ちゃんかね——』『お姉ちゃんなら——』である。

憂はとても優しくしっかりしているが、どこか遠慮がちで1歩後ろに引いているフシがある。そんな彼女が最も感情的というかハイ

になって話すことが、1コ上の姉である。水たまりを見て、『お姉ちゃんコケないよね…』と過保護すぎな心配する憂を見て、俺と純は逆にそんな憂を心配したりする今日この頃。

「軽音部か。俺ン中学はなかったなあ、そんなカッケー部活」

俺はコンビ二のおにぎりをパクつきながら中学時代を思い返す。合唱部とか吹奏楽部とかならあったっけ。

「アタシらの中学もなかったよ。つーかマジカッコイイじゃん、バンドだよバンド！けっこう興味あったりするかも！」

と、息をまいて喋っている女子生徒は鈴木純。

彼女は賑やかだ。よく喋り、よく笑い、感情を溜めずに表に出すコトが多い。それ故に、人付き合いが上手いと思う。なんというか距離の取り方を心得ているんだろうな。そんな彼女のことを、俺は密かに尊敬していたりする。

「今日の放課後にも行ってみない？軽音部。……あ、新歓ライブだっけ？」

「新歓ライブは明日だから今日は普通に部活やってると思うよ。私は行ってもいいけど、フユくんは？」

「あー、ごめん。今日バイトあるからムリっばい。2人で見学してきてや」

「付き合い悪いよ、フユ。ちょっとぐらいイイじゃん」

「ダメです。……そもそもバイトしてっから部活入るつもりないし」

ちなみに2人は俺のコトをフユと呼んでくれている。憂はけつこう抵抗あったみたいだけど、最近はもう慣れてきたみたいだ。

「えー！？バイトばかりしてる灰色の青春送るコトになるよアタ」

「灰色とか言うなや！っか憂も部活入らないって言ってなかった？」

「うーん……ご飯つくったり家事とかで忙しいから、部活やるのはちょっと難しいかな」

憂の両親は昔から仕事やら旅行やらで家を空けることが多いらしい。彼女の世話焼きな気質のルーツはそこなんだろうな。

「そっかー、フユも憂も部活やらないんだ……。なんかつままないな」

そう言っつて、彼女は本当につまらなそうにパックのオレンジジュースを口に含んだ。

俺も純たちと一緒にになにか部活動をやれたらすげー楽しいとは思っただけど、バイトのせいで毎日部活に参加できないのだ。バイトは週に2、3日くらいなので、実際のところ部活をできなくもないのだが、毎日顔を出せないと中途半端な感じがしてイヤだ。……我ながら体育会系だよなあ。

「とにかく今日はムリ！でも明日の新歓ライブはちゃんと見に行くよ、憂の姉ちゃん見てみたいしな」

「フユ、憂のお姉さんにナンパすんなよ?」

「え!?!.....フユくん、ホントのホントにだめだよ!」

「.....」

「で、翌日の放課後になったワケだが、ナニか言うコトはあるか? 裏切り者の純ちゃんよ」

「だから、ごめんって言ってるでしょ! 裏切りとか言わないでよ!」

結論から言うと純は軽音部ではなく、ジャズ研究会に入部することとなった。昨日、軽音部の見学後にジャズ研に寄った際、とある先輩の演奏に一目惚れしてしまったらしい。

「すごくカッコいい先輩がいて、つい.....。でもホントにごめんね、

憂」

「気にしないでいいよ！しょうがないよ、どこに入るかは純ちゃんの自由なんだし」

別に悪いことをしたわけでもなんでもないのだが、純は申し訳なさそうにしている。

「ジャズつつつと、ディキシランドジャズとかビックバンドジャズとか、そういうのか？」

「おー、フユ意外と詳しいじゃん、そんな感じのヤツだよ。この後先輩たちと相談して、新入部員でどんなジャンルのジャズやるか決めるんだ」

一転して、楽しそうに話し出す純。

自分に合った部活を見つけたことができたコイツを、少し羨ましく思う。

「そっか。それじゃ頑張れよ、純」

「また明日ね、純ちゃん」

「ありがとつ、いつてくるね！」

そう言つと、彼女は嬉しそうにジャズ研の部室に向かうため、意気揚々と教室から出て行った。

いつてらっしゃいー、と憂は小さく手を振っている。

「……にしてもジャズね。まあ、アイツらしいって言えばアイツら

しいか」

「純ちゃんがコンサートとかで演奏するの楽しみだね？」

「氣い早すぎだつて」

今年の文化祭とかでやんのかな？とか考えながら、俺は席を立つ。

「じゃ、2人しかいねえけど、軽音部の応援にいきますか」

「うんっ」

杖を突きながらカコカコと歩いて教室から出ようとすると、隣で憂がナニかを見つけたように、あっ、と小さく声を上げた。

「ん？……あれ中野さん？」

俺がそう声を掛けると、ドアに手をかけていた中野さんはビクリと硬直してこちらを向いた。

「中野さん、今帰るトコ？」

「うん、冬助くんたちも？」

「や、俺らは——」

チラリと横目で憂を見てみると、なにか言いたそうに中野さんを見ている。憂が何を言いたいのか把握するのに1秒も要らなかった。

「あのさ、ちょっと頼みがあるんだ。今から軽音部の新歓ライブあ

るんだけど、中野さんも一緒に来てもらっていいか？憂の——こっちの平沢さんの姉ちゃんが出るんだって。俺らで応援したげようぜ」

「……私なんかが、付いて行っているの？」

「悪かったら誘うワケないだろ。あ、そういや2人はほとんど初対面だっけか？」

中野さんと憂は少し緊張していたみたいだけど、同性だからなのかすぐに打ち解けたみたいだ。これからよろしくね、とハニカミながら話している2人を見て微笑ましくなっている俺だが、時間がかなりヤバイことに気付いた。

校舎から少し離れた場所にある講堂に着いたときには、すでに新歓ライブは始まっていた。脚を怪我している俺は歩くスピードがトロいので、2人には先に行ってもらいたかったんだけど、憂がそれを許すワケがなかった。

扉を開けて講堂内に入ると賑やかな音が大音量で飛び出してくる。ちょうど曲が終わるところで、時間的に1、2曲目だと思う。

「けっこう人いっぱいだー」

憂の言う通り、思ったよりも多くの人がこの新歓ライブを見に来ていた。独特の熱気の中、曲が終わり、新1年生たちの拍手が鳴り響く。

『どうもー、軽音部ですっ！えっと、新入生のみなさんご入学おめでとございますー！』

そう言ってMCを始めたギターを提げたその先輩は、なんだか初めて見た感じがしない。というか、隣にいる友達に滅茶苦茶似ていた。間違いなく憂の姉ちゃんだろう。

「あの人憂の姉ちゃんだろ？憂によく似てんね」

「うんっ、よく言われるんだ」

憂の耳に口を寄せて感想を言う。メガネを持つてくるのを忘れたのでハッキリとは見えないが、それでも似ている様子が見て取れる。憂と同じ栗色のショートボブヘアで、大きな目とか背格好とかそっくりだ。

『私、最初に軽音部って聞いてカルーい音楽だと思ってたんですよ。それで、カスタネットができればなーって思って、軽い気持ちで入部しました。なので、皆さんもそんな感じで気軽に入部してくださいっ』

……………。

「……………あの人憂の姉ちゃんだろ？憂とは似てないね」

「……うん、よく言われるんだ」

『それじゃあ聴いてください、わたしの恋はホッチキス!』

ひでえ曲名だ、と感想を抱いた次の瞬間、演奏が始まった。力強いドラムが鳴り響き、それに合わせるようにギターやキーボードが呼応する。そんな賑やかな音をまとめるようにベースの重低音がリズムを縫っていく。

真剣に、でもどこか楽しそうに演奏する4人の先輩たちは、ナニかエネルギーのようなものを全開で放出していて、ひどくカッコよく俺の目に映っていた。

「すっげ……」

思わず素でそんな感想が出てきた。

その曲はまさにガールズバンドといった感じで、俺が普段聴いている音楽とは全くの別モノだった。だけど馴染みがないだけにとっても新鮮に感じて、心地よかったのを覚えている。

憂の姉ちゃんの歌声を聴き入りながら憂を見ると、リズムに乗って楽しそうに手を叩き、憧れのお姉ちゃんを応援していた。中野さんは……。

中野さんは、その小さな体で目いっぱい背伸びをして、誰よりも真剣に演奏を聴いていた。プルプルと震えるように背伸びをして演奏を凝視する彼女はなんだかとても可笑しく、そして微笑ましかった。そんな彼女の様子に憂も気付き、俺たちは何故だか嬉しくなつてクスリと笑う。

中野さんを連れてきてよかったな、と俺は思った。

結論から言うと、中野さんは軽音部に入部するコトとなった。

どうやら彼女もギターの腕に覚えがあるらしい。純とはまるきり反対で、ジャズ研はじっくりこなかったようだが、軽音部にはナニか感じるモノがあったらしい。

「緊張しすぎだったの」

「わっ、わかってるよっ」

新歓ライブの翌日、俺と憂と中野さんの3人は3階の音楽準備室——つまり軽音部の部室前にいた。

入部の意を軽音部の先輩たちに伝えるのだが、中野さんが妙に緊張しているので俺と憂で彼女の背中を押すコトにしたのだ。

「梓ちゃん、平気だよ！お姉ちゃんすつごく優しいから！ほら深呼吸して」

息を吸って吐いてと深呼吸して平常心を取り戻そうとしている中野さん。憂も一緒になって深呼吸しているのがなんか可愛い。

「スツと行って、スツと入部届渡すだけだよ。落ち着け」

そう言ったとき、俺は妙な既視感を覚えた。前にもこんな感じが、つてかしょっちゅうあったぞ……？

その既視感の正体はすぐに分かった。バスケの試合でコートインする際の緊張でガチガチになってるチームメイトだった。男なら1発頭ドツいてビビってんなよ、と無神経な発破かけられるんだけど、さすがに女の子にそりやできねえわな。

「——大丈夫だよ。なんかあったら、俺が力になるから」

我ながら凄まじく月並みな物言いだ……。

それでも、中野さんは少し驚いた顔をして、そしてゆっくりと肯いた。

音楽準備室に入っていく中野さんを俺たちは見送りながら手を振った。

「梓ちゃん、上手くいくといいね」

「心配性だなあ」

とか言いつつ、俺も音楽準備室から目が離せない。

しかし、そんな心配は杞憂だった。しばらくすると、『確保おー！っつ！』と怒号が聞こえ、直後に中野さんの黄色い悲鳴が聞こえ、ガヤガヤと楽しそうな声が音楽準備室から漏れてくる。今頃先輩たちにもみくちやにされているんだろう。

「憂、なんで笑ってんの？」

「そういうフユくんも笑ってるよ？」

「え、嘘、マジか？」

俺たちは音楽準備室を後にして、並んで帰路に着く。

「よかったね」

「ああ、よかったな」

一体全体ナニがよかったのかよくわからなかったけど、俺たちはガキみたいに笑ってよかったよかったと呟く。

「スーパー寄って帰ろうぜ。献立ナニにしようかなって。……奥さん、今日はなんかお買い得な狙いドコありますか？」

「えつとですね、今日のオススメはですねー」

そんな馬鹿な雑談をしながら俺と憂は桜並木を歩いていく。

と、平和を実感している俺だが。

数日後、中野さんと軽音部のクセの強さを思い知らされることになるとは、まだ知らない。

第4話 楽しさ成分を補充する方法

朝起きる。

歯を磨く。

シャワーを浴びる。

朝食をつくる。

朝食をとる。

テレビを見る。

今日もスポーツニュースを見れなかった。
いつまで続くんだろうか？

時は放課後、俺・憂・純のいつものメンツな俺たちは駅前の喫茶店でいつものように駄弁っていた。ちなみに本日のジャズ研は機材点検だとかでお休みである。この春にオープンしたばかりのこの店はなかなか小洒落ており、女性が好みそうなスイーツをウリに、平日にもかかわらず結構な賑わいを見せている。先日の休みに3人で買い物にいった際に発見し、ぜひまた来ようと話していた店である。

ちなみに俺は甘い食べ物とは性別関係なくワリと好きな方だと自負していたが、やはり女の子の甘いもの好きにはかなわない。各々の注文したエッグタルトとティラミスを仲良く分け合いながら本当に嬉しそうに食べている憂と純を見て、おれはそう思った。

sonだけ美味そうに食ってもらえりやお菓子も本望だろーな、と感想を抱きつつ自分のモンブランを食べようとしたが、突如乱入してきたフォークにその一部をかつさらわれてしまう。

「……食欲旺盛なんスね、純サンは」

「アンタみたいなお子様舌な男子には、この繊細な味はわかんないだろうからアタシが味わってあげてんの。フユは10円くらいの駄菓子で十分っしょ」

「どんだけ俺は舌バカなんだよ。つーか男が甘いの手手だなんて、そりゃ偏見だろ偏見。俺は普通に昔っからスキだけどなあ」

「はいはい女々しい女々しい」

「次からお前が肉食うたんびに雄々しいって言ったんぞコラ」

「はいはい聞こえない聞こえない」

「……太つても知らねえぞ?」

「女の子に対してイチバン言っちゃならないコトを……! つーかアタシ太つてないし、太らないし、毎日カロリー消費してるから大丈夫だしっ」

「まあそんな簡単にいけばこの世にダイエットなんてモン存在しねえわな」

「アタシに対してデリカシー無さすぎじゃない、フユ!?!」

ちなみにこの間、憂はずっと苦笑いである。

いつも通りの世間話が続く。

「イキナリ小テストとかあり得ないってばーマジで不意打ち」

「安心してくれ。俺も全くでんかったワ」

「フユくん、アレは中学校で習ったトコだよ……?」

とか。

「最近お姉ちゃんが、私よりギターとお話ししてるコトが多い気がするの」

「大丈夫だって、お姉さんは憂の方がきつと好きだとあたしは思うよ?」

「いや、ギターに話しかける憂の姉ちゃんの異常さに突っ込めよ?!?」

とか。

「あ、そういえばあのドラマ今晚だったよね?」

「あーあーあー、あの超クソドラマな」

「先週見逃したからって拗ねんなよ、フユウ?」

とか。

話は尽きない。そして、話題はジャズ研究会に移る。

「もー、指痛くてヤになっちゃうよ」

ホラ見て、と純は嬉しそうにマメだらけの左手を突きだしてくる。

「楽器弾くだけでこんなにマメできんのな。マジでソレ痛くねえの」

？」

「痛い！けどフコは分かっちゃないね。このマメは初心者は避けては通れない道なんだよ。勲章だよクンショー」

「純ちゃんベース弾いてるんでしょ？カッコイイなー」

「イヤイヤ、まだまだだよー」

ここ最近、純はこの話ばかりだ。よっぽどジャズ研が楽しいんだろう。やれ乙女の指にマメができた、やれ練習がキビしい、やれ先輩に褒められた、と部活のコトを話題に出す機会が多くなった。それだけ楽しいってコトなんだろう、イイコトだぜ。

「純ちゃんが部活始めてからもう一週間が経つんだね、早いなあ」

「もう一週間か。……あ。そっぴや憂、中野さんどうなん？ここ数日バタバタして中野さんと話せなかったけど、軽音部で上手くやってんの？姉ちゃんからなんか聞いてない？」

「あー、言ってたね。中野さんギター弾けるんでしょ？是非ウチに入って欲しかったあ」

「えーと、ね……」

憂は歯切れ悪そうに口籠っている。

え、なんだそのリアクション？

「コレ言っているのか分かんないけど。梓ちゃん今週から、一昨日から部活にいつてないみたいなの……」

……えっと。

「なんか偶然用事があっただけじゃないんか？」

「うん、それならいいんだけどね。お姉ちゃんがすっごく心配してたから」

先週はえらく楽しそうに部活の話してたんだけどなあ、中野さん。情報通なポツチャリくん曰く、彼女はクソ真面目で部活とかサボるタイプじゃないらしいんだけど。

「ふーん……そりゃ、気になるな」

「あれえ？フユってば、なんかえらく気になってんじゃん？まさか中野さんに……」

「あーあーあー、うつせーよ。ちょっと友達のコト心配しただけだろおが！いらんお節介焼くつもりないよ」

しかしかし。

俺は翌日、いらんお節介を焼くコトとなる。

それは翌日のコトだった。

「風紀委員とか俺のキャラじゃねえじゃんなあ」

部活をやっていないヤツは必然的に委員会に入らされてしまう法則で俺も風紀委員に抜擢されてしまった。

委員会が終わり急いで帰宅しようと、教室に戻ると。

そこには、夕日の中たった一人で教室に残る中野さんがいた。

「よっす、こんな時間まで——」

どうしてか、言葉が遮断される。

夕日でオレンジ色に染まった彼女は、一人で窓の外を見ていた。

あからさまに元気がない。

話しかけづらいのは重々承知しているけど、それでも俺は声をかけた。

「……どーしたん？」

「……んー、ちょっと休憩かな」

そう言って中野さんは力なく笑う。

その表情を見て、自分がそんな表情をしているときは恐らく一人にして欲しいときなんだろうなあ、と思った。思ったのに、俺は何か彼女の隣から動こうとは思わなかった。俺も同様に窓の外を眺める。野球部だろうか、サッカー部だろうか、ラクロス部だろうか、元気よく部活を行っている。

「……………」

「……………」

なんで軽音部行かねーの？と訊くべきだろうか？
それともナニも訊かずに普通に接するべきなんだろうか？

「あの、中野さんさ」

「……………うん？」

「やっぱりなんでもない」

「……………うん」

き、気まずい……………。

気まずさで文字通り息がつまりそうなっていると、突然アタマがブン殴られたかのように、ある言葉を思い出した。

『——そうやってね、言いたいコト言えずにウジウジ我慢してるから』

「逃げられるってかい……………」

「え？」

「あのさ、軽音部でなんかあった？」

自然と、素直に訊くコトができた。

「我ながらさ。デリカシーねーなーって思うし、でしゃばっていらん世話焼くなよって思うよ。でもさ、そんなん関係ねーじゃんよ」

喋り出した舌が止まらない。彼女にとっては探られたくない腹なのかもしれないけど、関係ない。だって。

「だって、俺がそうしたいんだよ」

たまにはこういうのも悪くないだろ？

「なんで軽音部行なくなっちゃったんだ？」

「それは……」

「言いたくないなら、言わんでいい。これ以上訊かんから。なんか美味しいモンでも食って帰ろうぜ、奢ったる。……でも、話してくれるなら聞く。気の利いたコト言えねえけど、最後まで聞くよ？」

「……なんか冬助くんって、変わってるね。学校の先生みたい」

うわぁ調子乗りすぎた、と顔を赤くしたが、後悔はない。

中野さんは学校の先生みたいな俺のコトを静かにクスクス笑い、そして少しずつ話してくれた。

軽音部は自分がイメージしていた部とは大分違ったコト。

先輩たちは優しいけれど、あまり練習に対して能動的でないコト。外バンを組もうとライブハウスに行っても、どれも軽音部のように心に響かないコト。

ポツポツと喋りだし、そして徐々に熱くなって口が止まらなくなる。愚痴でも相談でもない、表現しにくいようなやるせない気持ち、中野さんから伝わってくる。

そして、気付いたときには、彼女は泣き出していた。

「もう、わかんないよ……っ。どうして軽音部に入ろうと思ったのかっ、どうして新歓ライブの演奏にあんなに感動したのか……！」

嗚咽交じりで、溜めこんでいた感情を吐き出す。

「しばらく一緒になってやってみればわかると思ってたけど……けどゼンゼンわかんなくて……っ！」

彼女はわかんないよ、と繰り返す。
そして、とうとう言ってしまった。

「——私、もう音楽続けられないよ……！」

その言葉を聞いた瞬間、俺は奇妙な感覚を覚えた。

ナンだ、そりゃ……？

胸の奥から湧き上がるこの感情。ソレはざわりと俺の感覚を支配していく。

窓の外のグラウンドから運動部らしき掛け声が漏れてくる、まるで別世界みたいだ。しばらく、中野さんの嗚咽と運動部の掛け声を聞きながら、考える。俺はなんて声をかけるべきか全くもってわからなかった。

「今から行こうぜ、軽音部」

だから思ったコトを口にした。

「へ？……だ、だって私——」

「俺も一緒に行くから。前に言った『ナニかあったら力になる』つつうんはその場しのぎで言ったワケじゃねえぞ？軽音部辞めるなら辞めるでソレでいい。言いにくいなら俺が辞めるつつつたる。そんなときや校外でバンドなりなんなり組みやいいさ。中野さんがマジでバンド組めるまで俺と一緒に力になるよ。だから——」

俺はなんでこんなムキになってんだ？

「自分の好きな音楽までヤメるなんて、悲しいコト言っな」

「……うん。で、でも今から？」

「そう。今から。今行けなかったら一生行けねえよ、そんで一生後悔する。だから行こう」

席を立ち、強引に中野さんを連れ出す。

腹の底から湧き出すドロリとしたこの感情がなんなのか気付かないまま、俺たちは軽音部の部室へと向かった。

そして、この感情の正体に気付くコトになる。

「よし！じゃあ梓の為に演奏するか！その時の気持ちを思い出せるようにさっ」

軽音部の部長がそう言い、中野さんの為の演奏が始まった。

部室にて、俺のときと同様に泣き出してしまった中野さんを見て、

軽音部の先輩たちは演奏を始める。それは、新歓ライブで中野さんが夢中になって聴いていた曲だった。

「やっぱり、私はこのメンバーとバンドするのが楽しいんだと思う。きつとみんなもそうで、だからいい演奏になるんだと思う！」

先輩の内のひとりが、中野さんに向かってそう言った。

「さあ、一緒にやろうっつ。梓！」

そして、楽しそうに笑った。それに応えるように、中野さんも。

「はいっ！私……、やっぱり先輩方と演奏したいです！」

彼女も笑う。

吹っ切れたように。清々しく。

別の先輩に抱き着かれながらどこことなく嬉しそうにする中野さんの笑顔を見た瞬間。

俺は唐突に、今自分の胸の中で渦巻いているドス黒い感情の正体に気付いた。

それは――

「あーあーあー、嫉妬かよコレ……」

そう、ソレは嫉妬だった。

彼女のチカラになるとか、手助けするとか、そんなんは全部建前で。

結局は彼女が羨ましかっただけなのだ。

――俺はもうできないのに

——お前は好きなコト好きなだけやれる癖に

——ずるい、卑怯だ

醜く、汚く、幼稚で、救いようの無いゴミみてえな感情だった。

もう俺は必要ねえな、と思った。事実、俺の役目はもう終わった。中野さんが軽音部に戻れてよかったじゃんかよ、と自分に言い聞かす。

楽しそうにしている中野さんたちに気付かれないように、俺は透明人間にでもなったような気持ちで部室から出ようとする。

明日にでも、勝手に帰ってゴメンな一とか適当にフォローすればいいだろう。

そして、進学の為に程々に勉強して毎日を過ごすのだらう。そこにバイトして、休日には憂や純に遊んでもらって。そんな毎日を過ごすのだらう。ソレって素晴らしいコトだらう？

コレでいいんだよな？

なんで自分にこんなコト言い聞かせてんだよ。

と、ドアノブに手をかけた瞬間――

「えええええ〜っ！なんで帰っちゃうのお!？」

うるっせえ大声が部室に鳴り響き、思わず振り返る。憂の姉ちゃんだった。

「あー……、えつと。なんで……って」

間の抜けたカン高い声を喰らって、俺硬直。

「あずにゃんと一緒に軽音部に入ってくれるじゃないの!？」

あー、そういうコトね。

「や、俺は中野さんの付き添いで入部希望とかじゃないんつスよ」

当然ながら部の勧誘をしてくるだろうと予想していたので、あらかじめ用意していた台詞を言う。

ようやく頭が再起動し始めて落ち着きを取り戻してきたが、中野さんがまた妙なコトを言い出した。

「えー!? 冬助くんも軽音部入ってくれるってコトだったんじゃないの? ……あれ、え、違うの?」

……ナニソレ。

「前もさ、ちょっと言ったかもだけど、俺バイトやってるから部に入っても毎日顔だせないんだよ。だからやりたくてもムリなんだ」

「大丈夫っ! ウチは毎日出なくてもやっていけるよ! それより、まだ新人生はあずにゃんひとりだけだから、入部してくれると嬉しいな」

と、憂の姉ちゃん。

「…そもそも俺楽器なーんも弾けないですよ、バンドなんてやった

「コトないし」

「大丈夫っ！私がバッチリ教えてあげるからっ」

「……今ちよつと脚を怪我してまして。激しい動きとかできないんですよ、すいません」

「大丈夫っ！運動じゃないんだし、そんなに動かなくてもいいんだよっ？立って両手が動けばオーケーだよ！」

「……………」

えーと。

用意していた言い訳を並べても次々と被せてくるなあ、この人……。

そんでこのテの先輩が次に言ってくるコトもなんとなくわかってしまう。

「ねえ、今ナニかやってるコトとかやりたいコトあるの？」

ホラ来た。

「や、だからバイトあるし……」

シフトはほんの少ししか入ってねえのに？

「それに家事とか……」

嘘つけ、言うほどやってねえだろ？

「それに他にもイロイロ、たくさん……」

尻すぼみに小さくなっていく俺の声。炭酸の抜けたソーダみたい
にスカスカの中身のない言葉だ。マジで格好悪い。

「俺は………」

「『楽しさ成分』が足りてないんだよ、きつと！」

……へ？なんだって？

「フッフッフ、知らないの？『楽しさ成分』があるとすごい幸せ
になれるんだよっ」

憂の姉ちゃんが得意げにワケのわからないコトを言い始めた。

「顔見ればわかるよ、『楽しさ成分』が足りてないっ！……だから
ね」

全くもって不思議なコトに。

「だから、楽しいコトいっぱいしよう！」

何故だか、さっきまであった醜い気持ちはナリを潜めてしまっ
ていた。

嫉妬心は一体全体どこにいったんだ？

「バンド、楽しいよ」

そして、憂の姉ちゃんは笑った。15年間生きてきて見たコトもない、特大の笑顔だった。

そのとき、俺は誰かに強い力で背中を押されたような気がした。スゲー強い追い風が俺のコトを後押ししてくれているかのような妙な感覚を覚えたんだ。

「バカッ、そんなに無理強いしたらダメだろ、唯っ」

別の先輩が焦ったように憂の姉ちゃんに抑制をかける。

「大丈夫だよ澪ちゃん。無理強いなんてしてないよー」

「いやだって、この人困ってるだろ？そんなムリに――」

「憂の姉ちゃん」

「え？」

「……………」

「……………どうしたの？」

「……………」

勇気出せよ。

「あのさ。俺にも、できるんか、な……………」

俺、今スゲー顔赤いんだろうなあ。

「た、『楽しさ成分』……俺なんかでも、いっぱいになるかな？」

そんな俺を見て、彼女は何故かクスリと笑い、次第にソレは大きなモノになっていく。

「あっははははっ！モッチロン！私がなんでも教えてあげるよー、先輩だからねっ！」

そう言っ、彼女は誇らしげに胸を叩く。ソレは単純に先輩風を吹かしているだけなのかもしれないが、そのときの俺にはメチャクチャ心強く聞こえたんだ。

俺は、中野さんをダシにしたカタチになってゴメンな、といった気持ちで少し中野さんに罪悪感を覚えたが、気にせずに憂の姉ちゃんと向き合う。

周りに流されたワケじゃない。ハッキリと自分の意思で入部するって決めたんだ。

彼女のまっすぐな瞳を見ながら、これからお世話になる先輩たちに入部の意を伝えるんだ。

俺は気持ちを言葉にするために、大きく息を吸い込んだ。

もしも、あのとき。この先輩が、部室から出ていく俺を引き留めてくれなかったら。

俺は一体どんな毎日を送っていたのだろうか。

引き留めて軽音部に誘ってくれた憂の姉ちゃんを、俺はいつまでもいつまでも感謝するコトになる。
俺が高校を卒業したとき、軽音部のおかげでどれだけの『楽しさ成分』を内包していたかなんて。

そんなの、言うまでもねえだろ？

第5話 部活動での馴染む方法

「で、ナニが言うコトはあるか？裏切り者のフユくんよ」

「純、スマン。俺が悪かった。だから裏切りとか言わんでやってや
！」

時は放課後。

俺が軽音楽部新入部員となった、翌日のコトだった。

「『俺はバイトあつから部活動ムリなんだわ』とかー」

「うっ……」

「『いらんお節介焼くつもりないよ』とかー」

「うぐ……っ」

「ドコのダレが言ってたっけなあ？」

「あーあーあー、もう自分でも不自然だし、中野さんのケツ追っかけたカタチになったってわかってるってばさ！」

俺と純は各々の部活に行くために部室棟への道を並んで歩いている。

それで、何故か俺は純から軽音部に入部したコトをネチネチと糾弾されているワケだ。

「でもさー、フユ。実際なんで軽音部入ったの？アンタそんなやる気でもなかったでしょ、どうして？」

「んー、なんかひとりヘンな先輩がいてさ」

「ん、先輩？」

「そんで……よくわからんけど」

「けど？」

「た、楽しさ成分……」

「へ？なんだって？」

「い、いや。なんでもない……っ」

「あら、フユくん。いらっしやい」

「ムギ先輩、ちいつす」

部室に入った俺を出迎えてくれたのはムギ先輩だった。

この人の名前は琴吹紬。学年が1年上の軽音部のキーボード担当の先輩だ。おっとり系美人って感じで、実際性格もかなりおっとりしている。まだ会ったばかりでわからないけど、この部で一番包容力があるんじゃないかな。

余談だが、先輩たちはみんな俺のコトをアダ名で呼んでくれる。

この部は随分、先輩後輩間の距離が近いみたいで、俺も先輩たちのコトは馴れ馴れしくも砕けたカタチで呼んでいる。

「あれ、ムギ先輩ひとりスか？他の先輩方は一緒じゃ？」

「りっちゃんと唯ちゃんはお掃除当番なの。澪ちゃんはもうすぐ来ると思うわ」

「中野さんも同じ理由で遅れるつつてました」

ちなみに俺は昨日入部したワケだが、昨日は俺の歓迎会というコトで放課後はずっと先輩たちと中野さんとの部室でお茶を飲みながら話をして終わった。その際わかったコトだが軽音部の先輩たちはすげークセが強い。ムギ先輩は比較的マトモだと思っのだが、こ

の人もけっこう天然入ってたりして油断できない。平気で部室に टीーセット持ち込むしな。変な部室だ。

「フユくん、紅茶でよかった？あ、コーヒーのほうがいい？」

「えっと、紅茶もらっていいですか？俺お子様舌なんでコーヒーをあんまり美味しく飲めないんですよ」

そんなしコーヒー牛乳とか大好きなんですけど、と笑いながら言う。まさに子供舌だ。

ムギ先輩はニコニコしながら俺のために紅茶を淹れてくれる。昨日飲んでマジでビビったが、ムギ先輩が淹れてくれる紅茶はすげえ美味い。今まで飲んできたティーパックの紅茶はもう飲めないな。

「ブラックがどうもね、美味しく飲めないんですよ。ってそうだが、俺3つ下の妹いるんすけど、ソイツがアタマ沸いてんじゃねえかってぐらいブラックコーヒー飲みよるんですよ」

夏場の麦茶でもそんなに飲まねえだろってぐらいにカフェインを摂取する妹はもうナニ考えているのかわからん。

「フユくん、妹さんいるんだ。私一人っ子だから羨ましいな、姉妹兄弟がいたらどんなに素敵だろうってよく思うの」

「そんないいモンでもないですよー、ナツマイキだし」

4つ上の姉もいるのだが、妹以上のクセがある姉を紹介する気になれなかった。

「はい、どうぞ。冷めないうちね。お菓子もあるんだけどコレは

みんなが来てからにしましょうか」

ティーカップを俺に渡してくるムギ先輩が、あからさまに高級な洋菓子の紙袋を見せてくる。家から余ったモノを持ってきていると言っていたが、ムギ先輩はどうやらマジでご令嬢らしい。居るところには居るモンだなあ。

「あのねっ。ちょ、ちょっと訊きたいコトあるんだけど」

「ハイハイ、なんででしょう？」

「フユくんってアルバイトしてるんだよね？わ、私アルバイトにすつつごく興味あるの！」

唐突に鼻息を荒くしてコチラににじり寄ってくるムギ先輩。

お嬢様の考えるコトはよくわからないけど、金銭目的ではなくバイトそのものに興味があるらしい。手段と目的が入れ替わっているが、バイトという庶民的な雰囲気がお嬢様のツボを刺激したのだろうか。

俺は駅前の喫茶店とバーを足して3で割ったような小さな店で働いている。ホール兼キッチンスタッフだが、脚が不自由なので混雑時は裏方に回るコトが多い。

ムギ先輩も1年前に1度だけバイトをしたコトがあるらしい。唯先輩の楽器代を稼ぐために部員全員で交通量調査の短期バイトをやったコトを楽しそうに話すムギ先輩。

しばらく2人でバイト談議で盛り上がっていると、部室にニギヤカな先輩2人がやって来た。

「おっすー、やっと掃除終わったぜい！」

勢いよくドアを開けて入ってきたのは田井中律先輩。ドラム担当にして軽音部の部長である。そのちっこい体のドコにそんなエネルギー詰まってるんだよ、といった具合に激しく賑やかかつ豪快な先輩である。カチューシャで前髪を上げて快活そうなイメージを前面に押し出している。ちなみにれっきとしたオンナノコな。

「ムギちゃんムギちゃんっ、今日のお菓子ナニ？」

律先輩に続いて部屋に入ってきた人は唯先輩。

俺を軽音部に誘ってくれた先輩で、憂の姉ちゃんである。律先輩とはまた違ったベクトルで賑やかな人で、外見はよく似ているのに中身が憂と全くもって異なる仕様である。

24時間ずつと笑っていそうなイメージだなあ。ちなみにギター担当。

「おおっ？なんだなんだ、フユお前ムギと二人っきりで変なコトしなかっただろうなあ？」

「あー、俺さつきデートに誘ったら『顔がカブトムシみたいなヒトとは生理的にムリ』ってすっげえ冷めた眼で断られました……」

「ム、ムギ、お前なんてコトを……っ」

「私そんなコト言ってるじゃないっ！？」

なーんて、こんな茶番を打てるぐらいには律先輩とは仲良くなったつもりである。

本当に言わなくてもお分かりだろうが、ムギ先輩がそんなコト言っていたら俺は窓から身投げしている。

「ヘイ、フリーちゃんっ!」

やたら上機嫌な唯先輩の声。ちなみにフリーちゃんとは俺のコトである。

「フリーちゃんっ?」

「はい?」

「フリーちゃんフリーちゃんっ!」

「はいはい?」

「えへへ、呼んでみただけ」

「……………」

クスリでもキメてきたのだろうか…………? 唯先輩の天然はムギ先輩をも凌ぐぜ。

そんなこんなで4人でお茶を飲んでいると、残りの2人がやって来た。

「遅れてすいませんっ」

中野梓。俺のクラスメイトで、友達で、ギタリストで、泣き虫で、可愛い。

ある意味、唯先輩とは別に俺が軽音部に入るきっかけをつくってくれた感謝すべきお方である。彼女の熱狂的なファンであるポッチヤリくん曰く、中学校時代はけっこうモテていたそうな、ウラヤマシイ。

「おっす中野さんおつかれ。……あ、唯先輩も。お疲れ様です」

そして唯先輩が微妙な顔つきで入室してきた。

秋山澪。ベース担当で、物静かな性格、スタイル良しの超美人。俺が昨日でわかったコトはこれだけである。なぜなら――

「そーいや唯先輩ってひとりだけみんなとクラス違うんでしたっけ？何してたんですか？」

「……あ、えつと……っ。ごめん、まあ、いろいろ……」

ドモるわ、声裏返るわ、視線泳ぎまくるわでマトモに会話できないのである。昨日も終始こんな感じで、あまり話を聞くコトができなかった。こんなキレーな人と話がしたいなんてのは当然だが、ソ

レ以前に同じ部の部員として上手くやっていきたいモンである。

「あ、あー喉乾いたなあ！ムギっ、ミルクティー淹れてもらえるかな！？」

動揺を隠すように大声で話し出す澪先輩。

そして、頬を赤くして俺のコトを落ち着きなくチラチラと見ている。

……………。

誤解の無いようキツパリハッキリ言っておくが、澪先輩は俺に恋をしていてそれで緊張のあまりついそっけない態度をとってしまうのだ。とかじゃねえから！

逆に俺のコトが嫌いであんな態度をとっているワケでもないハズ。

……………ない、ハズ。

「律先輩っ 律先輩っ……………。ちょっと」

「ん？どーしたフユ？」

俺たちは顔を寄せ合ってコソコソと秘密裏に話し出す。

「澪先輩が異性に全然耐性ないコトは重々承知しましたけど。ひょっとして昔オトコ関係でなんかトラウマとかあったんすか…………？」

「お前がそう勘ぐるのもムリはないが、…………澪は単っ純に男慣れしてないだけなんだ」

「最近の女子中学生だってもうちょい小マシな対応するでしょう！？」

「お前みたいに部活入ったばっかなのにもう部に馴染んでるような人見知りとは無縁なヤツにはわかんトコだよなあ」

「ソレ部長にだけは言われたくねえわ……」

「まあ、でもクラスの男子とかにはもうちょっと普通なカンジでいるぞ、アイツは。少なくともあんなにテンパらないな」

「えー……。考えたくもないですけど、俺嫌われてる？」

「いや、そうじゃなくてさ。単純にコトが唐突だったし、部活でオトコと一緒にいるなんてのはかなりイレギュラーなコトだからさ。アタシらだってそうだし」

「俺だって零先輩と話すの緊張するんだけどなあ」

「え？なんでよ？」

「だってあんなキレイな女の人と話すなんてメッチャ恥ずかしいじゃないですか！」

「……ほー」

「あ、律先輩もすげー綺麗な女性ですからね？」

「ばっ、馬鹿！とってつけたように言うなっ！」

「痛い痛いっ！？髪引つ張んなっ！」

第6話 愛器との出会った方法

そんなこんなで、軽音部総勢6名が揃った。

「で、だ！みんな会議を始めるぞ！コラ唯、お菓子ばっか食ってんなっ」

全員が席に着いて一息ついていると、いきなり律先輩が立ち上がってそう言った。

「ハイハイっ、りっちゃん隊長！いったい何の会議ですか？」

「良い質問だぞ、唯。議題は『新入部員フユをどう育てるか』だっ！」

……………。

「要は部活においての俺の立ち位置、つまりバンドの担当楽器をナニにするかってコトでしょ？」

「いかにもっ。で、いくら素人って言っても興味のある楽器とかあるだろ？」

まあ、軽音部に入るにあたって考えてこなかったワケではない。

「フユくん、キーボードはどうかしらっ？とつても似合うと思うの」

「バカ言えっ、フユはドラムに決まってるだろ！」

「フーちゃんは私が育てるよっ。ギターだつてば！」

単純に自分の楽器をやらせたいのか、先輩たちはここぞとばかりに主張し始める。

「つーか、ひとつのバンドに同じ楽器が複数あってもいいもんなんですか？ギタリストとかは2人いてもおかしくないでしょうけど、実際のトコ音ゴチャゴチャになりませんか？」

この疑問は前々から思っていたコトだ。

「そんなコトないよ」

この素人丸出しの疑問に答えてくれたのは中野さん。ギター歴の長い彼女はイロイロと音楽知識が豊富なのだろう。

「確かに冬助くんの言う通りドラマーとかベーシストが複数いるロックバンドってのは珍しいよ。でもあくまで珍しいってだけで、ツインベースやツインドラム、ギタリストが3人だとか、逆にギターリストがいらないなんて面白いロックバンドもあるんだよ」

「へえ、思ったより枠に定まってもいいんだな」

ギター3人とかレディヘぐらいしか知らねえぞ。

「とは言っても、やっぱりロックってジャンルに限るとメンバーが

多すぎると難しくなるかな」

ギター歴の長い彼女は音楽知識が豊富なのだろう。イロイロと知ってんなあ。」

「でもね、フーちゃん。ヨソのバンドがどうだとか、セオリーだとかいうとか気にしない方がいいよ。ウチはウチ、同じバンドなんてひとつもないんだよ？フーちゃんの思うままにすればいいと思うな」

「……おお。唯先輩、今スッゲー先輩っぽいコト言いましたね！」

「でしょでしょー？ホメてホメてっ」

「つーワケでそんな唯先輩に感銘を受けたので、唯先輩と同じギターやります」

「やったーっ、フーちゃんゲットおー！！」

「て、テキトーだなあ……。フユ、そんな簡単に決めてよかったのか？」

呆れた表情の律先輩。

「まあ、全くのノープランってワケでもないですよ。唯先輩はポーカーも一緒にやりますよね、俺がギターやるコトで少しは先輩の負担減らせるかなと。それにギターの先輩は唯先輩だけじゃなくて中野さんもいる、他力本願で聞こえ悪いですけど技術教えてくれる先生は多い方がいいでしょう？」

「うん、私もソレでいいと思う。ギターパートがひとり増えるぐらいなら他のパートに悪影響しにくいだろうし。まだそっちのが作りやすい」

と、漣先輩。

「そっか、曲つて漣先輩が作ってるんでしたよね？」

「い、いや私だけじゃないよ？ムギがいないとまず上手くいかないし。他の2人にも手伝ってもらってる」

「がんばってフクくん用のパート作ろうね、漣ちゃん」

にしてもたった1年でオリジナル何曲も作れちゃうってどうよ？音楽知識の浅い俺でもソレがいかにすげえコトなのかわかる。マジで才能ある人たちなんかな。

「というコトで、めでたく我が部に3人目のギタリストが誕生した、みんな拍手！」

みんながお世辞抜きで嬉しそうに拍手してくれる。なんかこっ恥ずかしいなあ。

「あ、でも本当に俺の脚でギター演奏できるかすげえ不安です」

「昨日も言っただけど大丈夫だよ。ほら、ギー太貸したげる。提げてみなよっ？」

そう言っただけ漣先輩は自分のレスポールを渡してくれた。コレがさーんざん言っただけ愛器ギー太くんね、ギターに名前付けるとかいかに

も唯先輩らしいや。

「おおっ？思ってたより全然軽い！コレなら俺の脚でもイケそうです」
これまたなんか恥ずかしいな、一丁前にミュージシャンになった気分だ。

「ん？でもギタリストって足元でなんか力チャ力チャやってません？」

唯先輩には俺が何のコト言っているか伝わらなかったみたいだ。
ホラなんかあるじゃん、アクセルみたいにガシガシ踏むヤツだよ。

「ワウペダルっていうエフェクターの一種だよ。そんな力いらないし、絶対必要ってワケじゃないから気にしなくても大丈夫」

丁寧に答えてくれる中野さん。中野さんへの俺の信頼度が唯先輩へのソレと反比例するように上がっていく。実際中野さんの方がギターが上手らしい。唯先輩も高校から始めたんだっけな。

「でも冬助くん、去年の冬に怪我したって言ってたけどいつ頃には治るの？」

「あー、えっと、……まあ年内には完治するんじゃない？」

ちなみにこの怪我が一生治らないコトは誰にも言っていないし、言うつもりもない。バスケをやっていたコトも絶対にバレないようにするつもりである。

言ったところでナニも変わらないし、腫物扱いされるのも同情されるのもゴメンだ。なにより憂がこのコトを知ったらどんな気分

なるか。そんなん考えたくもない。

「憂ちゃん助けたっつー勲章だろ？似合わずカッコいいコトするじやんよフユ」

「本当にウチの憂がお世話になりました……」

「っていうこのくだり昨日さんっざん飽きるぐらいやっただろ！？もう勘弁してくださいっ」

「で、晴れてギタリストになったワケだが。フユ、お前ギター持ってたのか？」

「当然のごとく持っていないっすね。ココって一応音楽準備室なんだし、部の備品ってコトでボロい安物ギターとか貸してもらえませんか？」

「せっかくだし自分専用のギター買ったらどうだ？ けっこう安く売ってるぜ」

「んー、そうすべきなんでしょうけど、あんまカタチから入るの好きじゃなくて。ギターに慣れて好みがはつきりしてから追々買いますよ」

「でもココにギターなんてないと思うぞ？ あるんなら唯のギターはソレになってただろうし」

「マジっすか……、まあ一応ソコの物置探してみますね。ひょっとしたらあるかもだし」

「あ。ちょ、ちょっと待てよっ！」

立ち上がって倉庫のドアに手をかける俺に律先輩から待ったがかかった。

「フユ。その中には多分無いんじゃないかなっ？ そ、そんな気がするって多分！」

「？ ナニ言ってるんすか、開けますよ」

ドアを開ける。

目の前にゴミ屋敷的風景が広がった。

「……………」

……………。

「……先輩らって自分の部屋で邪魔なモン押入れとかクローゼットに押し込むタイプだろ？」

「あ、アハハ……。自分の部屋はけっこう綺麗にしてる、かな？」

「あ！このぬいぐるみ私のー！」

「大半が律と唯の私物だろっ！」

澪先輩の言う通り、唯先輩と律先輩の所業っぱかった。

「うわぁ、マジでカオスだ……」

山のように積み上げられたダンボール、CDに漫画本、音楽関連の雑誌や教科書、壊れかけたタンバリンやくちやくちに絡まったシールドに針の折れたメトロノーム、恐らく先輩たちがゲーセンとかで獲ったであろうぬいぐるみの数々。

何とかスペースを見出してソレっぽいモノがないか根気強く探していると、部屋の奥に古雑誌の下敷きになっている銀色のケースを発見した。

「コレなんか楽器の入れ物っぽくないですか？」

そのケースを物置から引っぱり出して、部屋に戻って開けてみる。案の定、ソコには赤色のギターが収まっていた。

「かけー。澪先輩、コレってSGってヤツ？」

「うん、SGだな。けっこう古いギターみたいだけど……——ってフユ、ギターのコトわかるんだ？」

「や、大雑把な種類だけッス。唯先輩の持つてるヤツはレスポールだとか中野さんはムスタングだとか。メーカーとかもっと専門的なコトはさっぱりです」

「ふーん、そつか。音楽に携わってないと全然知らないって人多いけど、知ってる人は知ってるモノかな？」

ポソリと呟く澁先輩に、そんなもんスね、と俺も呟く。

特徴的な面白いボディをしているソレを、ゆっくりとケースから持ち上げる。

「うっわ、カビ臭えな……。コレ音楽室の備品ですかね？なんか誰かの私物っぽいんですけど」

「どうなんだろう？少なくともアタシらのモンじゃないよな？」

一同首を横に振る。

いったいだれのギターなんだろう？

「ひょっとして昔の軽音部の先輩の忘れモノだったりして？」

そう言ったムギ先輩に、ギター忘れる軽音部員って……、と返す中野さん。

「あら、懐かしいわねえ。こんなトコにあっただんだ」

いきなり後ろから女の人の声が割り込んでくる。

そこには眼鏡をかけた優しそうな若い女の先生が立っていた。

「え、このギターさわちゃんのだったの!？」

「ソレはあんまり使ってなかったんだけどね。……って、あら。アナタが新入部員のフユくん？」

「はい、そーですけど。えっと、ひよつとして顧問の?。」

「ええ。初めまして、軽音部顧問の山中さわこです」

「どうも、これからお世話になりました」

「アナタのコトは今日りっちゃんたちから聞いているわよ?梓ちゃんに続いてものすごくヘンな面白い男の子が入ったって」

入部翌日でソレってあんま嬉しくない評価だなあ。礼儀正しい謙虚な1年坊くらい言つといてもバチ当たらんذارう?

「俺も先生のコトは部長からイロイロと伺ってます。ヘビメタ好きで、キレるとヤンキーより怖くて、女性なのに齒ギターやらかす山中センセイですよね?。」

「りっちゃん、ちょおつとこっち来なさい?。」

「あわわっ。バカフユっ、ソレ言っなつたじゃん!?。」

うはは、いい気味だぜ。

「へえー、センセイ桜校のOGだったんですね、それも軽音部の」

山中センセイを交えて、再びお茶を淹れてブレイクし出す一同。
ホントにココは軽音部か？

「ちなみにコレが現役時代のさわちゃんです」

唯先輩が1枚の写真を取り出したので、俺と中野さんは興味津々
でその写真を覗き込む。

「……………」

「……………」

なんか、デトロイトなんたらっていうマンガにこういう感じの
人いたよな……。

「その頃に使ってたってワケじゃないんだけど、こんなトコにある
とはねえ」

懐かしそうにそのギターを手に取る山中センセイ。

「うつカビ臭っ……、それに何年も放っておいたからネック反っちやってるかも……」

ギターを持ち上げて状態を確認する山中センセイ。

「フユくん、このギターを使ってあげてくれないかしら？」

「……ん、あれ？なんか押し付けられてる気がするのは俺だけ？」

「まあまあ、メンテに出せばまだ使えるかもしれないし。よかったらどう？」

「んー、でもいいんですか？コレ実際のトコ、けっこう高価なモノなんじゃないですか？」

「元々父親の友達から貰ったモノだし、……なによりちゃんと弾いてあげた方がこのギターも喜ぶと思うわよ。私はもうなかなか時間つくれないし」

「そ…っスね。じゃあ遠慮なくお借りしまっす」

「大事に使ってあげてね？」

「うん、大事にするよ。センセイありがとっ」

俺がお礼を言うと、何故か山中センセイはおかしそうにクスリと笑った。

「な、なんかおかしかったですか？」

「いや違つたよ、ごめんごめん。唯ちゃんの言った通りだなんて。

……ちよつと照れ屋さんなのに、妙に素直でとってもイイコだつて」

「うー……」

俺が照れ屋なんじゃなくて、こついうコトをストレートに言ってくる先輩や先生が異常なんだと思うけどなあ。……まあ赤面症だけだよ。

「とつ、とにかく！ありがたくこのSG借りますからねっ！？」

「フーちゃん顔ちよつと赤いよ？」

「あーあーあー、ウツサイっすよつ。ギターがあつてもアンプやらなんやら必要なモンあるでしょ？このギターがホントに使えんのかちゃんと診てもらいたいし、ここらへんで適当な楽器店教えてくださいっ」

誤魔化すように大きな声で唯先輩のからかいを遮る。

ホント天然はタチが悪いなつ。

「よし、それじゃ今からお店に出発だ！みんな準備しろよっ」

「律先輩っ、部活しないんですか！？」

「まあまあ梓、コレも部活の一環だ」

「律……練習したくないだけだろ？」

「フユくん知ってる？ネギリをすると安くお買い物できるんだよ？」

「ムギちゃん値切りとっても上手だもんねえ」

どうやら部活を切り上げてまで俺の買い物に全員で付き合ってくれるらしい。

結局のところ、みんな優しい人たちばかりだ。

みんなが帰り支度をしてバタバタしている中、俺はケースに包まれたギターをゆっくりと覗く。

不思議な落ち着いた赤い光沢を放つボディにそつと手を触れ、優しく撫でる。

「ま、ポンコツ同士いっちょ仲良くしようや。これからよろしくな」

俺はニヤリと笑い、誰にも聞こえないほど小さな声で、そう呟く。
俺に合わせるように、ギターもニヤリと笑った。

そんな気がして、早く弾いてやりたいな、と強くそう思った。

第7話 澪先輩の壁を壊す方法

顔文字、絵文字等は省略

TO：律先輩

SUB：どーだった？Re：Re：Re

TEXT：大げさでもなんでもなくマジで息がつまりそうだったん
スからね！？俺がどんなに話題振っても澪先輩モゴモゴしてるし

TO：フユ

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re

TEXT：アハハ、それメツチャ想像できる（笑） まあ、学校か
ら帰る方向がアタシらと一緒にコトを呪うんだな

TO：律先輩

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re

TEXT：や、別にイヤってんじゃないですけどね。つーか、律先
輩挟んで3人で帰るトコまでは澪先輩フツーにしてるんですよね、
律先輩と別れて2人になった途端……

TO：フユ

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：アイツもイロイロ困ってたよ。お前が入部した日の晩なんて『リツ、どうしようどうしよう！？』って半泣きになりながら長電話されてホント大変だったんだからな？

TO：律先輩

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re
TEXT：そ、そこまで……。前も訊きましたけど、昔なんかあったわけじゃないんでしょ？クラスの男子からイジメられてたりだとか、片思いの先輩にひでえフラれ方したとか

TO：フユ

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re

TEXT：そーいうわかりやすいのはないな。ただ、漑はモテる上にイジられ体質だし、小学校のときなんかは男子からよくちょっかいかけられてたよ。子供特有の屈折した愛情表現ってヤツ？

TO：律先輩

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re

TEXT：なるほど、律先輩は漑先輩を守るためにそんな悪ガキを片っ端からボコボコにしてっただんですね？スゲーなあ

TO：フユ

SUB：どーだった？Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re

本格的に俺のギター練習が始まった。

放課後、いつもの部室で俺は中野さんにギターの基礎を教えてもらっている。澪先輩たちは曲のパートいじりに四苦八苦しているので全体練習ができないウチに、とここ数日中野さんにマンツーマンで鍛えてもらっているワケだ。

ちなみに唯先輩はあれだけ俺にギター教えると豪語していたが、俺に奥義を伝承してから飽きたらしく、中野さんに匙を投げたようだ。とんでもねえ先輩である。

ちらりと横目で唯先輩を見てみると、お茶しながら楽しそうに律先輩と話し込んでいる。

「よそ見しないっ！集中しなきゃダメだよ」

そして、中野さんは意外とスパルタだった。けっこう怖い。

「中野センセイ……指すつげえ痛いです」

「マメできるまでの辛抱だよ、誰もが通る道なんだから」

純も似たようなコト言ってたっけなあ。

俺の左手の指は弦との摩擦で若干赤くなって腫れている。

「続けるよ？スローテンポでいいからEADGの順にコードチェンジしてみて」

今練習しているのは、コードの練習である。決められたフレットの弦を押さえながらピッキングを行うという、ギターにおいて必須なのだそうだ。

メトロノームを使いながらおぼつかない指運びでジャカジャカとス

トロークを繰り返していく。ちなみに山中センセイから借りているこのギターは、先日メンテに出してみたところコレといって異常はなかった。思ったより保存状態が良かったらしい。

「じゃあ次はFね。二ガテ意識払拭して、がんばってやってみて」

「うわぁ、出たよF」

メジャーコード、マイナーコードで俺はこのコードが一番苦手だ。なんとかフレットを押さえていざ弾こうとしてもヘンテコなビビリ音がするだけだ。それで指がすげえツリそう。

「こんなんよくできるよなぁ、みんな」

「まあFコードは初心者の壁って言われてるぐらいだからね。でも慣れると本当に簡単だよ」

「ホントかよー？……俺って指短えのかな？けっこう手え大きい方だと思ってたんだけど」

「そんなのは甘えだよ。ほら、私なんてこんなに掌小っちゃいんだから」

そう言って、中野さんは右手を広げて見せる。確かに小さい。

俺は中野さんの右手に合わせるように自分の左手をピタリとくつつけて、比べてみる。

「げえ！？中野さんの手、こんなに小さいん！？……こんなんでよくあんなに指廻りまくれるなぁ」

「……………っ」

「中野さん？」

手を離す。彼女は何故か顔を赤くして、自分の右手を見つめている。

「おーい、どしたん？」

「……………な、なんでもないつ。ホラ練習続けてっ！」

「お、おお。なんでそんな慌ててんの？」

そのとき、挙動不審な中野さんの背後から唯先輩がにゅっと現れ、彼女に抱き着いた。

「なーにしてるの、あずにゃん？」

「ひゃああっ！？唯先輩っ、いきなり抱き着かないでください！？」

神出鬼没な唯先輩は、中野さんのコトをあずにゃんと呼ぶ。……まあちよつと猫っぽいけどさあ。

こんなバカ騒ぎに便乗しようと律先輩もニヤニヤしながら近づいてくる。

……………もうぜってえ練習できねえワ。

俺はギターを長椅子に立てかけ、そんな先輩たちと入れ替わるようにテーブルの方に近づいた。

「おつかれっす、ムギ先輩、漣先輩。アレンジの調子どうです？」

テーブルに散乱したTAB譜や楽譜とにらめっこしている2人に俺は声をかけた。

席に着き、すっかり冷めてしまった紅茶を煽る。

「ごめんねフクくん、まだもうちょつとかかりそうなの」

「いえいえ、むしろゆっくりやってくれた方が俺の基礎練習時間が増えて嬉しいっていうか」

「フクくんすごいがんばってるね。ギターの才能あると思うわ」

「中野センセイと唯センセイの教え方がいいんじゃないかなあ？」

「フフっ、そうかもね」

俺とムギ先輩がこんな風に話していても零先輩は落ち着きなくソワソワしている。

「零先輩も。俺の所為で全体練習できなくてすいません。それにそんな根詰めてやらんでも大丈夫ですからね？」

「あ、ああ。フクが気にするコトじゃないからっ。平気平気！」

そう言っつて、零先輩はぎこちなく笑う。

零先輩は俺に対して今みたいによく笑う。他のみんなに見せる笑顔とは全く違う、ムリしてつくった嘘の笑顔だ。

零先輩は俺に気を遣ってくれている。

俺は、そんな風に零先輩にこんな笑わせ方をさせてしまっている、そんな自分がひどく情けなかった。

「じゃあな、また明日っ。漣、フユ！」

帰り道、いつものように律先輩が別れの挨拶をする。

「あ、そうだ。……頑張れよ、フユう？」

「あーあーあー、うっせっ」

そう言っつて、律先輩は悪戯っぽく笑いながら家に入っていった。

……漣先輩と二人っきりだ。

「ん？フユ、頑張れってなんのコトなんだ？」

「あー、や、別に気にしなくていいですよ。しょーもないコトっす」

「？」

俺たちは2人で歩き出す。

カコカコと俺の突く杖の音がやけにクリアに聞こえてくる。

「すみませんね、歩く早さ合わせてもらって。フツーこういつのつて逆じゃないツスか？男が女に合わすのが普通なのに」

「い、いや別にいいよ。私も歩くの遅いし……」

「へえ、意外だなあ。漣先輩、脚なげーから、なんか歩くの早そうな印象です」

「そ、そうかな？」

「そんで律先輩みたいに小っちゃい人は歩くの遅えイメージ。うはは、完全な偏見だけど」

「そ、そうか……」

「俺も怪我する前から歩くの遅かったから、大変なんですよ。朝、何回も遅刻しそうになったし。まあ寝坊が原因なんですけどね」

「そ、そっか……」

「ええ、そうなんですよ……」

「うん……」

「……………」

「……………」

もう慣れっこだが、会話が止まってしまった。

うーん、どうしよっかな。

こないだ購買で漑先輩と間違えて話しかけたら全然知らないヒトでナンパと勘違いされて大恥かいたコト話してみようかな。それとも別の――

「ごめんな、フユ………」

「え？」

唐突にポツリと漑先輩が呟いた。

「自分でもわかってるんだ、このままじゃダメだって。せっかくフユは気を遣ってイロイロ話しかけてくれたりしてるのに………」

「漑先輩………」

「律たちみたいに自然に良い先輩でいれないんだ………」

「……………」

「後輩にこんなに気を遣わせて、なのに自分はナニもできなくて……。私、先輩失格だ……。っ」

俺だけじゃなかった。

相手に気を遣わせている自分を齒痒く思っていたのは、俺だけじゃなかったんだ。

俺と澪先輩は、同じコトで悩んでいたんだ。

「唯先輩なら、こーいうときなんて言うかなあ？」

「…………え？」

「『気にしないでいいよ』…………は、なんか違いますよね、月並み過ぎる。うーん…………」

「ふ、フユ？」

「『美味しいもの食べてゆっくり寝れば、きっと万事オーケーだよ』とか？…………あー、言いそう。つーか絶対言っな、あの人なら言う言う」

「さっきからナニ言っ…………」

「唯先輩はすごいよな。言いたいコトを誰にでも好きなだけ言えて感情に蓋せずに好きなように生きて。それでいて周りにいつも人がたくさんいて」

澪先輩が俺をじっと見ている。

「たくさんの人から、好きになってもらえる」

「……………」

「たかだか出会って数日だけど、俺は唯先輩が羨ましい」

気付くと、俺も澪先輩も、足が止まっていた。

「それで、そんな風に唯先輩のコト思ってるのは、多分俺だけじゃない。…… 澪先輩も一緒でしょう?」

「……うん、唯はすごい。私は、唯みたいになりたかった」

「でも、俺たちはどうやったって唯先輩にはなれないワケで、……えっと。ん?あれ?…… 結局ナニが言いたかったんだっけ? あれ、やべえ……っ」

俺が話の着地点を見失ってワタワタと混乱していると。

「……ふふっ」

そんなテンパる俺を見て、澪先輩がクスクスと笑っていた。

…… 結果オーライ、か?

「とにかく俺が言いたかったんは……、俺と澪先輩ってちょっと似てんね」

「うんっ。私も今、同じコト思った」

「ま、ガンバリましょうよ」

「頑張るってナニを?」

「さあ、なんスかね?」

「なんだ、そりゃ」

そう言って、俺たちは顔を見合わせて、おかしそくに笑った。

「あ、澪先輩っ。今度俺にベース教えてくださいよ、ベースっ」

「バーカ、フユはそれよりギター頑張らなきゃだろ？」

「じゃあ、約束っすよ？俺がみんなの足引っ張んないくらいにギター上手くなったら、ベース教えくださいね」

「ま、しょうがないな。そのときは私がフユのベースの師匠だからな」

澪先輩は、少し嬉しそくに、ニッコリと笑った。

ソレは今まで見てきた嘘の笑顔とは違う、とても素敵なモノだった。

SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re
TEXT: つーワケで、漣先輩いつか俺にベース教えてくれるって
!マジで嬉しいなあ!

TO: フユ
SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re
TEXT: お前、さっきからテンション高スギ

TO: 漣先輩
SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re:
Re
TEXT: なんスカ、せつかく漣先輩の壁崩壊記念の報告なのに

TO: フユ
SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re:
Re: Re
TEXT: ベルリンの壁崩壊記念みたいに言っなよっ!?

TO: 漣先輩
SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re:
Re: Re: Re
TEXT: いやー、ホントに嬉しい。あ、ソレに漣先輩初めてフ
ツーに笑ってくれたし!

TO: フユ
SUB: やったぜ! Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re: Re:

Re:Re:Re:Re

TEXT:……言つとくけどな、薄に手え出したらぶっつ殺スからな、ゴラァ!?

TO:律先輩

SUB:やつたぜ!Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:Re:

Re:Re:Re:Re:Re:Re

TEXT:ええ?何キレてんの、この人……?

第8話 梓との距離を縮める方法

世間はゴールデンウィークだなんだと騒いでいるが、実際いかなモノだろうか？

普段の土日のようにハッキリと短いワケでもなく、夏休みのようにガツツリと長いワケでもなく。中途半端な印象が否めないのは俺だけじゃないハズだ。誰だって学生、社会人、主婦共々同じコト思うハズさ。つまりさあ。

ゴールデンウィーク短すぎだろ！もっと遊ばてえよっ！……である。

気が付くと、ゴールデンウィーク最終日になっていた。

憂たちと隣町まで行ってB級映画を観てきたり。

ポツチャリくんの家で他の男友達たちとオールナイトでワイイレ大会をしたり。

唯先輩の家で軽音部のみんなと鍋をしたり。

朝から晩までバイトしたり。

二輪の教習所に行ったり。

光陰矢の如しと言うが、あまりにも早すぎる。ゴールデンウィークが始まったのがつい昨日のように感じるのだ。

さて、泣いても笑ってもゴールデンウィークはあと1日。

どう過ごしてやろうかなあ、と朝を迎えたのだが。

姉の部屋で、珍しいモノを発見した。

M x P x の T h e B r o k e n B o n e s を流しながら時間を潰していると、待ち合わせの時間の5分前に、中野さんがやって来た。

「ごめーんっ冬助くん！待たせちゃった？」

「やーやー、俺もさつき来たトコだから。それよっかムリに付き合わして悪いね、中野さん」

イヤホンを外し、i P o d をポケットに突っ込みながら応える。

「そ、そんなコトないよっ。私今日ヒマだったしっ」

駅前の広場でこんなやりとりをしている俺と中野さん、まるでこれからデートにでも赴くような風で個人的に非常に嬉しいのだが、残念ながらそんなハッピーな出来事ではない。

「そーいや、中野さんの私服初めて見るなあ。すげー新鮮、似合ってんね」

こういうとき、『可愛いよ』とか『素敵だね』とかサラっと言えたらいいのだが、ガキ特有の青臭さが邪魔して言うコトができなかった。我ながらガキだよなあ。

中野さんは、セーラーシャツに春らしいライトグリーンのカーデイガンを小慣れた感じで着こなしていた。クロップドパンツからのびる脚先はハーフブーツでシックにまとめられている。小さな体にちよつとギャップがあるくらい大きなトートバックが彼女の可愛さに拍車をかけていた。

……ハッキリ言つて、超可愛かった。

「ありがとうつ。冬助くんも……か、かつこいいよ……っ」

中野さんがモゴモゴとナニか言つた気がしたが、よく聞こえなかった。

ちなみに、野郎の格好なんてどあでもいいわ！という意見が多数だと思うが。俺はマリンカラーのボーダーにブルゾンを羽織っている。履き慣れたカーゴパンツにお気に入りのブーツスニーカーをつっかけ、背中にはケースに包まれた——アコースティックギターを背負っていた。

「ソレが電話で言つてた冬助くんのお姉さんのアコギ？」

「おおよ。姉ちゃんの部屋でさ……あー、ウチの姉ちゃんさ、一人暮らししてて、引越してからまだ1度もこの町の新しい家に帰ってきてないんだ。だから荷解きできてないダンボール山ほどあつてさ、そんでソレ片づけとけとか言いやがるんだぜ？あのアホ姉は。そんでしぶしぶ荷解きしてたらこのアコギ発見したつてワケよ」

「大学生なんだよね、冬助くんのお姉さん。でも、勝手に持ち出し

ちやってよかったの？」

「ヘーキだよ。さっき電話して訊いてみたら持ってたコト自体忘れてやがったワ。それで『んなモンくれてやる』だってさ。アイツはコロコロ趣味変わるからなあ」

よく言う就多趣味だし、悪く言うと熱しやすく冷めやすい。まあ、あの人はそんなコト一切気にしないんだろうけど。

「……ったく、ゴールデンウィークぐらい帰って来いっつうの」

「ふふつ、仲良いんだね、お姉さんと。なんかそんなカンジする」

「ドコが？あの人がちよつと普通と違うだけだよ」

俺たちは目的地に向かって歩き出す。

「で、せっかくだからこのアコギ使ってやろうと。それで、状態どうなんだろうとか、弦ナ二使ったらいいんだろうとかわかんないコトいっぱいだったんで、俺のギターの師匠にご登場願ったって流れよ」

「なるほどなるほど。ところで純も言ってたけど、冬助くんって方向オンチなんだったよね？つまり『10GIA』までひとりで辿り着けるか不安だったと。なるほどなるほど」

「……ナ、ナ二言ってんすかナカノサン？」

「方向オンチだったと」

「ばっ、馬鹿言っなっ！方向オンチとかじゃなくて、コレはだ……。なんつーか、土地勘が人より芳しくないというか、地図が嫌いというか、なんというかだな」

「大丈夫だよ？ちゃんと私が連れてってあげるからね」

「だから、その子供あやすみたいな言い方やメテ！？」

「へへっ、やった。ピックおまけしてもらったよ」

10GIAと呼ばれる近場の楽器店にて、用事はあっけなく終わった。前回の山中センセイのSGと同様にアコギをメンテに出し、中野さんオススメのアコギの弦を数セット購入し、ついでに弦を張り替えてもらった。

「冬助くんって、スグに誰とでも仲良くなるよね」

「や、あの店員さんはソレが仕事じゃんよ。俺がどういふじゃなくてさ」

「そーかなあ？」

なんて、話しながら店を出る。

「あ、そーいや、中野さん昼メシもう食った？まだなら奢るよ、付き合ってくれたお礼に」

「え？そんな、いいよ。悪いし」

「遠慮すんない。貴重な休日潰させてまで付き合わせてんだからさ」

なんだか、食欲を刺激する良い匂いが漂ってくる。商店街の屋台のタコス屋だった。中野さんとぼっちり目が合い、即決。本場メキシコ仕込みと大それた売り文句の本格的なタコスを2人分購入し、その足で自販機へと向かう。

そして、俺たちは近くにある河川敷に陣取って腰を下ろすことにした。このでっかい河なんていう名前なんだろう？

「今日は暖かいなあ」

上着必要なかったな、と俺はブルゾンを脱ぐ。そーだねえ、と中野さんもカーディガンを脱いで綺麗に畳み、トートバックに仕舞う。河川敷にはちらほらと人の影が見える。川の向こうには釣りをしているオッサンがいるし、一家団欒の散歩をしている家族やキャッチボールをしている子供たちもいる。

中野さんにタコスと飲み物を渡し、俺たちは食べながらしばらく

イロイロな話で盛り上がった。

お互いゴールデンウィークをどうやって過ごしたかとか。宿題をちゃんと終わらせたかとか。ゴールデンウィーク中に部活が1度しかなかったのは少ないよなとか。でも、その日の晩にみんなで食べた鍋すげー美味かったなとか。好きな音楽の話や最近のテレビの品評とか。しょーもない冗談を言い合って、互いに笑いあう。

恐らく中野さんと2人でこんな風にじっくりと話すのはコレが初めてで、だからこそ俺たちは食事が終わっても河川敷から動こうとせず、本当にイロイロなコトを話し合った。

「はー、なんか気持ちいいな。私、寝ちやいそう」

そう言って、中野さんはごろんと河川敷に寝転がった。

俺も真似するように、ごろんと寝転がる。

話がひと段落し、少しの間静寂が訪れた。

太陽光を乱反射してキラキラと光る河面やゆっくりと流れる雲を見ながら、俺はのんびりこう思った。

「あ。今すっげー時間がゆっくり流れてるなあ。時速何キロぐらいだろ？」

「えー？時間なのに時速ってヘンだよ」

俺が何気なく言った言葉に対しておかしそうに笑う中野さん。

「まあヘンだけどさ。でも、時間ってその場で進む速さが違う気するんだよな。遊んでて楽しい時だとスゴイ速くて、時速300キロって感じ。逆につまんねえ授業受けてる時なんてのは遅くなる、時速1メートルかな」

「あはは、なんかソレわかる。」

「で、今の時間の速さは。ヒトの歩く早さが時速約5キロだから…
…時速3キロぐらいかなあ、今の時間は」

「なんか面白いね、確かにゆっくりだ」

「うん、落ち着く」

再び互いの声が途切れる。

「……なんか、俺。こーいうの、初めてかも」

「え？」

「俺さ、今までの人生すげー充実しててさ。でもどこか、体力っていうか精神っていうか、そんなんを削ってきた感じで余裕があんまりなかったんだよな。当然後悔なんかしてないし、むしろそんな風に戻りたいって思うけどさ」

河の傍で遊んでいる野球少年たちの楽しそうな声が聞こえてくる。

「でも、だから。こんなふうに、時間の速さが肌で感じ取れるくらい、贅沢に時間を使うの初めてなんだ」

ソレが良いコトなのか悪いコトなのかよくわからないけど。
悪くない気分だと、そう思った。

「私も。……高校入ってこんなにゆっくりしたの、初めてかも」

悪くないね、と彼女は眩き、うん、と俺も眩く。

「まあ、今でも十分すぎるぐらい充実してるけどな！」

「そうだね。冬助くんはとりあえずもつとギター練習して、もつと上手くなってもらわないと」

「はい、そりやもう中野センセイの弟子なんだから期待しててくださいよ」

俺の軽口に彼女はクスクス笑う。なんか猫みたいだなあ。

あ、そーだ。俺はあるコトを思いつき、傍らに置いてあるアコギをケースから取り出す。

「中野センセイ、なんか1曲弾いてみせてや」

「え？や、ヤダよこんなトコでっ！恥ずかしいってばっ」

「いーじゃん、いーじゃん。弟子に見本みせてくれよ」

俺は手早く自分の耳を頼りに大雑把にチューニングを済ませ、強引にアコギとピックを中野さんに押し付ける。

中野さんは、仕方ないなあ、と眩き、しぶしぶとアコギを構える。

「もっつ……。じゃあ、ちよつとだけだよ？」

じゃらん、とエレキギターとは全く違う生の音がギターから漏れてくる。

その曲は先輩たちが作った曲、『ふわふわ時間』だった。慣れないギターだというのに、そんなコトを微塵も感じさせない流麗な演

奏だった。

演奏が終わる。ヒュウ、と口笛を吹きながら、俺は感嘆の拍手を送った。

「やっぱ、中野さんすげーなー！それにアコギだとこんなにも音が違うモンなんだな。面白いや」

「なんってったって生ギターだもん。本来のギターの音っていうのはこんな感じなんだよ」

確かにエフェクターとかで歪ませてるモンなあ、エレキって。

「はい、冬助くん。見本みせたよ？次は弟子の番でしょ？」

と、少し意地悪そうに笑って、アコギをこちらに渡してくる。

「おお、やっぱそう来るか……」

余計なコト言わなきゃよかったか？

つつても、ふわふわ時間の俺のパートまだ出来てないじゃんすか。

「よし、ならコレでいきまっす」

俺は結構簡単でちょっとだけ練習してみたあの曲をやってみるコトにした。

原曲のテンポよりトロいスローテンポだが、ゆっくりと単調なストロークを繰り返す。

「Desmond has a barrow in the market place」

Molly is the singer in a band
♪」

そして軽く息を吸って、アコギから流れるメロディと一緒に歌い始める。

「Desmond says to Molly girl I
like your face ♪
And Molly says this as she takes
him by the hand ♪」

体から妙な分泌液が出てきてるみたいに、不思議と気持ちがいい。

「Ob-La-Di ! Ob-La-Da ! life goes
on bra La la how the life goes
on ♪
Ob-La-Di ! Ob-La-Da ! life goes
on bra La la how the life goes
on ♪」

ジャカジャン、と最後だけカッコつけて弦をかき鳴らして演奏を終わらせる。

「ビートルズで、Hey jude の次に好きなんだよ、この曲」

思ったより大きな声で歌ったので周りの人たちがこっちを見ている。……恥ずかしい、調子に乗って歌うんじゃないかった。

中野さんを見ると、何故だか彼女はハトが豆鉄砲喰らったかのような呆けているのが驚いているのかよくわからない表情をしていた。

「で、どースか？中野センセイ？」

「ぎ……」

「ぎ？」

「ギターは下手くそ、でも……」

「……そっすか」

思わず、シヨボーンとなる俺。

「い、いや、そんなコトよりもっ！」

「そんなコトとか言うなよっ、コレでも家でコツコツとギター練習してたんだぜ？」

「や、だからそっじゃなくてっ。……歌だよ歌っ」

「歌？」

「うん、すごいよ。なんか……言葉にできないけど、スゴイ！」

「そっちよりギター褒めてもらいたかったなあ」

「歌すごいものにな……。まあギターは練習するしかないよ」

「はい、がんばります……」

そう言っつて、俺は拗ねるように再びごろんと寝転がる。

中野さんも続いて寝転がる。
なんかもうココから動ける気しねえな。

「あーあーあー、もうナニもする気が起きん」

「ダメでしょ、冬助くん。まだ宿題全部終わってないじゃん」

「そーだけどさ、中野さんだって完璧じゃないだろ？数学の応用問題んトコ謎つつってたじゃんよ」

「うん、困った。どうしよう？」

「こりゃ、憂に教えてもらうしかねーな」

「……ねえ、冬助くん」

若干トーンが低い声が聞こえる。体を起こすと、中野さんが神妙な面持ちでこちらを見ていた。

「あのさ、冬助くんって憂と……」

「ん？ナニ？」

「……………」

「なんて？」

「だから……………」

顔真っ赤で、挙動不審な中野さん。自分の手と俺へ視線が泳ぎまわっている。

なんだ？ 零先輩のモノマネだろうか？

「憂がどしたん？」

「憂とさ、付き、あつて、る……の？」

「……………」

「付き合ってるんじゃない、の？」

ひょっとして、周りから見たら俺と憂ってそんな感じなのだろうか？ いや、ソレってけっこう嬉しくね？ ……って違う違う！

「や、憂とはそんなじゃないよ。ただの友達って言うのはなんか悔しいけど……、まあ仲良い友達だよトモダチ」

「そ、そっか……。そうなんだ……」

そっかそっか、と安心したように繰り返す中野さん。

「あ！まさか、あの事故のコトで俺が憂にナニか脅迫してんじやねえかって、憂を心配してんのかっ！？ひでえなっ、俺そんな絶対しねえよ！」

「ち、違う違うっ！そうじゃなくて、……や、もういいデス、今言ったコト忘れて……っ！」

うーん……。時々だけど、中野さんマジでナニ考えてんのかわからんときあるよなあ。

「憂はさ、かなりモテルし、俺なんてアウトオブ眼中だな。けど、友達としてなら仲良くしてくれる。事故のコト抜きにしたってね、構ってくれるワケよ。人と仲良くなりやすいつつつか」

「そこらへんさすがは唯先輩の妹って感じだよね」

「そう！俺もそう思う。……でもさ、人と仲良くなれるなれないとかじゃなくてさ、常に人と仲良くなりたいたいって思っときたいよ、当然のコトだけどさ」

「……うん」

「俺もそーだし、そっちだってそーだろ？」

俺の言葉に彼女が深く肯いた。

「冬助くんは――」

「じゃあまず第一歩だな。コレ言つの何回目かわかんねえけど。
…『フユ』でいいよ」

「あ……」

「言つとくけど、呼ぶまですつと言いつけるかな？」

「……けっこー、ガンコだね。『フユ』ってさ」

そう言つて、彼女は笑つた。

「まあね、数少ない俺のセールスポイントさ」

なんてコトない、ほんの小さな些細なコトだけど。
やっぱり、俺は嬉しかった。

そんな俺の嬉しさが彼女にバレないように、そつぽ向きながら立ち上がる。ギターと上着と杖を引っ掴み、思いつく。

「よっし、今から憂ん家遊びに行こーぜ？」

「ええ！？今から？」

「そう今から！少なくともダラけきつた姉ちゃんがいるだろ？」

そして、俺はついつい子供のように笑ってしまう。

「行こうぜ、梓」

「……うんっ、フユ！」

梓もすげーイイ笑顔で笑ってくれたんだ。

互いが互いに近づこうって思えたなら。

ソレはとっても素晴らしいコトなワケで。

こうやって、少しずつ距離を縮められたらいいな、と俺は思った。

「あ、もしもし憂？今からヒマ？今さ、梓と2人でいてさあ——」

第9話 さわ子センセイの悪巧みに乗る方法

仲間の声援、監督の怒号、ボールのドリブル音、バッシュのスキール音。

マッチアップのマークを外してフリーになった瞬間、パスが回ってくる。ボールミート後、フェイクをひとつ入れてディフェンスを振り切って、スリ！。年に数回しかない本当に調子がいいときの打った瞬間に入るとわかるシュート。パツンと小気味いいノータッチでのネットの音が聞こえる。湧き上がる歓声。

相手の不注意なパスをカットして再び攻守交代。目線でパスフェイク入れて、クロスオーバーでマッチアップのディフェンスを抜き去る。しかし相手チームのリカバリーが早い、捕まりそうになったときチームメイトがいいタイミングでスクリーンをかけてくれる。ピックロールで中に入ってきたチームメイトにパスを出す、どフリーでレイアップ。チームメイトとハイタッチしながらディフェンスに戻る。あと何点差だ？

ウチのセンターががちりとディフェンスリバウンドを獲る。ソレを横目に全力で走る。仲間のガードからドンピシャのパスが通り、速攻！と誰かが叫ぶ。絶好のカウンターチャンスでドリブルをする俺の前には誰もいない。

最高だ、やっぱりバスケットは最高だ。
最高に気分が良かった。

ところが、いつまでたつてもゴールに辿り着かない。なんでだ、こんなにコート広かったっけ？

それでもドリブルを続けていくと、ナニかに蹴っ躓いて派手に転んでしまう。

ソレは何故か、俺がいつも使っているSGだった。

いつも？……そうだった、俺は軽音部員だった。なんでだっけ？
兎にも角にもなんでこんなトコにギターがあるんだよ、と疑問に思っ
て辺りを見回すと、ココはバスケのコートではないコトに気付いた。

俺は道路の真ん中でギターを抱えて突っ立っていた。

いきなり憂の声が聞こえて、そちらを振り向く。しかし、ソコには憂はいなかった。

代わりに自動車がコチラに向かって走ってくる。

クルマが。

猛スピードで。

迫って。

ベッドから落っこちて、目が覚める。

「あーあーあー。ホント、素敵な夢だったなあ……っ」

汗だくのシャツを脱ぎ捨てて、俺は泣きそうになりながら、そう呟いた。

カッチカッチとメトロノームの刻む音に合わせてギターをかき鳴らす。TAB譜をチラチラ覗きながらなんとかコードを押さえてストロークを繰り返す。

時刻は午前7時過ぎ、場所は軽音部室。

ゴールデンウィーク明け以来、俺は1、2時間早く登校して、朝練を行うコトが日課となっていた。

元々中学校時代は毎朝5時起きで、バリバリ朝練をしていたので大した苦でもない。むしろ5時起きが体に染み込んでしまっているので、下手に早く起きて2度寝で遅刻しそうになるコトも少しはなかったので、都合がよかった。

ナニより、もっともつとギターが上手くなりたかったのだ。

つーワケで練習練習。マメだらけの左手でコードを押さえて、右

手でひたすらピッキング。

今日もこんな感じで練習をしていると、いつもは来ないハズの来訪者が現れた。

アンプから流れる音の中、誰かがドアを開けた気配がした。

「おはよう、フユくん。朝から精が出るわねー、ひよっとして毎朝やってる?」

我らが軽音部の顧問、さわ子センセイだった。

「おはようございまっす。まあ、ちょっと前からスね。ところでセンセイどーしたんですか?」

「譜面台借りに来ただけよ。それにしてもちよつと音大きいんじゃない?廊下の時点でギターの音聞こえてきたんですけど」

「あはは、スンマセン。自分の部屋と違って、爆音出せるのが嬉しいくて、つい……」

SGを立てかけ、俺は張った肩をほぐしながら長椅子から立ち上がる。

「俺今から休憩入れますけど、センセイちよつとお茶飲んでいきません?」

「んー……、そうね、じゃあ一杯だけいただくわ」

俺に気を遣ってくれたのかそれとも本当に飲みたかったのかわからないが、センセイはテーブルの席に着く。

「合唱部の顧問もセンセイがやってるんでしょ？ 大変だなあ」

お茶の準備をしながらセンセイに話しかける。ムギ先輩ほどじゃないが、俺だって多少はマトモなモン淹れられるようになったんだぜ。

「いやいや合唱部のコたちは良い意味でクセがないからやりやすくて助かってるわ、軽音部と違ってね？」

「オーイ、目の前に軽音部員いんぞー」

おかしそくに笑うさわ子センセイ、なんつう人だ。
オレンジペコの入った高級ティーカップを先生に渡す。

「ありがと。……それにしてもフユくん、随分ギターに慣れてきたみたいね。前聴いたときよりかなり良くなってる」

「ホントですかっ？ そりゃー嬉しいなあ。きつと使ってるギターが優秀なんですね」

「漣ちゃんが言ってたわよ？ フユはすごい頑張ってるって、努力家だつてさ」

「漣先輩と梓は練習るとき俺に厳し過ぎですよ。もっと後輩を労わるように言っといってください」

「そんなコト自分で言いなさい」

「ヤですよ、また殴られる」

「ホント、仲良いのねー」

クスリと笑いながらお茶を飲むセンセイ。……やっぱ男子生徒から人気あるだけあって、えらく様になっていた。外見だけな。

「ところでなんでアナタひとりなの？他のコたちは？」

「あー、言っていないッス」

「言っていないって……」

「別にいいでしょう？ムリに付き合わすのもなんか悪いし」

「あのコたちなら喜んで練習に付き合ってくれると思うけど」

「そうですか？律先輩なんてメンドクセーとか言いそうだし、唯先輩なんて物理的に来れないでしょう、遅刻魔だもん」

「でも、なんだかんだで協力してくれるハズよ」

「そつすね、みんな優しいから。でも、そもそも俺はそんなみんなの足引っ張りたくないからこんな練習してるワケで」

「なーんか……。焦ってるとまでは言わないけど、肩に力入りすぎね」

「……………」

そう言って、さわ子センセイはティーカップに口を付ける。その表情はドコか呆れた感じの色が見え隠れしていた。

「アナタの手のマメ見ればよくわかるわ。尋常じゃなく練習してるでしょう？この朝の時間にしたってそうだし、家でも相当ギター触ってるんじゃない？」

確かに生活のスタイルが激変するほど俺はギターをいじってる気がする。

「まるでソレが悪いコトみたいですわね、センセイは」

「もちろん悪いコトじゃないわ、それだけ努力してるってコトだもの。でもね、……やっぱ肩に力入ってるっていうか、どこかムリしてるように私の眼には映るのね」

「センセイのメガネに問題があるんじゃないかなあと。あ、こないだ俺もメガネ新調したんすけどね——」

「茶化さないの。こういうコト言われて不本意だって感じるでしょうけど」

別に不愉快になってるワケじゃない。でも、そんな風に言われるとどうしたらいいかわからなくなる。

「……単純に初心者って肩書に胡坐かきたくないだけです。初心者と経験者との間に絶望的なほど距離があるコトぐらい俺だってわかります」

「初心者と経験者、ねえ」

「音楽に学校のテストみたいにはつきりとした優劣はないんですよ

うけど、例えば。この高校3年間で俺がギター歴4、5年の梓よりギターが上手くなる、なんてのはあり得ないでしょう。頑張ればなんとかなるとか可能性の問題じゃなくて、ムリだって断言できます。言ってるコトわかりますよね？」

ギター歴1ヶ月なんて比べるまでもない。

「ま、おおそ教師の言うコトじゃないけど、ムリでしょうね」

何事もそうだが、経験というファクターは非常に重要だ。

バスケットでも同じコトで、小学生からやっている連中と中学から入る連中とでは、天地の差がある。もちろんソレは努力と才能でひっくり返すコトはできるが、そんなのはごく一部の連中だけだ。

無限の可能性だとか、あきらめない限りだとか、綺麗事だけじゃ絶対に通用しない領域がある。

「でも、あの人にはかなわないとか、始めた時期が遅いとか、そんなにあきらめて努力しなくていい言い訳にはならないでしょう？だからこそ多少ムリにでも努力してるんですよ」

「……ちょっと気になったんだけど、フユくんってナニか今までにクラブとかやってたの？物凄く経験者っぽい言い方なんだけど」

いきなりの質問に、俺は腹の中の覗きこまれたのような感覚に陥る。

別にナニも、となるべく感情を殺して答えた。

「ふーん、まあいいわ。とにかく今のままじゃ長続きしないわよ、言ってるコトわかる？」

「……努力家気取って調子コイて愚直にオーバーワークしてっと、そのウチ飽きるぜってコト？」

「ざっくりまとめるわねえ……。ま、当たらずとも遠からず、ね」

なんだろう？ 一体センセイはナニが言いたいんだ？

このままじゃダメってこと？ ナニが？

「ごめんごめん、ちょっと言い過ぎちゃったわね、そんな顔しないの。別にアナタを不安がらせようってワケじゃないから」

俺はそんなに情けない顔をしていたのだろうか。
誤魔化すように紅茶を飲む。温い。

「でも、俺はどうしたらいいかわかんないよ……」

「フユくん、アナタって本当に運がいいわよ、ツイてるわ」

さわ子センセイはニンマリと楽しそうに笑う。悪役臭いそんな笑い方が、妙にマッチしていた。

「唯ちゃんをよく見てなさい。彼女がきつと教えてくれる」

お茶ごちそうさま、とそれ以上ナニも言わず、さわ子センセイは意味ありげな含み笑いをしながら、譜面台を持って部室から去って行った。

ナニ企んでるんだ、あの人は。

「唯先輩、ね……」

あのふわふわした人が教えてくれる？一体ナニをだろう。

……ギターテクの秘訣とか、ストレスフリーな生き方とか、マシユマロ豆乳鍋の作り方とか。少なくとも糖尿病になりそうな鍋の作り方ではないコトだけは確かだ。

「どっちにしたって、努力することが悪いワケねえんだ。練習練習
っと！」

不安を払拭するようにわざわざ声に出して、再びギターを手に取った。

しかし、俺はさわ子センセイが言ったコトが妙に気になってしま
う。

不安と焦りがじんわりと胸の中を染めていく。

常々思っているコトだが、さわ子センセイの影響で妙に意識して
しまう。

俺には、ナニが足りないんだろう？

第10話 音楽を楽しむ方法

やっぱりというか案の定というか、その日はドコかうわの空で、授業にも集中するコトができなかった。

休み時間、俺は窓際にある自分の席で珍しくボーっと外の景色を眺めて、さわ子センセイに言われたコトを反芻していた。

「肩に力入りスギ……か」

ムリしてるつもりはない。今自分にできるコトを必死にやっているだけで、むしろそんな風に言われるコトがけっこう心外だったりする。

HI-STANDARDをi-Podで大音量で聴いて気分を紛らわせようとしても、あまり効果が見られない。お気に入りのDear my friend が流れて出しても、やっぱり気怠さが抜けない。

グラウンドで次の体育の授業の準備をしている生徒たちを眺めていると、いきなり何者かによってイヤホンが両耳から引き抜かれた。

「なーに黄昏ちゃってんの、アンタ。珍しー」

どかりと俺の前の席に腰を下ろしたソイツは、友達の純だった。純は十二聴いてんの？と俺のイヤホンを片耳に装着しながら訊いてきたので、ハイスタ、と短く答える。

「で、ナニ？ 周りから見たら、今俺は黄昏てるんか？」

「まあ見えるね。ナニナニ、悩みでもあんの？ お姉さんが相談乗ってあげよつか？」

「別に悩みとかじゃねーけどさー」

……いい機会なのでちょっと純に訊いてみようか。

「純さ、お前今ベースやってんじゃん？」

「うん」

「俺は、ギターやってんだよね」

「うん？ ……うん、そりゃ知ってるよ」

「うん、俺も知ってる」

「……ふ、フユ。どうしたの？」

このまま朝、さわ子センセイに言われたコトを言ってしまうおうか
と思ったが、言うコトができなかった。

余計な心配かけたくないってのが建前で、本音はしょうもないコ
トで悩んでいる情けない自分を見せたくないんだろうな。

「……………」

「え、嘘、けっこうマジな話だったりする？」

俺がナニを言ったらいいかわからずに黙っていると、純が目を見開いて焦ったように言った。

「じゃあ、部活終わってからじっくりちゃんと相談乗るよつ。あ、アンタ今日バイトだったっけ？あるんなら、夜にでも電話で――」

「あー、や、違うんだつ。ごめんごめん、全然そんな大したコトじゃなくて」

純はすげー心配してくれた。今度は俺が焦って、純の言葉を遮る。

「……ホントに？」

「ホントホント。今日ちょっと脚の調子悪くてさあ、少しブルー入ってただけ」

「んー……、ならいいけどさ」

純はちよつと納得いってない感じだったけど、適当な嘘で押し切ってしまう。

「あーあーあー、なんかノド乾いたなあ。純、飲みモン買い行こうや」

そう言つて、誤魔化すように杖を握って立ち上がる。

余計な心配かけたな、といつもなら自己嫌悪に陥るハズだが、妙に気分が晴れているコトに気付く。

純は優しい。俺がちよつと元気なさそうにしているだけなのに、今みたいに本気で心配してくれる。

今みたいに気にかけてもらえるコトは、気付きにくいけどすごいコトなんだよな。そんな純の何気ない優しさに嬉しくなり、俺は気が楽になっていくのを感じた。

友達の元気が無かったら純みたいに優しくしたいな、と当たり前のコトを改めて強く思った。

そんなこんなで気を取り直して部活の間、唯先輩を観察してみたが、さっぱりわからない。

いつものように楽しそうにお茶して、楽しそうに練習して、楽しそうに笑っていた。本当にいつも通りの唯先輩、そんな彼女が俺にとって重要なヒントを持っているらしい。

しかし、ソレは謎のまま部活動は終わってしまった。

いつものように俺たちは連れ立って下校する。電車通学のムギ先輩と別れて、俺たち5人は雑談しながら通学路を歩いていく。唯先輩、律先輩、漣先輩の3人に俺と梓が並んで付いていく。

今も唯先輩はしょうもないコトで盛り上がって話し込んでいる。

確かにあのハイテンションさとかノーテンキな神経とかは見習いたいトコだけど、さわ子センセイが言っているのはそういうコトじゃない気がする。

うーん、ホントなんなんだろう？

「——でね、それでねっ、って………フユ、ちゃんと聞いている！？」

「え？……ああごめん、梓。ちょっとボーっとしてた」

おっと、イカンイカン。

気が付くと、隣で一緒に歩いている梓がこちらを睨んでいた。

「えっとな何の話だっけ？」

「今日のフユ、なんだか様子おかしくない？」

「ドコもおかしくないない」

「……フユさ、今日ずーっと唯先輩のコト凝視してるよね」

げ、しっかりバレてるし。

「別にそんなコトねえって」

「嘘、絶対対に見てた。……ひょっとして、唯先輩とナニがあったの？」

訝しげに迫力ある大きな目でこちらを覗いてくる。
全部説明してもいいんだけど、イロイロと面倒臭そうだ。誤魔化

そう。

「そんなコトより引き続き、ガム噛んでる最中にくしゃみしたら何故かガムが無くなっている現象について議論しようぜ」

「ちょっと、露骨に話題逸らさないでよっ」

「青信号の青はどう見ても緑色なのは何故か、だっけ？青のりもそうだよな」

「だからっ——」

「学校の授業で質問されたくないときに限って先生が当ててくる法則ってどうよ？」

「あのだ——」

「ジイちゃんバアちゃんが乗ってるチャリのブレーキ音ってなんであんなにうるっせえんだろな？昔からすっげえ疑問に思ってたんだけど」

「……もういい」

なんとも阿呆なゴリ押しで、誤魔化すコトに成功した。

それにしても、梓に気付かれているというコトは唯先輩本人にも気付かれている可能性が高い。……気味悪がられてないよな？

相変わらず唯先輩はお喋りに夢中だ。ハーゲンダッツは何味が一番美味しいか、律先輩たちと楽しそうに議論している。ちなみに我が家ではダッツは贅沢品の極みとされているのであまり口にしたコトがない、のでどれもウマく感じる。

しばらくさわ子センセイが言っていたコトを考えながら唯先輩の横顔を見ていると、隣から強烈な視線を感じた。

不機嫌そうな梓と、ばつちり目が合った。

「な、なんだよ？」

「……フユのバーカ」

……………。

梓は突発的に原因不明な不機嫌になるコトが多い。

梓はなんだかんだ言って唯先輩のコトが大好きだ。そんな大好きな先輩がしょうもない男子生徒からちょっかい出されそうで、ソレが面白くないのだろう。まったく子供なヤツだ、と自分のコトを棚に上げてそう思った。

そうこうしているうちに、分岐点に辿り着いた。

俺、律先輩、零先輩の3人と梓、唯先輩の2人で分かれるコトになるのだが、……ラッキーなコトが起こった。

「あ、そーだ。あずにゃん、私今日憂からお使い頼まれてるから、こっちの道から帰るね？」

そう言って唯先輩は、バイバイまた明日ー、と最寄りのスーパーのある道へと歩き出そうとする。

「唯先輩！俺も買うモンあるんで付いていってもいいですか？」

これぞ僥倖。チャンスだと思い、彼女に付いて行こうとする俺。梓がモノスゴイ生温かな眼差しで俺のコトを見ていたが、気付かないフリをする。

「今日ポイント5倍デーだからお得ッスよっ」

「うんっ、フーちゃんも一緒に行こうっ」

お別れを言っ、俺たちはみんなと別れた。

スーパーから出ると、辺りはもう薄暗かった。

「大丈夫？フーちゃん、重くない？」

小1時間も経たないウチに買い物は終了した。チビツ子たちが帰宅し、人気のなくなった静かな大型の公園を通り抜けている最中である。

お互い大して買わなかったので少量で済んだのだが、さっきから唯先輩は負担のかかっている俺の脚を気遣ってくれている。

「ヘーキですよ。男の俺がそっちのも持つべきなのに、すみません」

実際はやせ我慢でけっこうキツかったりする。ギターを背負って学校指定の鞆を持ってさらにスーパールの袋を提げているので、ぼちぼち脚が痛い。

「休憩しよう、休憩っ！」

そんな俺のやせ我慢はあっさり看破されていたらしく、唯先輩は強引に近場のベンチに俺を座らせる。……なんだか情けない。

俺の隣に唯先輩も座る。なんだか嬉しそうだ。

「ハイ、フーちゃん一緒に飲もう？さっき買ったんだあ」

そう言っただけで唯先輩はガサガサとスーパールの袋から500mlの紙パックのいちご牛乳を2つ取り出した。先輩の奢りだよー、とひとつを俺に渡してくれる。

ありがとうございますいただきます、と俺はパックにストローを刺して飲み始める。

薄暗い公園の中、並んでいちご牛乳をゴクゴク飲む、男女2人組の高校生。……激しくシニールだ。

やっぱり疲れたときは甘いモノがイチバンだね、と美味しそうに飲んでいる唯先輩を見ると、なんだか意地張ってイロイロ悩んでいるのが馬鹿らしくなってきた。

「今朝にですね、さわ子センセイがこんなコト言ってたんですよ」

直接唯先輩に訊いてしまうのはカンニングみたいであまり望ましくなかったが、もう降参だ。もう素直に訊いてしまおう。

俺はさわ子センセイに言われたコトを大雑把に説明した。

「さわ子センセイ曰く、なんかそのヒントを唯先輩が持つてるみたいな風に自信満々に言ってたんです……。ハッキリ言っただけですけれど、俺に足りないモノって一体全体何なんですかね？」

俺が思い切ってそう訊くと、唯先輩は少しの間考え込むように唸る。

「うーん……さっぱりわかんない」

あんの腹黒教師め……！話が違っじゃん！？なんかスゲー恥かしいっちゃったよ。

俺はため息をつきながらいちご牛乳のパックを潰してゴミ箱にシュート。綺麗な放物線を描いてソレはゴミ箱に収まった。

「あ、でもねえ。フーちゃんって最近ギター弾いてるときあんまり楽しそうにしてないよね？」

突然、唯先輩が思い出したように言った。

「……いやいやいやいや。ナニ言ってるんですか、そんなワケないでしょう。楽しくないなら軽音部に俺居ませんって」

本当にナニを言い出すんだこの人は。そんなワケない、強くそう思ったが、何故か一瞬ギクリとした。なんでだろう？

「そーかなあ？今日私たちと合わせて練習してるときだって、フーちゃん難しい顔してたよ」

「元々そーいう顔だったってオチは？」

「ゼツタイしてたー！」

演奏してるときの自分の表情なんて意識したコトもなかった。先輩がそう言うならそうなんだろうけど、俺は別につまらなく思ってるとか音楽が嫌いだとかそんな風に思っているワケじゃない。

俺はただ――

「フーちゃんはただ、みんなに迷惑かけたくないんだよね？」

俺が思っていたコトを、唯先輩はそのまま言ってくれた。

「みんなの足手まといになりたくないよね、わかるなあ。私も去年そうだったもん」

「唯先輩……も？」

「うん。軽音部入ってギター始めたはいいけど、澁ちゃんたちスゴイ上手でしょ？なんだか自分だけ違ってて、焦ってたっていうか肩に力入ってたっていうかね」

……今の俺と同じだ。

正直、唯先輩が1年前にそんな風に悩んでいるトコロを想像できない。

「でもね、みんなと練習してひとつナニかが上手くいって。またひとつみんなと上手く演奏できて。そういうの繰り返ししてるウチにギターが楽しくて大好きになってたんだ」

「ギターに名前付けるくらい……スか」

そうそう、と唯先輩は自分のレスポールを優しく撫でる。

「つまりは、もっと楽しんでギター弾いてみたらってコトですかね？」

「ギターに限ったコトじゃないよ。大小多少の問題はあっても、やるコトなすコトゼーんぶ、楽しむってコトはすごい大切なコトだって、私は思うなあ」

面倒な勉強でも、嫌な仕事でも、辛い練習でも、つまらない遊びでも、くだらない会話でも。

「そーゆーのって……意外とどんなコトよりも難しいと思います」

俺がそういうコトいうと、とてつもなくチープな言葉になってしまふ。

みんながみんな唯先輩みたいじゃないんだ。
俺みたいなヤツだって、たくさんいる。

「うん、ムズかしい。だけど、とっても単純だよ」

単純？

「フーちゃん、今楽しい？」

「え？」

「今さえ楽しければイイト、私は思うなあ」

「た、短絡的過ぎません……？もうちょい長いスパンで考えないと――」

「今さえ楽しければイイんだよ」

唯先輩はすげーいい笑顔で。

「今を楽しむ努力を一生通して死ぬまで頑張れば、楽しさ成分満タ
ンだよっ！」

とんでもねえコトを言いやがった。

とんでもねえコトだけど、その言葉はあまりにも唯先輩らしくて。

「――う、ははは……っ！い、今さえ楽しけりゃ、を死ぬまでつ
て……。あははははっ、ちょっと待って、お腹イタイ……っ、タン
マタンマ、はははっ！」

その言葉は、俺の心に滅茶苦茶響いたんだ。

何故だか笑いが止まらなくなり、馬鹿丸出しで笑い続ける。

「フーちゃん、ひどいっ！そんな笑わなくてもいいじゃん！」

「や、そうじゃなくてっ。……最っ高にイイ言葉ですね、俺の座右
の銘にしてもいいですか？」

俺は本当に気に入ってしまった。ドコか抜けていて、でもスケー
ルの大きな唯先輩みたいなこの考え方が、たまらなく気に入ったの
だ。

そして、心の底からこう思う。

「唯先輩は、すごい」

「え、ええ？そうかなー？やっぱりそう？」

「うん。唯先輩は、やっぱり凄い」

俺がマジでそう言うと、唯先輩は照れながら嬉しそうに笑った。

「じゃあフリーちゃん！さっそく、今を楽しむ努力をしようっ」

ナニを思ったか、唯先輩はいきなりケースからギターを取り出して、ピックを構える。

「さあ、一緒に歌おうっ」

「ええ！？こんなトコで？」

「今を楽しめない人は、この先も楽しめないよ？」

「や、ソレとコレとは話が——」

「ホラホラっ、こないだみんなでカラオケ行ったときフリーちゃんスゴイ歌上手かったんだから！恥ずかしがらずに、ふわふわ時間いっくよっ！」

問答無用でギターを弾き始める唯先輩。今の気持ちを代弁しているかのような楽しいメロディでイントロを奏でる。

「まったくマジかよ、と呟きながらも、俺はすげえ楽しそうに笑って

いる自分に気付く。唯先輩と目が合い、お互いに笑う。俺は大きく息を吸い込み、唯先輩に合わせて歌い出した。それは、とても楽しいコトだったんだぜ。

翌朝、今日も今日とて、俺はひとりで朝練を行っていた。

カッチカッチとメトロノームの刻む音に合わせてギターをかき鳴らす。TAB譜をチラチラ覗きながらなんとかコードを押さえてストロークを繰り返す。

いつもと同じ練習風景。しかし、いつもと違う箇所がひとつだけあった。

「おはようっ。フユくん、随分ゴキゲンじゃない？」

「……おはようございまっす」

案の定というか予想通りというか、やっぱりさわ子センセイが部

室に訪れた。

「どうぞ続けて？私、フユくんの歌もつと聴きたいわぁ」

「あーあーあー、ちょっと気分良かったから歌ってただけですよ
！」

ニンマリ笑うさわ子センセイに対して、ギターの練習をしながら
歌っていたトコロを目撃された恥ずかしさで赤面する俺。

「来ると思っていました。また、譜面台ですか？」

「いや、今日はお茶飲みに来ただけよ」

「ココは喫茶店じゃないんですけどねー」

言いながら、昨日と同じように紅茶を淹れて、さわ子センセイに
ティーカップを渡す。

「あー、あのさ。さわ子センセイ」

「ん？どうしたの？」

ちょっと迷ったけど、俺ははっきり伝えるコトにした。

「俺さ、ギター弾くの好きだよ。バンドのみんなと音が合って、演
奏するのも大好きなワケで。……だから、こっやって朝練続けるし、
家で自主練するのも止めねえ」

だって。

「だって、すげえ楽しいもん」

そう言っで、俺は照れ臭くなつて、誤魔化すように笑う。
そんな俺のコトを、さわ子センセイは優しく見つめる。

「その様子じゃ、昨日私がナニを言いたかつたかわかつたみたいね」

「はい。……でもセンセイが直接言つてくれれば済む話だつたんじやないですか？」

「私が言つより、唯ちゃんが言つた方が効果的かなつて」

「まあ、楽しむコトにかけちゃ、あの人はスペシャリストですからね」

すごい才能だと思う。俺や濤先輩、万人に羨ましがられるようなね。

「昨日も言つたと思うけど、フユくんと梓ちゃんはとってもラッキ―ね。幸せといつても過言じゃないわ。こんな素晴らしい部活に入れて。イロイロなコトを教えてくれる先輩たちがいて」

「それに、こつやつて生徒のコト心配して、わざわざ様子見に来て、気に掛けてくれる優しい顧問のセンセイもいるしね？」

俺は、1番言いたかつたコトが言えて、ニシシと餓鬼つぽく笑う。
さわ子センセイは、一瞬びっくりしたみたいに俺を見ていたけど、次第に俺みたいに笑つた。

「……あら、中々どうしてわかってるじゃない？」

「そりゃあ、俺も素晴らしい部活の部員のひとりですから」

俺たちは顔を見合わせて、ニヤリと笑った。

今もまた、間違いなく楽しい時間だった。

急いで走ったり、ゆっくり歩いたり、遠回りをしたり、寄り道したりしながら。

俺は音楽がまたひとつ好きになった。

音楽を楽しむ。

その努力を一生続けていこうと、俺は思う。

第11話 澤先輩の壁を作ってしまう方法

「このリア充め、爆発しろ」

代わり映えの無いいつもの昼休み、気怠い午前の授業から解放された生徒たちがこれまた気怠い午後の授業を耐えきるために昼食というエネルギーを補充しようと学校は一気に騒がしくなる。学校の食堂に走る者、購買で調達する者、持参の弁当を開く者、様々だ。

多分に漏れず、俺も昼食をとっていた。普段は憂、純、梓といったいつものメンツで教室にて自炊した弁当をつつのが日課だが、本日は学食で昼メシを食っていた。昨日の夕飯の残り具合や冷蔵庫の食材や朝の時間の余裕との兼ね合いで、たまに学食や購買で昼食を済ますコトがある。まさに今日はその日で、学食組の友達に混ぜてもらいながら比較的空いているテラスでメシを貪り食っているワケだが、いきなり仲の良い友人であるポツチャリくんからそんなコトを言われた。

「……ポツチャリくんよお、白いカッター着てカレーうどん食つつう大冒険してるときに、アホなコト言うなや」

どうでもいいが、俺は地味に人気が無いカレーうどんを神経削って食している。日常でネクタイを締めている人ならわかるだろうが、ネクタイは食事中に非常に邪魔な存在である。胸ポケットに挟じり込んでも邪魔なモンは邪魔だ。

「うるせえフユ、もう僕は我慢ならんゾ……っ」

この目の前で今にも卓袱台ひっくり返しそうなテンションの男はポツチャリくんというアダ名の高校で初めて出来た愛すべき友達である。何故だか怒りに震えながら、ラーメンと日替わり定食を貪っている。

「あ？我慢ってナニがよ？」

「高校入学して数ヶ月……、テメーは次から次へと女の子誑かしやがって、この女ったらしがっ」

また始まった、と俺はうんざりしながらそう思った。コイツは何かにつけて俺を女たらしにしてくるのだ。確かに女友達は多い方だと思うが、別に女たらしではないコトを断言しておく。ちなみに俺が梓の金魚のフンよろしく軽音部に入部したと言ったとき、普通に殴られたコトはまだ記憶に新しい。羨ましいぞコノヤロウ！と泣きながら迫ってくるポツチャリくんは普通に怖かった。

いつもならハイハイソーデスかと流せる話題なのだが、今日はポツチャリくんを助長するようなコトを言う輩がいるのだ。

「いんや、コイツの言うコトもわかるよ！フユっていつも平沢さんたちといっしょにいるもんね」

B定食をつつきながらしみじみと言う男は、クラスメイトのナカミツちゃんだった。

中道という名の男子生徒はポツチャリくんや俺とは違い、かなりのイケメンである。それも、残念なタイプのイケメンである。なぜなら……

「で、フユどうなの？実際のトコ、中野さんあたり食ってんじやないの？あんな可愛い子とスコバコやるなんて本当にフユは手が早いなー」

……ナカミっちゃんはいつか会話しているだけマジでわいせつ罪で捕まる、と俺は思う。

そう、すげえ下品なのである。中高生男子と下ネタは結構関連性が高いと思っているので俺自身は聞いていてそんなに気にならないのだが、TPOは弁えてほしいと切に思う。そう思う反面、女性相手でもデリカシーの欠片もないセクシャルハラスな下ネタをぶっ放すナカミっちゃんを、俺とポツチャリくんは密かに尊敬していたりする。

「ナカミっちゃん、もう100回以上聞かれてる気がするけど、俺ダレとも付き合ってねえよ。だから、梓に今の聞かれたら殺されるからやめてください」

「そうだね、彼女ロリ体型だからラブホテルとか入りづらいよね。わかるわかる」

「いや、ひとつもわかってねえ！」

「じゃあ、平沢さんか。実際フユがイチバン仲良くて一緒にいるのって平沢さんだもんね。ああいう大人しい清純そうな女の子もいいよね。なんか……縛りたくなるよね」

「全力でならねえよっ！そろそろ俺も付いていけなくなっつからレベル下げてくれ、ナカミっちゃん！」

「この程度の話、小学生レベルだよ？」

「お前の小学生時代はどんなカオスな小学生だったんだよ……。つかさ、別に触れてほしいワケじゃねんだけど、純は？俺、かなりアイツのコト好きなんだけど」

「鈴木さんは友達って感じでしようよ、……。いや待てよ、彼女みたいなボーイッシュな娘に男装をさせてだな」

「いや、ごめん、もう許して、ヤメテ」

ポツチャリくんも変態だが、ナカミっちゃんはガチの変態である。俺の男友達は変態が多いようだ。一瞬、類は友を呼ぶというコトバが頭をよぎったが深く考えないようにする。

「ナカミチよ……。確かにウチのクラスの中野たちは可愛い、認めよう。だがしかし！僕が本当にキレてるのはそれじゃねえんだヨ！」

もうひとりの変態であるポツチャリくんは肩をいからせながらそう切り出した。

「フユ、……。テメエあの桜ヶ丘高校のアイドル、秋山澪先輩と親密になってんじゃねえよぉ！」

……。そう来たか。

「あの秋山先輩？軽音部の？……。フユ、まさか放課後の部室で秋山先輩のあの豊かな胸を――」

「ナカミっちゃん、ちょっと黙ってて。……。えーと、でポツチャリくん、なんでいきなりそんなコトを？」

「すつトボケンじゃねえゾ、フユっ。テメエこないだ秋山先輩とイチャイチャしてただろうがっ！」

「イチャイチャだあ？ンなコトしたくてもできねえよ」

「忘れたとはいわさんゾ、一昨日のコトだ」

一昨日……？記憶の網を手繰る作業開始だ。

「あ、ひょっとしてあのときのコト言ってるのか？」

ソレは一昨日、理科室へ移動しようと2年生の校舎の前を通ったときのコトだった。

「あ、澪先輩。おいつす」

偶然、部活の先輩である秋山澪先輩に出くわしたのである。

彼女はよく目立つ。ルックスに秀でているせい、性別問わず多くの生徒から視線を集めている。そんな彼女に気兼ねなく話しかけられるので少し鼻が高くなったが、澪先輩は俺をとがめるような視線を寄越してきた。近づいてきて、こちらに向かって指を指す。正確には、暑苦しさを少しでも軽減しようと緩めている俺のネクタイを指しているようだ。

「フユ、ネクタイちゃんと締めるよ。だらしないぞ？」

「えー、律先輩とかいっつもリボン適当じゃなか」

「律みたいになるなって言ってるの！……ホラ、こっち来て」

澪先輩はまったく仕方ないな、といった風にだらしく緩んだ俺のネクタイを結び直してくれる。1年生は赤のネクタイの着用を原則とされているが、学校についてから息苦しいと外す生徒もけっこういたりする。校則とかいい意味で緩い学校なのだ。

澪先輩は気付いていないが、俺と一緒に移動していたポツチャリくんたちや周りの上級生からすげえ注目されていて、なんか気恥ずかしい。それを誤魔化すために、俺はいつものように軽口を叩く。

「なんかアレだね」

「うん？どうかした？」

「今の澪先輩って、俺のお祖母ちゃんみたい——ぐええ……っ！」

丁寧な手つきでネクタイを締めてくれていた澪先輩の両手によって、カツアゲよろしく限界までネクタイで首を絞められて、カエルみたいな呻き声をあげてしまう。

氷のような笑顔で澪先輩は締め上げてくる。

「よく聞こえなかったけどなんか言ったか、フユ？」

「い、いえ……、なんかお姉ちゃんみたいだね、って言おうとしました。こ、これホントです」

「そうかお姉ちゃんか……。まったく、しょうがない弟だなあ」

そう言っただけで彼女は何故か嬉しそうにニコニコ笑いながら締めすぎたネクタイを緩める。

なーんて、澪先輩と仲良くこんな小芝居打てる日が来るなんて入部当初は夢にも思わなかっただろう。最初は目も合わせてくれなかった人が、今や立派な頼れる先輩である。

「あと今日のフユ、微妙に髪が寝癖みたくなってるぞ」

「放つといてくださいよ、こりゃただのくせ毛です」

「どっちだっていいでしょ、ホラじつとしときなさい」

そう言って、澪先輩は手櫛ですくように俺のハネたくせつ毛を直してくれる。

……うーん、周りの視線が痛えなあ。

「お前ら、新婚かつつうの！羨ましすぎんぞ、コラア！」

声を荒げるポツチャリくん。

そうか、あの後ポツチャリくんが凄い形相で俺のコト睨んできたのはそういう意味があつたのか。

「……別に、イチヤイチヤとは言わねえだろ。ただ、単純に部の後輩としてよく構ってもらつてるダケだよ」

「確かに恋愛感情とは関係なく、フユみたいならしのない駄目な男の世話を焼きたがる年上の女の人ってけっこういるよね」

「ナカミっちゃん、本人のいないトコで言ってくれ……」

ナカミっちゃんの言う通り、漣先輩は面倒見がいいから俺のコトが心配なだけだろう。

「いや、まだまだあるぜ。フユ、お前こないだ秋山先輩の弁当奪つてドヤ顔で食つてたろう？あれはどう説明してくれんだヨ？」

「あー、アレね」

確か、先週あたりの出来事だったように思う。

その日もまた、俺は弁当を作らずに学校に来ていた。単純に面倒だったので妹にお願いして買い弁で勘弁してもらった。俺も購買で適当に買うつもりだったのだが、いかんせん出遅れた。体育の授業の後、急いで購買に行っても売れ残りの菓子パンひとつしか得るコトができなかったのである。残り物には福来ると言うが、実際問題こんなちっこいパンひとつで男子高校生の空腹を満たせるワケがない。

小さな菓子パンをバスケットボールよろしく手の中で遊ばせながら、杖をカコカコいわせて自分の教室に帰っていると、例によって例のごとく零先輩と遭遇した。数人の友達と一緒に弁当を提げて歩いている。今日は天気がいいので、外で食べようというハラだろう。

「フユ……、お前ゴハンそれだけか？」

開口一番、澪先輩は驚いたように俺の持っている小さなパンを見てそう言った。

「あはは、もうこんなしか残ってなかったんすよ。いやはや、男子校じゃねんだから桜校の生徒諸君にはもうちょい食い意地を抑えてもらいたいモンですな」

「ちゃんと食べなきゃ、ダメだろ？大きくなれないぞ」

「もう身長１７０あるし、コレ以上いらなかなあ」

澪先輩よりチビかったらへこみますけどね、と冗談めかしてそう言った。

バスケットをやっていた頃には考えられない発言だったと思う。あの頃は身長がわずかに伸びただけで一喜一憂してたもんな、俺。

澪先輩は自分の弁当を見て、俺を見て、自分の友達を見て、少し迷った感じだったけど、こう言った。なんか予想できるぜ。

「フユ、私のお弁当とそのパン交換な。はい！」

澪先輩は大きさ色共々可愛い感じの弁当をこちらにズイ、と突き出してくる。やっぱり気を遣わせてしまった。

以前の俺なら間違いなく断るんだろうけど、今更こんな遠慮するような仲でもないのだ。

「……こーゆーのって一応礼儀として『そんな悪いですよ』とか言っただけくらい遠慮しとくモンですかね？」

「バツかなコト言っただけ……ホラ、味わって食べなさい」

少し怒ったように澪先輩は自分の弁当を強引に俺に押し付け、パンを奪い取る。その乱暴な仕草が、照れ隠しだというコトを俺はしつかりとわかつている。友達の前で自分の弁当を異性にくれてやるなんて、澪先輩じゃなくても恥ずかしいだろう。

それだけ澪先輩も俺に慣れてくれているってコトなんだろう。……オトコ扱いされてないだけかもしれないけどな。

「うん。ありがとう、澪先輩。美味しくいただきました」

「お弁当箱は部活のとき返してくればいいから。フユ今日バイトの日じゃないだろ？」

「そうですね、さすがに洗って返しますよ」

「いいから、先輩の言うコトに従いなさい」

「はい」

本当に、澪先輩は出会ったところから変わったと思う。

「う、羨ましすぎんゾ、コラア……！」

「フユ、俺今彼女いるけど、コレは普通に羨ましいよ」

ポツチャリくとナカミっちゃんは、揃って羨ましいと繰り返す。確かに、俺が2人の立場だったら嫉妬で怒り狂っているコト間違いないナシだ。

「先輩後輩間の仲の良さを超えてるような気がするよ。やっぱりフユに気があるんじゃない？」

「そりゃ、絶対ねえよ。……どっちかつつと、澪先輩は俺のコトいじりがいのあるオモチャぐらいにしか思ってたねえよ」

「え？俺の秋山先輩のイメージと違うなあ」

「確かに澪先輩は基本的にいじられ体質だけど、たまにすげえドSな感じになるよ」

「ソレに関しても、なんかあったの？」

「昨日さ、部活のみんなで楽器店で部の備品買いに行ったんだよ。部室行かずに澪先輩のクラスで集合してそのまま行くっていう流れだったんだけど、そこでさあ」

ムギ先輩と梓が掃除当番なので2人の到着を湊先輩のクラスで待っている、いきなり声をかけられたのだ。

「アレ？りっちゃんじゃん！ナニしてんのー？」

「おー、そっぴゃお前このクラスだったっけ」

どうやら律先輩の友人らしい男子の先輩は親しげに律先輩と話し出した。

それに便乗するように別の男子生徒も近づいてくる。

「唯もいるじゃん、俺のコト覚えてる？去年同じクラスだった——」

「久しぶりだねえ！」

「ナニナニ？唯、遊びに来たの？」

「違うよー、コレは部活の一環なんだよっ」

「アハハ、なにそれっ？」

と、これまた親しげに談笑し始める唯先輩たち。

「……………」

自分以外のオトコとあんなに楽しそうに話している先輩たちを見るのは初めてだった。そりゃ2人とも可愛いし明るいし、さぞモテるだろう。

そんな唯先輩たちを見ていると、思春期特有のモヤモヤした感じの感情が発生しているコトに気付く。……あまりにも狭量だと自分でも思うが、早い話ムカついていた。

「『りっちゃん』、それに『唯』……だつてさ」

俺はつまらなそうにボヤきながら、澪先輩が座っている前の席に乱暴に着席する。

「なーんか、馴れ馴れしく不是吗？……元クラスメイトだから何だか知らないですけど」

澪先輩の机に頬杖をつきながら、楽しそうに話している先輩たちを眺める。まるで愚痴のように澪先輩にブチブチ喋ってしまう。

……唯先輩も律先輩も俺にはあんな風に笑ってくれないじゃんか、ちくしょー。

「まあ、別にどーだってイイですけどねっ。俺にはカンケーねえし！つーか、そもそもキョーミねえしっ」

醜い嫉妬心丸出しでガキのようにブツクサ不貞腐れていた俺だが、突如伸びてきた漣先輩の手がふわりと俺の頭に乗った。

「かつ、可愛過ぎるだろ……っ。フユ……っ！」

本当にナニを思ったか知らないが、漣先輩はもう我慢できないといった風に目を輝かせながら俺の頭を撫でまくってきた。

「あの、漣先輩？恥ずかしいからやめれ」

「あ、あと10秒だけっ」

ナニが楽しいのか、先輩は嬉しそうに笑っている。

……くっそー、またやってしまった。どっからどうみても言動が幼すぎた、気をつけよう。顔を赤くして、己の幼稚さを猛省する俺。

「ふふっ。今フユがナニ考えてるか、当てたげよっか？『俺子供っぽいなあ、今度から気を付けよう』……だろ？」

どうやらハッキリ顔に出ていたみたいで、一発で俺の心情が露呈されてしまう。

ニヤッと笑う漣先輩は、けっこうレアな表情で、なんだかくすぐったく思えた。

「大丈夫だよ？私は男子からは『秋山さん』って他人行儀に呼ばれてるから安心しなよ」

「安心してなんスか、安心して！別に俺、そういうんじゃないって
――」

「よしよし。全くヤキモチ焼きな弟だなあ」

「だーからーっ、ガキ扱いすんなよ、ちくしょー！」

顔を真っ赤にしてそう叫ぶ俺は間違いなくガキだった。

「……みたいな感じでさ、あの俺の口トをやっぱりオモチャぐら
いにしか思ってたねえよ」

「っていつかソレ以前に、お前心狭すぎだろ。先輩には先輩の付き
合いつてモンがあるだろうヨ」

ポツチャリくんのあまりにも正論過ぎる感想を聞いて、思わず言

葉に詰まる。

「ま、ソレだけフユが先輩たちのコト好きってだけでしょ。意外とフユって独占欲強い方なんだね？」

「別に独占欲とか、そーゆーんじゃないよ」

ナカミっちゃんの言い分はわからなくもなかったが、独占欲とかとはまた違う話だと思う。

「なるほどナ、お前も僕のようにハーレム築こうって魂胆か。見上げた根性だぜ」

「あーあーあー、お前らマジうつせえつ。さっさとメシ食えや、コラ」

強引にこの話を打ち切って、なんとか漣先輩の話題から抜け出す。早く部活いきたいな、とボンヤリと思う。しかし、結論から言ってしまうと、俺は今日部活に行かずにそのまま帰宅するべきだったのだ。数時間後、軽音部の部室で起きる悲劇を俺はまだ知らない。

「ポツチャリくんめ。あんの野郎、逃げやがったな……」

時は放課後、俺は竹箒を片手に中庭を掃除していた。今日は俺とポツチャリくんが中庭の掃除当番なのだが、どうやら彼はサボタージユらしい。賢い男だ。

いない人間のコトをヤイヤイ言っても始まらないので、仕方なくひとりで掃除を続ける。

RADWIMPSのなんちつてを聴きながらノリノリでゴミをかき集めていく。

そうやってさっさと掃除を終わらせて教室に戻ると、教室内には居残って駄弁っている生徒たちが楽しそうにしていた。その中に、肩を寄せ合ってナニかを見ているポツチャリくとナカミっちゃんを発見した。

「おいっす、2人ともナニ見てんのー？……ってかポツチャリくん、てめえ掃除サボってナニしとんじゃコラ」

「お、フユじゃなーか。悪い悪い、ちよつと用事あったもんです。

……お詫びと言っちゃナンだが、いいモノを見せてやろう」

「いいモノ？ナニそれ、写真か？」

「あ、バカっ。フユにはコレ見せない方が——」

ナカミっちゃんがそう言いかけて隠そうとするが、俺はその前に

ポツチャリくんから手渡された1枚の写真を見せてもらった。
その写真には、スクール水着を着た澪先輩が写っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

その場の時間が止まったように感じた。

写真の中の澪先輩は学校のプールサイドらしき場所にて自分が撮られているコトに全く気付いておらず、楽しそうに笑っている。…
…どこからどう見ても明らかに盗撮である。

事態を把握した次の瞬間、時間が動き出した。

「…………て、て、テンメエ！ポツチャリイ！ドコでこんな写真撮りやがった、ゴラア！！純度100%の盗撮だろコレ！さっさと自首しに警察行つてこいや！」

「な、ナニ怒つてんだヨ、フユ。この写真は僕が撮ったんじゃないくて、写真部の先輩から買い取らせてもらったのサ」

「もらったのサ、じゃなんだよっ！澪先輩の、こんなっ……………」と、とにかく没収だ没収！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！その写真いくらしたと思って——」

「うるっせえ！没収つつたら没収だ、このド変態野郎！」

後々冷静になって考えてみるとそこまで言う必要はなかった気が

する。しかし、この時の俺は完全に自分を見失っていた、漣先輩のこんな姿を誰かに見られているなんて普通に気持ち悪かったのだ。

「ほら、やっぱこうなったじゃん。フユにだけは見せちゃダメだよ、この写真は」

ナカミっちゃんは、どうやらこうなるコトを予想できていたらしい。さすが下ネタ以外は空気の読める男だ。

「写真撮りたきゃ本人に許可撮ってから好きなだけ撮れよ、マツタク」

頭に上っていた血が少しずつ押し戻されていく。……別に俺が潔癖ってワケじゃないよな？

「ああああ……せっかく手に入れたのにナ……」

「まあまあ、コレはキミが悪いつて。あきらめなよ」

ナカミっちゃんが全てを悟ったような表情でポツチャリくんを慰めている。

「それにしても、やっぱリフユって独占欲強いと思うよ。もちろん
いい意味でね？……部活ガンバレ」

「なんだ、そりゃ。……じゃ、俺部活行くから」

とにかくさつさと部室に向かおう。

俺は変態コンビに別れを告げて、教室から出た。

まあ、今度ポツチャリくんにナニか奢ってやるかな。

いつものように部室に行くと、ソコには誰も居なかった。

「アレ？みんなどこ行ったんだろ？」

てつきりみんな騒がしくお茶していると思っていたのだが、もぬけの殻である。先輩たちの鞆は置いてあるので、さっきまでいたと思う。

テーブルの上に紙が一枚置いてあった。そこには『さわちゃんに呼び出されたから、ちょっと行ってくる！フユ&漑へ。ブチヨーよ』と書いてある。

漑先輩も今日は掃除当番らしかった。まだ、彼女は来ていない。

「あ、そーいや、この写真どうしたモンかなあ」

そう呟いて、俺はポケットから先ほどポツチャリくんから没収し

た澪先輩の写真を取り出す。捨てるのもなんかイヤだし……。律先輩にでも処理してもらうか。あの人ならちゃんと説明したらそれなりに理解してくれそうだ。

うんそうしよう、と写真を握りしめながら決意した次の瞬間、渦中の人である澪先輩が部室のドアを開いてやって来た。

「……………！？」

「あれ、フユだけか？みんなはどうしたの？」

口から心臓が飛び出たかと思った。

すげえ嫌な冷や汗が、どっと流れ出す。俺は反射的にその写真を後ろ手に回して、どうにやり過ごそうとする。

……………っていうか、なんで俺がこんなコソコソしなきゃいけないんだ！？と心の中で悲痛に叫んだが、こんな写真を持っているのを見られたらヒドイ展開になるコトは明白である。

「え、えつと……。なんか、さわ子センセイに呼び出されたみたいですよ？」

俺のバカ、動揺しすぎだろ。

「ふーん。……………ところでフユ、さっきナニ見てたんだ？」

「へ？え？ナニってナニが？なんのコトです？ワケわかんね」

「いや、だからさっき急いで隠したじゃないか、ソレ。……………あ、さては赤点の答案だなあ？」

ヤバイ、これはマジでヤバイ。嫌な予感しかない……………。

「ち、違いますって。ちょっと近づかないでくださいっ」

「まったく、普段から勉強してないからだぞ？ほら、観念して見せなさい」

しかも、SスイッチがONになっている溇先輩だ。
珍しく意地悪そうに笑いながらにじり寄ってくる溇先輩。

「あー……溇先輩、じゃあねっ」

「コラ逃げるなっ」

杖を放り投げてドアに向かってガチ逃走を試みた俺だったがポンコツな脚の所為で、あっさり溇先輩に捕まってしまう。
そして、もみ合っているウチに俺の右膝がかくんと抜けて、溇先輩を巻き込んで派手に転倒してしまった。

「イテテテ……溇先輩、大丈夫ですか、って——っ！」

「アイタタタ……フユ、ごめんな、っ——っ！」

自分たちの体勢に気づき、硬直する俺と溇先輩。

俺と溇先輩の距離はゼロセンチ。距離は存在しなかった。

早い話、もし第三者が見たら、俺が溇先輩を押し倒しているように見えるコトだろう。

そして！

おいおいマンガじゃねんだからよ、と言いたくなるような絶妙な
——絶妙に最悪なタイミングで律先輩たちが部室のドアを開いた。

……………。

訪れる静寂、こついつのなんて言っただけ？……ああ、嵐の前の静けさだ。

数瞬後、その嵐が訪れた。

「ふ、フユ！お前っ、漣にナニしてんだこのやろーっ！」

顔を真っ赤にして、すげえ剣幕で怒鳴りこんでくる律先輩。

「信っじらないっ！部室でナニしてんの、フユ！？ホントッあり得ないっ！」

これまた顔を真っ赤にしてブチ切れている梓。怒りのあまり、ツインテールが逆立っている。

「フーちゃん……フーちゃんが……」

茫然自失している唯先輩。顔が真っ白である。

「あらあらあら、まあまあ……っ！」

何故が目をキラキラさせているムギ先輩。ホントになんで嬉しそうなん？

ややあつて、俺と漣先輩はじかれたように離れる。

「い、いやいや、違いますって！これは偶然っていうか……ねえ、漣先輩？」

「そ、そうだぞ、みんな誤解だつ。私はフユに……おっ、押し倒されただけでっ」

「ちげえだろ！いや、実際そうだけでも！」

ダメだ、漣先輩はテンパっていて役に立たない。そして、俺もテンパっているので同じく役に立たない。

「今すぐ漣先輩から離れなさい、この変態！」

梓の言葉の暴力が遠慮なく俺を痛めつける。

……ポツチャリくん、ナカミっちゃん、変態扱いして悪かった。もう2度としないから、助けてくれ！

と、とにかく事実を言わなきゃ。

「俺がずっこけて漣先輩を下敷きにしちゃっただけですよ。俺ケガしてるの、知ってるでしょう？」

そうだ、実際やましいコトは何もないんだから、ちゃんと説明すればいいんだよ。

「フユ、ソレほんと？……本当なんですか、漣先輩」

「あ、ああそうだよ。私がちよつとふざけちゃって、それで……。フユごめんな？」

漣先輩がそう言うのと、ようやくみんなも現実を見始めてくれたようだった。

みんなも口々にヘンに誤解してゴメンな、と謝罪してくれた。ふう、なんとか救われたようだ。……あれ？そもそもなんでこんなコトになったんだっけか。

思い出した瞬間、ヒラリと一枚のとある写真が俺のポケットから滑り降り、みんなの前に着地した。

あ、こりゃブツ殺されるな、と他人事のようにそう思った。

俺が制止するヒマもなく、遷先輩を含んだみんなはその写真を覗き込む。

次の瞬間、部室が爆発したんじゃないかというぐらいの喧騒が巻き起こった。

「……神様、俺ってナニか悪いコトしましたっけ？」

ちなみに、誤解が完全に解けるまで、みんなはまるで性犯罪者を見るような目つきで俺を迎えてくれた。その際、俺に人権はなかったとだけ、記しておく。

第12話 雨の日を過ごす方法

コレは夢だ。

私にはわかる。

その人は私の手を強引に掴んで、引っ張ってくれる。私がどんなに暗闇の中にも、その人は私のコトを助けてくれる。救ってくれる。

その人は笑った。時折見せる、子供のように純粋な笑顔。私は、その笑顔が大好きだった。

その人は私を優しく抱きしめてくれる。なんだかイイ匂いだ、とてもドキドキする。

そして、その人は優しく微笑みながら、私に顔を近づけてきた。その人に体を預けるようにして、私はゆっくりと目を閉じ――

目が覚める。

「私は……な、な、なんて夢を――っ!？」

あまりにも欲求不満な夢を見てしまった私はベッドの上で朝っぱ

らから悶える。

顔が熱を帯びているのを感じる。

私はやり場のないこの感情を押し留めながら、枕を抱きしめて、
呟いた。

「……フユのバーカ」

私こと中野梓の、とある朝の様子であった。

私は雨が嫌いだ。

ジメジメするし、洗濯物は乾かないし、外出しづらいし、靴に水
入るし。それに湿気はギターにだって悪影響を及ぼす。

しかし、私がどんなに雨を嫌悪しようと雨はどこ吹く風といった感
じで、季節は本格的な梅雨に入ってしまった。連日、絶え間ない滝
のような雨が続いていた。
繰り返すが私は雨が嫌いだ。

しかし、そんな私以上に雨を嫌っている人がいた。

「全世界に乾燥剤をバラ撒きたい……」

滅茶苦茶なコトを言って雨に対して毒づいている、フユだった。

フユは右脚を怪我している。詳しいコトはよくわからないけど、雨の日のような気圧の低い日はひどく脚が痛むらしい。

時は放課後、部活の時間。フユはいつものようにお茶に加わらず、長椅子の上で仰向けに寝転びながらグツタリしている。

「ここんときツそうにしてるなあ、フユ。……梓、アイツ教室でもあんな感じなのか？」

律先輩が心配そうに私に訊いてきた、視線はフユが寝ている長椅子に向かっている。

フユを覗く私たち5人はいつものようにお茶を飲みながらテーブルを囲んでいる。

「いや、教室ではやせ我慢してます、ホントはツライ癖に。少なくとも今みたいに情けないトコは見せてないですね」

「梓、聞こえてンぞー……」

と、長椅子からフユのダレた声が聞こえる。

今言ったコトは事実で、フユはクラスではやせ我慢して平気そうなフリをする。

きっとそうするのはイロイロと理由があるんだろうけど、1番の理由は憂に決まっている。きっと憂に気を遣わせたくないのだ。心配されて憂に余計な負担がかかってしまうコトに対して、フユは異常とも言えるほど気を遣っている。

フユはバカだ。……聞き取れなかった人の為にもう1度言うけれど、フユはバカだ。

いつも誰かの為に気を遣って、自分のコトは大事にしない。いつも誰かの為に見えないトコでドタバタ奔走している癖に、自身のコトとなるとあまりにも無頓着だ。周りに頼るといふコトを知らない。

私はフユのそういうトコロが嫌いだった。他人に気を遣われるのを毛嫌いしている癖に、自分は周りに誰よりも気を遣っている。ただフユの場合、ソレがあまり周りに気付かれないだけだ。私がフユのおかげで毎日だけ救われているか、彼は知らない。フユに借りばかり作っていて、一向に返させてくれないのだ。私を軽音部に引き戻してくれた以来、負債はかさむ一方である。

とはいっても、当初は部活の時間でも楽しい雰囲気を作壊したくないとかでやせ我慢をしていたフユが、今はこんな風に私たちには弱みを見せてくれる。ソレはフユにとつてとても良い傾向だと思う。

まあ、だから許してあげてもいいかな、ふん。

「フユくん、おまたせ！……大丈夫？熱くない？」

ムギ先輩はお湯で温かくしたタオルをフユに持っていく。

「ムギ先輩、すげえ助かります」

「タオル冷めちゃったらスグ言ってね」

「うん、ありがとう」

フユは心底ありがたそうにムギ先輩からタオルを受け取る。そして、その温かいタオルを患部の右足首の上に乗せた。詳しいコトはよくわからないけれど、そうするコトで痛みが和らぐらしい。

フユは気持ちよさそうにタオルごしに足首を揉んでいる。

「……………」

フユは周りを頼らない、といったけど、ソレには少し語弊がある。フユはムギ先輩の前では妙に素直なのだ。いや、フユは大概誰にだって素直だけど、なんとかいうかムギ先輩には良い意味で遠慮がない。懐いているというか信頼しているというか、他の人たちと違ってどこか特別扱いしているように見える。

私はソレがちょっとムカついていたりする。……私には頼つてくれない癖に。

「フユ、調子悪いときぐらい休んでてもいいんだぞ？」

「ヘーキですよ、ずいぶん楽になったし。澪先輩たちがお茶飲み終わったら速攻練習始めしよう」

「まったく、……心配なんだ。頼むから無理するなよ」

「はい。澪先輩、心配性だなあ」

澪先輩の心配そうな声に、強がって返事をするフユ。

「……………」

いつの間にか、だ。本当にいつの間にかフユは澪先輩と滅茶苦茶仲良くなっていた。

澪先輩は人見知りだ。フユが入部した当初は、かなりフユとの距離があったと思う。ソレが今や姉弟のように仲がいい。

……先日部室でフユが澪先輩を押し倒しているトコロを目撃したときは、ストーンスのキース・リチャーズよろしくギターでヤツを

ブン殴ってやろうと激怒したものだが、まあ誤解だったからソレはよししよう。

「フユ、いーのかぁ？お菓子ゼンブ食べちゃうぜ？」

「部長はいろんな意味で育った方がいいから食べてください」

「いろんな意味の中身教えるや、コラ」

「うはは、そんなのモチロン、む——じゃなくて、身長とか？」

「……お前、今ナニ言いかけた？」

いつもの調子の律先輩とフユのやりとり。

「……………」

なんだかんだで、部活においてフユと1番仲が良いのは間違いない律先輩だ。

入部当初から変わらず、2人はずっと距離が近い。

フユが楽しそうに笑っている笑顔の先には、大抵律先輩がいるような気がする。馬が合うのか話が合うのかわからないけど、部活でよく一緒に笑いながら話している印象が強い。

そして、フユは律先輩との電話やメールのやりとりも多いらしい。夜、よく2人で様々なコトを話し込んでいるようだ。……私には用事が無いと絶対に電話をかけてこない癖に。

「フーちゃん、せっかく家でテルテル坊主いっぱい作ったのに、効かないねえ」

「……唯先輩、なんで吊り下げてるテルテル坊主、ゼンブ逆様なんですか？」

「え、フーちゃん知らないの？テルテル坊主はサカサマに吊らないと晴れないんだよ？」

「……へえ、そら初耳だワ」

これまたいつものようにネジが緩んでいる唯先輩とフユの会話。
憂……、言い出せなかったんだね。

ちなみに、私も小学4年生までブロッコリーとカリフラワーを反対に認識していたのであまり笑えない。

「……………」

そして、唯先輩。

フユはよく唯先輩のコトを見ている。フユが黙ってボーっとして
いるときの視線の先には唯先輩がいるコトが多い。フユをよく見て
いる私が言うのだから間違いはない。

これは憶測の域を出ないコトだけど、フユは多分唯先輩に憧れて
いる。以前、唯先輩のように生きたいと漏らしていた。……人の心
に簡単にスルリと入ってくる点において、フユと唯先輩は凄く似て
いるんだけどな。

私はティーカップに残っている紅茶を飲み干し、立ち上がってフ
ユが寝ている長椅子へ近づく。活の一つでも入れてやろうと思った
のだ。

長椅子の端にちょこんと腰かけ、眠るように目を閉じているフユ
を見る。

……まあなんとというか、へこんでいるようなそんなフユは、可愛

くなくもないコトもないコトもない。
ほつぺた突つついたら怒るかな？

「どーした、あずにゃんよ」

「……っ！」

突然、目を瞑ったままのフユに声をかけられて動揺してしまう私。
一瞬、今朝見た夢がフラッシュバックして、思わず顔が赤くなる。

「い、いや、フユ大丈夫かなーって」

「おかげさまで、だいぶ楽になってきた」

「そりゃ……よかった」

「小雨になってきたなあ、帰るときにや止んでるといいけど」

「天気予報では夜もザアザアだって」

「うへー……」

フユは再びぐったりと倒れ込んで、ボンヤリと窓の外を眺める。
フユの頭が私のすぐ横にきて、少しドキリとする。

「ま、梅雨明けまでの辛抱じゃない、フユ」

「いつまで続くんかね」

「確か今週いっぱいだったと思うよ。来週から夏っぽくなるみたい」

「そつか。……もうそろそろ姉ちゃんの季節かあ」

「え？お姉ちゃん？」

「あー、俺ン姉ちゃんの名前さ、千夏って言っんだ。だから夏は姉ちゃんの季節」

フユは体を起こしてこちらを向き、説明してくれる。

「妹が小春で、父さんが秋名。それで俺が冬助。……春夏秋冬、面白だろ？」

本当に面白そうに話すフユ。フユはけっこう自分の家族のコトを楽しそうに話す。

「家族みんなで四季って、なんかいいね。でもお母さんの名前は？……あ」

しまった、私はバカだ。

「母さんか……ソレが名前覚えてねんだよな。俺が小学校に入っただけに出てっちゃったし、父さんにはなんか聞きづらいし」

フユは片親だ。離婚で母親が出て行ってしまったらしい。前に憂から1度だけ聞いたコトがある。

「う、ごめんつ。なんか私――」

「バツケヤロ、今時親がバツイチなんて珍しくもななんとねーよ」

「そう、かな」

「そーそー。気にしてたらキリねえやな」

そう言ってかりゆしのアンマーを口笛で吹いているフユは、本当に気にしている様子はなかった。事実なんだろう。

フユは言いたくないコトは言わない。隠すほどのコトじゃないし、わざわざ言っほどのコトでもないってコトなんだろうな。

「そろそろ練習始めっか！」

そう言って、フユは立ち上がりギターをケースから取り出す。

私はフユのコト、あんまりよく知らないんだなあ……。

そして、ひとりの友人が頭に浮かぶ。憂ならきつと私の知らないフユをたくさん知っている。根拠もなくそう思い、悔しく思った。

そのまま練習が続き、1時間が経った。

部室に冷房は設備されていない、その上この湿度の高さである。みんな暑そうにしている。運動量が人1倍多いドラムの律先輩なんか汗だくだ。

ちよつと休憩入れるか、と息を切らしながら言う律先輩に反対する人は誰も居なかった。

「……フユ、やっぱ調子悪い？なんか音ヘンだったよ」

私は演奏中ずっと気になっていたコトをフユに言った。何故か違和感を感じたのだ。

「あー、爪伸びてきてさ、なんかフレット押さえづらいかも」

「もうっ、小まめに切らなきゃっていつも言ってるでしょ」

嘆息しながら私は部室にいつも置いてある爪切りを取り出し、フユに手渡す。フユの指の爪は伸びすぎというほどじゃないけど、確かに伸びていた。あれでは弾きづらいだろう。

フユは爪切りを受け取って、ゴミ箱の前でパチリパチリと爪を切っていく。

「痛ってえ！……ああ、しくった」

「どうしたの？」

突然、フユが痛そうな声を上げた。手をフルフルと振って痛そうにしている。

「深爪しちったよ……っ。右指でよかったあ」

「もう、子供じゃないんだからさ、フユ」

「しょうがないだろ、俺爪切りなんてここ数年使ってなかったんだからド下手なんだよ」

「え、どういうコト？じゃ、今までどうしてたの？」

「ヤスリだよ。毎晩両指の爪にヤスリがけすのが日課だったんだ」

「……？なんでそんな面倒なコトしてるの？爪切りでいいじゃん」

「何年前だったかなあ。俺さ、今みたいに利き手の方の中指思いつきり深爪しちゃってさ。その日から爪が元通りになるまで、シュートタッチ最悪になってフォームまで崩れ——」

「……？今フユはなんて言ったのだろう？フォームがなんだって？そこで、楽しそうに喋っていたフユは不自然に言葉を止める。私は気になってフユの顔を覗いた。

「なんでもない。……とにかくさっさと爪切りに慣れっから」

フユはときどき、こんな表情をする。いや、表情というか、顔が色がナニもなくなるのだ。電源を落としたみたいに無表情になって、その後一瞬だけ悲しそうな顔をする。コレはきつというも見ている私じゃなければわからない。

「べ、別にヤスリ使ってたんなら使い続ければ？爪を大事にお手入れするのっていいコト——」

「いや、もういい」

私の焦ったような言葉は、フユの起伏の無い声に遮断される。

「俺さ、もうヤスリは使わないよ。……一生使わねえから」

フユはそう言って、私に背中を向けて爪切りを再開する。

その背中に、ドコか物悲しさを感じてしまい、ナニも言うコトができなかった。ナニかを言わなくちゃと思って、ナニを言ったらいいかわからない。

こういうとき、憂なら絶対にナニかを言っただろうな、と思う。それもとびつきりフユの元気の出るような、そんな優しい言葉を。私は憂のようにフユの力になれない。

……だから、フユは私のコトを必要としてくれないんだ。

そうこうしているうちに、今日も部活が終わった。

私の大嫌いな雨は、今現在も飽きるコトなく降り続いている。ハア、とため息をつきながら靴箱からローファーを取り出して、履く。なんだかフユのコトばかり気にして、部活が終わる頃には見事に気分が落ち込んでいた。

先輩たちを見ると、昇降口で雨スゴイね、とかギター濡れちゃうだとか楽しそうに大騒ぎしている。そして、自分と同じように靴を履いているフユに視線を向けると、ナニか違和感を感じた。

「アレ？フユ、ギターはどうしたの？」

そう、いつも家に持って帰っているSGをフユは背負っていなかった。学校指定の鞆だけを肩に提げている。

「やー、今日ばっかしは部室に置いてくよ。脚の調子悪いし」

別にそんなの私持って行ってあげるのに、と思ったが、すぐに考え直す。

フユはこういう場面で、絶対に誰かに荷物を持ってもらつような真似はしない。くだらない意地だと思っけど、フユは割と頑固なので譲らない。他人に頼らないのだ。

……他人に言う以前に、私には頼ってくれないか。憂にでさえ鞆のひとつも持たせたコトないのに、私なんか――

「梓。悪いんだけどさ、途中まで鞆持ってくれねえ？」

「……………え？」

今フユはなんて言った？

「や、だからさ。鞆持ってやってくれんかって」

「……………」

「……あ、イヤならいいんだ、ごめん。変なコト言って——」

「持つっ！」

フユに言われているコトを心の中で復唱し、反芻し、理解した次の瞬間、私は今日一番の大声を上げてフユの鞆を引っ手繰るようにもぎ取った。音量調節機能がブツ壊れてしまったのかのような大声にフユは面食らったかのように目を見開く。

「お、おお。ありがとう」

やった。……やった、やったっ！

雨の所為で脚の調子が悪かっただけかもしれないし、単純に気まぐれかもしれない。だけれど私は口元が緩むのを我慢できなかった。嬉しさのあまり過呼吸になりながらもフユの鞆を抱きしめるように抱えて、傘を差そうとした。傘を差そうとしたが、鞆を2個も抱えている状態では上手く傘を持てない。

ヤバイでしょう、と土砂降りの雨を睨んでいると、私の頭上でバンと大きな傘が開いた。

「俺の鞆持ってもらってんだから、傘ぐらい持つつつの。ホレ、入りんさい」

そう言ってフユはすぐ横に立ち、私を自分の傘の中に入れてくれる。

「ふ、フユ？これってその、いわゆる……」

「小学生じゃねんだから『相合傘キモチワルツ！』とか言うなよ？俺フツーにヘコむからな」

「いつ、言わないよっ！」

私たちはひとつの傘の下で肩を寄せ合ってゆっくり歩いていく。案の定道中先輩たちによってからかわれたけど、そんなコトは全くと言っていいほど気ならなかった。

ザアザアと規則正しく降り注ぐ雨に打たれている傘から小気味いい音が鳴り続く。

ナニかイロイロとフユや先輩たちが話をしているような気もするけど、隣にいる人のせいであまり耳に入ってこない。すぐ隣にいるフユの存在を猛烈に意識してしまう。

そして、私はさっきまでの落ち込んだ暗い気分が完全にドコかへ行ってしまったコトに気付く。代わりに温かくて優しい気持ちの流れ込んでくる。

そして、私は思う。

フユは少しずつ、少しずつ、変わっていく。

ナニかを、誰かを、必要とする。必要だと思える。ソレはフユにとって、間違いなく良いコトなワケで、成長という名の変化だ。

フユは少しずつ、少しずつ、心を開いていく。

私はそんなフユを間近で見れて、嬉しくて嬉しくてしょうがなかった。

「梓、なんかいいコトでもあったん？」

「うん、あったよ」

フユの問いかけに、私は自信を持って答えた。

「こんな雨降ってやがんのに、ナニが楽しいんだよ？」

「あれえ、フユ知らないの？」

私は子供っぽく歯を見せながら笑って、こう言っちゃった。

「私って雨の日、大好きなんだよ？」

もうしばらくは雨止まないで欲しいな、と。
フユに悪いけれど、私はコッソリ、そう祈った。

第13話 苦手なテストを躲す方法

学校の勉強が好きな人間なんていねえよ、という俺の考えはあながち言い過ぎというワケでも偏見というワケでもないはずだ。みんな大なり小なり遅かれ早かれ程度の違いはあれど、1度くらいはそう思ったコトだろう。

多分に漏れず、この俺もそう思ったモノだ。

初めてそう感じたのは、カタカナなんて日本語じゃねえよ外国語だっ！と喚き散らして教科書をブン投げたのが小学校低学年。自国の偉人たちの歴史にも興味がなかったし、数字の羅列を見ただけで頭が痛くなる数学も嫌いだっ。アメリカ弁ワケわからんと英語にも苦手意識を持ったのは中学に入ってから。

考えてみて欲しい。クラスでバリバリの運動部に入って練習に明け暮れている連中は往々にしてバ力が多いはずだ。コレこそ俺の偏見以外のナニモノでもないが、まあ俺の言いたいコトはわからなくもないハズだ。

多分に漏れず、この俺もそのテのバ力だ。

バスケを言い訳に勉強から逃げてきたツケが飽和するのは、時間の問題である。つーかもう飽和している。

今の俺がどれくらいヤバイかというと、俺の愛すべき親友の憂による次の一言に集約されている。

「フユくん、ちゃんと中学校を……うっん、小学校をちゃんと卒業したんだよね？」

あの心優しい憂が、俺の胸元をえぐる内角高めの剛速球を放ってきたのだ、いかにオツムの弱い俺でもはつきりとわかる。

あ、こりゃヤベーなど。

1学期の期末テストを控えた俺に、果たして夏休みはあるのだろうか。

「おい純……そろそろお前の番じゃね？」

「やだよ、絶対やだ！少なくとも次のボス倒すところまではフユがやってよっ」

「おまつ、ふざけんなよ？この前のボスも俺にやらせただろうがっ。あのときはマジで心臓飛び出るかと思ったぞ……」

「アンタ男でしょうが——って後ろから来てる来てるっ！？」

「うええっ！？くそ、なんで最近のテレビゲームの3D技術はこんなに無駄に発達してんだよ！？フツーに怖えわっ！」

今やっているのは、ゾンビを銃でバツバツと薙ぎ倒していくタイプのホラーアクションゲームである。テレビ画面の向こうにはゾンビたちが絶叫しながら洒落にならない恐ろしい顔でこちらに迫ってくる。対する俺と純も絶叫しながら装備しているマシンガンで応戦。

ギヤーギヤー言いながら純とコントローラーを押し付け合いながらテレビゲームに没頭していたが、突然画面が暗転した。アレ、ロード画面かイベントか？と思ったが、どうやらゲーム機本体の電源が落とされたらしい。

「……………2人とも…………ナニしてるのかな？」

ゲーム機の電源をOFFにした犯人は憂だった。

どうやら怒っているようである。ちなみに憂の表情は以下参照。

憂↓（#^ω^）ビキビキ

「もっつ、今日は勉強するんでしょーっ！..」

そう、勉強である。

土日を利用して平沢宅にて勉強合宿を行うことにしたのだ。合宿とは言っても今週末に両親が旅行で家を空ける憂の家に俺と純と梓の3人が勉強道具引っさげて1泊するというだけの簡単なモノである。俺や純からしたら遊びの意味合いが強いと思っていたのだが、そんなウマイ話なワケがない。

「純ちゃん、今日は勉強するんだから勉強に関係ないモノ持ち込んじゃダメ」

「うう……、スミマセン」

「うはは。純、怒られてやんの」

「フユくんもっ！イチバン頑張らなきゃなのはフユくんなんだよ、ホントにわかってる？」

「ハイ……、スミマセン」

「あはは。フユ、怒られちゃんの」

「とにかく！今日は私がイイって言うまで絶対寝させないからね？」

「憂さん、なんか怖いんすけど……」

そんな俺たちのやり取りを見た梓は、まるきり親と子供だよ、と呆れながらそう言った。梓の冷めた眼が嫌に印象的だった。

何はともあれ、勉強合宿開始である。

時刻は土曜の昼過ぎ、平沢家のリビングにて4人でテーブルを囲みながらノートや教科書を広げる。

中間テストや日頃の授業に対する姿勢から総合すると、俺たちの学業成績は、憂>梓>純 俺、といった順位になる。純 俺の間に語りつくせないほどの溝があるというコトをご了承していただきたい。となると、自然と憂がマンツーマンで俺に勉強を教えてくれるという図になるのだが、その内容をすべて描写していると時間がいくらあっても足りないので大部分を割愛させていただく。

あえて俺と憂の勉強の際の会話を一部抜粋するなら以下の通りである。

——数学。

「じゃ、まず数学だね。今のところナニかわからないトコある？」

「sin、cos、tan、とか、なんで数学なのに英語なん？ごっちゃになるんだけど」

「……………」

——英語。

「じゃ、英語だね。オーラルは範囲狭いから簡単なハズ」

「なあ憂、英語っていわゆるアメリカ弁だよな？ 楽勝じゃん」

「……………」

—— 国語。

「じゃ、国語ね。フユくんは漢文はまだマシだったけど、古文が最悪だからそこを重点的にしよう」

「『𠄎』……って、憂。この教科書誤字があるぞ。『𠄎』の下にヘンテコなマークがある」

「……………」

—— 化学。

「じゃ、化学。元素は周期表20番までは暗記しとかなないと話にならないよ」

「すいへーりーべー…………す、すいへ、すい…………すいきんちかもく、どってん…………あれ、続き何だっけ？」

「……………」

—— 日本史。

「日本史ね。語呂合わせをつかうと楽に覚えられるよ」

「吐くよ（８９４）ゲロゲロ遣唐使つと。ん、遣隋使だっけか？」

「……………」

こんな感じでみっちり憂から教え込まれた。その間、あの優しさに定評のある憂から１００回は『バカ』だと罵倒されたと言っただけ。俺が少しでもシャーペンを動かす手を止めると、憂から圧力をかけられて俺はもう瀕死寸前である。

終始憂は、（＃＾ω＾）みたいな恐ろしい怒り笑顔を俺に向けながら、丁寧に教鞭をふるってくれた。

時刻はもう１９時を回っている。

いつまでこの地獄が続くんだ、助けてくれっ！と心の中で救済を求める。往々にしてこのような甘い期待をしても意味がないコトが多いのだが、今回は祈りが通じたようだ。

玄関から、ただいまーっ、と元気な声が聞こえた。

どうやら唯先輩が帰ってきたようだ。ちなみに彼女は幼馴染の家でテスト勉強をしていたそうだ。……幼馴染が男ではないコトを祈る。

「お姉ちゃん帰ってきたね。……よし、ここら辺でご飯休憩しよっか！」

そんな憂の一言に、俺たちは息を吐きながらシャーペンを放り投げてテーブルに突っ伏した。休憩なしの５時間ぶっ続けの勉強はさすがの梓や純にも堪えたようで、彼女たちもテーブルに頭と腕を投げ出してグッタリしている。俺に至っては言うまでもない。

「嘘っ！これ全部フユと憂がつくったの！？」

「憂はお料理上手だって聞いてたけど、まさかフユも料理こんなにできるなんて……」

口々に感想を言う純と梓。

さっきまで教科書やノートやプリントが散乱していたテーブルの上には、数々の料理が並んでいる。

俺がつくったのは、とろろの磯辺上げ、ジャガイモの千切りを力リ力りに揚げたものを添えたオリジナルサラダ。そして意外に難易度の高い、だし巻卵に挑戦してみた。……メニューが居酒屋臭いのはご愛嬌。度々酒のツマミをつくってくれと懇願する父親とバイトの経験のおかげである。

憂はシーフードたっぷりのグラタンに、キノコの和風スープ。さらにデザートに明らかに素人ではつくれないクオリティの杏仁豆腐

を用意している。

それぞれつくりたいモノをつくったので一貫性もナニもあったものじゃないが、まあ美味しく食べればソレでいいのだ。

「あずにゃん、純ちゃん。私が説明しようつ。憂とフーちゃんはね……お料理のライバルなんだよっ！」

唯先輩がまたアホなコト言い出したな、と思ったが、案外的外れでもなかった。

「そして、私、平沢唯がジャッジです。ちなみに今のトコロ、憂の8戦全勝無敗」

「フユ弱えー……」

憐れむような眼差しをこちらに向けてきやがる純。梓はやっぱりね、みたいなドコか安心した表情をしている。

言い訳をさせてもらうなら、あまりにも敵の戦力が強大なのである。

「うるっせ！黙って食いなさい。とにかく今日は審査員が3人もいるんだ、今日こそ憂に土付けるぜ……！」

リベンジを強く誓う俺だったが、結果だけ言うと、3・0で俺の完敗であった。

ちつくしう、また勝てなかった。

いつそのコト憂は専業主婦か料理人にでもなったらいかがだろうか。悔しがる俺だが、まあ結局のトコロ、美味しそくに俺の料理をぱくぱく食べてくれるみんなを見ると嬉しさで上書きされてしまうモノだ。またつくろつ、と懲りずに俺はそう思う。全国の主婦や料理

人だって、俺と同じコト思はずだぜ。

「それにしてもさー、フーちゃん最近よく笑うよねっ」

「なんスか、いきなり。俺今そんなに笑ってました？」

食後のデザートの杏仁豆腐をみんなで食べていると、突然唯先輩が脈絡なくそんなコトを言ってきた。

「うっん、そーじゃなくてね。出会ったときと比べて単純に笑う回数増えたなあって」

「あーあーあー、ソレがホントならきつと唯先輩のおかげっすね」

「毎日今を楽しむ努力してるかい、フーちゃん？」

「うはは、抜かりないですよ。につくきテスト前ですが、楽しくてしょうがないですね」

確かに唯先輩の言う通り、俺は昔に比べて笑顔が増えたのかもしれない。ソレ疑うべくもないとても良いコトだと思った。

そう言っただけ俺たちは顔を見合わせてケタケタと笑った。

しかし、ふと憂の方を見たら、なんだか元気が無さそうに見えた。気のせいだろうか。

時間は進み、時は深夜0時。俺は平沢宅の庭の縁側のようなウッドデッキで、ひとり音楽を聴きながら休憩していた。

夜空には完全に夏を告げる満天の星空が広がっている。唯先輩から借りた団扇で扇ぎながら、綺麗な星空を眺める。

ふと、視界の端から端へ一瞬で流れ星が転がっていった。ELEGARDENのスターフィッシュを聴いている最中だったので、なんだかおかしくなり、クスリと笑ってしまう。

願い事し忘れたなあ、とかしょうもないコトをぼんやり考えていると、後ろで窓の開く気配がした。振り返らずに、そのままイヤホンを外す。

「フユくん、サボってちゃダメでしょ？」

そう言っつて、そのまま俺のすぐ隣に腰掛けた人物は、やはり憂だった。

「リビングにいる爆睡3姉妹に言っつてやれよ」

俺がそう言っつと憂は、あはは確かにね、と笑いながら言っつて、よく冷えた麦茶の入ったグラスを渡してくる。さんきゅ、と俺はグラスを受け取り、半分まで一気に飲んだ。ウマイ。

晩飯を食ってから数時間、唯先輩を加えた俺たち5人は睡魔と闘いながら勉強を再開したのだが、いつの間にか、純たちは眠りに落ちてしまったようだ。梓と純は唯先輩にしなだれかかられながら、3人仲良く団子になってスヤスヤと気持ち良さそうに寝ている。なんだかんだで疲れていたんだろう。

「一応毛布掛けてきたけど、風邪引かないかちょっと心配」

「今日はこんなに暑いんだから大丈夫だろ」

憂をちらりと横目で盗み見してみた。風呂上がりの憂は髪を下ろしていて、いつもと雰囲気があるで違っていた。色っぽくて大人びた感じのする憂を見ると、なんかドキドキしてくるので、誤魔化すように星空に視線を移した。

「完っ全に梅雨明けたなあ」

「そうだね、雲一つない。……私久しぶりにこんな綺麗な星空見た気がする」

「うん。前住んでたトコよりこの町の空のがキレーな気がするよ。」

……あ、そーいや、さっき流れ星見たぜ」

「ええ、いいな。フユくん、ナニお願いしたの？」

「勉強教えてくれるときの憂がもう少し優しくなりますよう——ウソウソ、世界中のみんなが幸せになれますようにって願いましたっ、ホントですっ」

「それなら、よろしい」

麦茶を飲みながら憂がジトリと睨んできたので、言い直す。もちろんいつもの茶番で、もう気付くと憂は、流れ星来ないかなー、と大きな目を動かして空を見ている。

「夏の大三角どれだろ……。あ、アレさそり座じゃね？」

「え、どれどれ？どこ？」

「ホラ、あのすげえ明るいヤツ。赤色の」

「じゃあ、その左上のが3つのヤツが夏の夏の大三角じゃない？」

「うわー、マジではつきり見えんのな、ここの星空」

俺たちはしばらく肉眼で天体観測をして盛り上がった。あーでもないこーでもない、と星を指差しながら、嘘みたいに綺麗な星空に目を奪われていく。

だけど俺は、夕飯の時の憂の浮かない表情が気になっていた。多分ソレは俺の気のせいとかじゃなくて、現に今も憂はドコか元気が無い。たかだか半年の付き合いだけど、平気そうにしても俺にはわかってしまう。だからこそ、力になりたいと思う。

あらかた知っている星座を制覇して話がひと段落したとき、涼やかな風が吹いてきた。俺と憂はその風を一身に受ける。

涼しいね、と憂が呟き、そうな、と俺も呟く。そうして互いに言葉をやめ、静かに目を閉じた。

鈴虫の鳴く声がある。涼やかな風が髪を揺らす。

グラスの氷がカランと音を立てて崩れ落ちた。

「なんかね、……楽しい、ね」

「へ？」

沈黙を破ったのは憂だった。

楽しい、と憂は繰り返す。

「すごく楽しいの。今日みたいにみんなが集まってお泊りで勉強会とかね。今までにあんまりこういうの無かったから、私。……今日だけじゃないよ？ 普段ね、学校でフユくんたちとお話していっぱい笑って。休みの日とか一緒に出かけして、いろんなトコ行っているコトして」

楽しい、と憂は繰り返す。

「フユくんと出会ってから、本当に楽しくて仕方ないんだ」

楽しいと言っているハズの憂は、やっぱりドコか元気が無い。

「そんなん、俺だって同じだよ」

「フユくんも、楽しい？」

「当たたり前だろ。夕飯んときも言われたけど、俺、笑うコト多くなってる。自分でもそう思うよ。それはきつと憂たちのおかげだと

――」

「違うよ」

憂のはっきりとした言葉に俺は口を閉じてしまった。

「きつと、お姉ちゃんのおかげだよ」

そう言う憂の表情は、一見笑顔のように見えた。彼女のコトをよく知らない人は、そう思うだろう。ただ、俺には。そうは思えなかった。その笑顔の裏には、負の感情があるような気がした。

「お姉ちゃんはスゴイ。私なんか、全然かなわないや……」

その一言で、俺は全てを理解した。

どうしてそんなコトを言い出したのか。どうして元気が無かったのか。どうしてその感情を隠そうとしたのか。どうして我慢できずに言ってしまったのか。

「憂……」

憂と唯先輩は仲が良い。それは疑うべくもない、正真正銘の事実だ。

憂と唯先輩。この2人と親しくなっていくにつれて、改めて見えてくるモノがある。それは2人の仲の良さが異常だというコトだ。

憂は出来た子だ。よく周りに気が付いて、なんでも器用にこなす。勉強でも家事でも炊事でも。それに引き替え、唯先輩は出来が悪い子だ。間抜けで鈍臭くて不器用で。

そんな格好悪い年子の姉に対して、憂が好意以外ナニも感じなかったなんて、俺は思わない。目の上のタンコブ、とまではいえないかもしれないけれど、そんな姉を鬱陶しく思い、衝突したのは1度や2度じゃないハズだ。自分と同じ顔をしているコトも、イヤだったに違いない。

そして、唯先輩には人を引き付けるナニかがある。自分には乏しいカリスマ性が、自分とは違う強いキャラクターが、自分にはない

センスが。

嫌悪感とは別の場所にある、劣等感。憂はそういった負の感情を、きつと感じてきたハズだ。誰にも言えないような醜い喧嘩もあっただろう。

だけど。

だけど、2人は仲が良い。

憂は、優しくて自分には無いモノをたくさん持っている、そんな姉が、全部ひつくるめて大好きなのだ。

唯先輩は、優しくて自分には無いモノをたくさん持っている、そんな妹が、全部ひつくるめて大好きなのだ。

大好きだからこそ、自分でも嫌になるようなコトを感じてしまうコトがある。

そんな歪で異常なバランスの姉妹愛を、俺はただただ単純に凄いと思った。

「唯先輩はスゴイ、かあ」

俺は呟きながら、氷ですっかり薄くなってしまった麦茶を煽る。

「唯先輩に出会ってから半年の間さ、唯先輩はスゴイって言う人たちたくさん見てきたよ。それでナニより、俺自身何度も何度も思った。唯先輩はスゴイ」

「……うん、お姉ちゃんはスゴイ」

憂の表情は、俯いていて髪が遮っていて、よく見えない。

「けどさ、そーいうとき大概同じ思うコト思うんだよなあ。……」
「さすがは憂の姉ちゃんだ」って」

「……私なんか関係ないよ」

コレ以上、俺はフォローするつもりはなかった。俺みたいな安い人間が、氣遣いの言葉でどんなコト言おうと、ソレは安くて軽い言葉になる。

だから、思ったコトを。

正直に、本気で言うコトにした。

「憂のがスゴイ！」

……………。

こんなド直球に言われるとは、思ってもみなかったのだろう。憂はぽかんと口を開けたまま、びっくりしたように俺を見てくる。

「憂のがスゴイ。憂自身や周りの人間がどう思ってるかなんて知ったコトかよ、俺自身がはつきりきっぱりしっかり、本気でそう思ったんだ。優しく、氣配り屋で、優しく、今みたいにイロイロ考えてて悩んで、そんでもってすげえ優しい憂はスゴイんだ」

誰が誰より凄いとかが凄くないとか、誰それより優れているとか劣っているとか。恐ろしく低次元で幼稚で、恐らく器用な人はこんなコト言わないだろう。

だけど、俺は言うんだ。俺みたいな安い人間が、自分で感じたコト言わなきゃナニを言うんだよ。

「劣等感感じたっていいよ、他人を嫉妬したっていい。俺はソレを醜いだなんて思わねえ。今みたいに自信無くして思い切りヘコめよ。そしたら俺は言ってる。青臭くて、ガキっぽくて、滅茶苦茶恥ずかしいけど、憂はスゴイって心の底から本気で全力で真顔で言ってるよ。憂はすげえよ」

一気に、言った。
真顔で、全部言ってやった。
憂を見る。

「……………」

憂は、俯きながら、肩を震わせていた。
え、まさか泣いてんのか！？と心配したが、近づいてよく見ると、
ソレが杞憂だと理解する。

憂は、肩を震わせながら、可笑しそうに、嬉しそうに、笑っていた。

「フユくんね、話してるとね。ホントのホントのホントにね——
……………」

「……………ナニさ？」

「……………ふふつ、やっぱり言ーわないっ！」

そう言って、憂は楽しそうに笑った。
元氣が戻って来たんだ、と俺は密かに安心する。

「なんだよ、気になるじゃんか。俺恥ずいの我慢して正直に言った
のにつ」

「別に、フユくんは優しいなあって思っただけっ」

「ウッソくせーなあ」

憂が元気になると、何故か俺まで元気になってくる。本当に不思議だ。

自然と、笑みがこぼれてしまう。

「ま、唯先輩はスゴイ」

「うん、お姉ちゃんはスゴイ」

「だけど、憂だって負けてねえ」

「フユくんの方がスゴイ」

互いに顔赤くして、俺たちはそう言った。

「うはは、2人して褒め合うとか、俺たちキモチワリいなー」

「もうっ、人がせつかく感動してるのにそんなコト言わないっ」

憂は俺を少し睨みながら、バシバシと肩を叩いてくる。

いつも通りどころか、憂はいつもの5割増くらい元気になっていた。

それにつられて俺もハイになっていたのだが。

「フユくん、忘れてるかもしれないけど、明後日からテストだからね」

「憂こそ、このタイミングでなんつうコト言っただよっ!？」

憂の意地悪な一言で現実に戻される。

「まあ、テストさえ終わったら夏休みなんだから頑張ろうねっ」

「夏休み……、そうだそうだよ夏休みじゃん！もうすぐ夏休みなんだっ」

「フくんたち、夏休み初っ端に夏フェス行くんでしょ？私も行きなかったなあ……」

「憂たちは丁度じーちゃんばーちゃんに会いに、帰省するんだろ？予定ズラせねえの？」

「ごめん、ムリなんだー……。ま、チケット3枚だけなんだし、フくんたちで楽しんできて」

「お土産期待してなさい」

はーい、とちよつとつまらなさそうにする憂。

そんな憂を笑顔にさせる方法ぐらい、俺にだってできるんだぜ。

「ばーか、夏休みなんていくらでもあんだろっがよ。そうだな……、まずはやっぱり夏祭りだろっ？」

「行きたい行きたい！私、花火見たいっ」

「近場の小さい祭りや町の方の大規模な祭り全部制覇しようぜ」

「浴衣買おうかなあ」

「あと、駅向こうの山の麓にキャンプ場できたじゃん？あそこでみんな集めてバーベキューやるぞ」

「また隣町までお買い物に行きたいねー、映画も観たいし、遊園地も行こうよ」

「みんなでフリーマーケットで出店すんのも悪くないよな」

「あ、ソレ凄く面白そう!」

「駅周辺の甘味処巡りもまだ途中だしな」

「ピクニックとかもどうか？私お弁当張り切っちゃうし」

「あ、そーいや、料理対決もしてかねえとな。夏休み中に絶対憂に黒星つけてやる」

「私絶対に負けないから。フユくんにはムリだもん」

俺たちは、餓鬼丸出しで、はしゃぎながら、次々と夏休みの予定を立てていく。

それはとても懐かしい感覚で、童心に帰ったかのようにだった。

「憂。楽しいコト、いっぱいしようぜ」

いつだったか、唯先輩が俺に言ってくれた言葉だ。

俺はこの言葉を聞いたとき、無性に楽しい気持ちになったんだ。憂もそうだといいな、と俺は思った。

「うんっ、最高の思い出いっぱい作ろうっ!」

満面の笑みで、そう応えてくれる。

最高の思い出というその単語を聞いて、俺はふいにZONES
secret base を思い出したので、ついつい口ずさんでしま
う。

「きみつと、なつつのおわり——」

どうやら憂も俺と同じコトを考えていたようで、思いっきりかぶ
ってしまった。

顔を見合わせて、思わず吹き出してしまふ。

深夜独特のノリで、俺たちは腹を抱えて爆笑した。

こうして、夜は更けていく。

高校生になつて初めての。
一生忘れられない。
夏が始まった。

第14話 夏フェスを楽しむ方法

アタシは主人公なんかじゃない。

アタシの——鈴木純の人生は、そんなに特別なモノじゃない。誰しもが1度は思ってしまうコトなんだろうけど、ソレに気付くまで、周りの人より少し時間がかかってしまった気がする。

ずっと自分のコトを特別な人間だと思っていた。幼い頃から、アタシは周りの子たちより目立っていた。声が大きかったし、脚が速かったし、よく笑ったし、喧嘩が強かったし、親切を知っていたし、友達が多かったからかもしれない。

けれども、いつからだろうか。小学校に入ってから自分よりも綺麗な容姿の女の子たちがたくさんいたコトに気付いたときか。自分よりも面白い話ができる友達がたくさんいたコトに気付いたときか。初恋の男の子が知らない可愛い女の子と付き合っていたコトに気付いたときか。

小学校を卒業する頃には、自分は特別な存在でも、選ばれた存在でも、非凡な存在でも、なんでもないコトを痛いほど理解していた。そして、そんな自虐的な感情さえも、その他大勢の人間たちの誰しもが味わう感情なんだ、と冷めた心で納得させた。

だから、中学校に入ってからぼんやりとした毎日を送ってきた気がする。薄ら楽しい、とでもいうのだろうか。友達もたくさんいるし、くだらない話でゲラゲラ笑って時間を潰して、そこそこに楽し

い中身の無い毎日だった。

それに、あまり他人から影響を受けなくなっていた。友達が熱くマジ話していても、先生や親に説教されても、ドコかアタシは冷めていた。アタシは他人に影響を与えるコトも影響されるコトもないな、なんて子供みたいな考えを持ち始めてしまった。

ずっとずっと、こんな毎日が続くんだと思っていた。漫画のような主人公に成れなかった自分には、うすらばんやりした人生しか用意されていないのだと思っていた。

ところが、だ。

高校に入って、妙な男と出会った。

その妙な男は、アタシに良くも悪くも影響を与えてくるのだ。

ドコかアタシと似ていて、その実全然似ていない。ブツ飛んだ変人でもなければ、頭の固いマジメくんでもない。

でもソイツは確実にアタシを変えていく。毒のように、もしくは薬のように、徐々に徐々に干渉してくる。

アタシはソイツと出会ってから、ソイツに振り回される毎日だ。

そして、そんな毎日を、アタシは結構気に入っていたりする。

そして、今日も今日とてソイツに振り回されているのだ。

「おーい、純！こっちこっちー、場所とれたぞお！」

大声でアタシの名前を呼びながら、手を振って楽しそうに笑っている、その男。

その妙な男とは、フユというアタシの親友だ。

今日はその少し変わった親友のコトを、少しずつ説明していきたいと思う。

「夏だねっ」

と、梓。

「その上、夏休みだよっ」

と、アタシ。

「そんで、夏フェスだっ」

と、フユ。

そう、夏で、夏休みで、夏フェスだ。

事の発端は、やっぱりフユだった。

夏フェスいこうぜ！と誘われたのが、夏が始まる1ヶ月も前のコトだった。夏フェスとはサマーロックフェスティバルの意で、野外で行われる大規模なライブのお祭りのようなモノだ。どうやらチケットを予約して入手するコトができたらしい。

もちろんフジロックやサマソニのようなスケールの大きなモノではなく、地方で行われる1日で消化してしまう小規模な夏フェスだ。

とは言っても地元ではかなり名の通った夏フェスで、有名なアーティストたちがメジャー・インディーズ問わず多数集まってくる。

夏休みが始まったその週末に、アタシと梓とフユの3人で電車で揺られること1時間、目的地である山奥の会場に着くと、あまりの熱気と人の多さに圧倒された。梓は小さな頃から両親に連れられてちよくちよく様々な夏フェスを体験してきたらしいのだが、アタシとフユは全くの初体験である。

会場を目の当たりにして最初に抱いた感想は、フェスティバル！である。会場のとんでもない広さ、数えきれないほどの人混み、数々の飲食の屋台や出演するバンドのグッズ販売店、そして祭り特有の賑やかな雰囲気。そんな雰囲気にあてられたアタシたちはいつもの倍ぐらいハシャギまくっていた。

そしてナニより、生で有名なアーティストたちの演奏が聴けるのである。照りつける太陽に肌を焼かれて、汗が滝のように流れても、そんなコト気にしているようなレベルじゃないのだ。女としてどうなんだと自分でも思うが、夏フェスを体験した人ならわかってくれるコトだろう。おおよそ考えられないほどの大声を上げて、力の限り腕を振りまくって、リズムに合わせて観客一体となってジャンプ！おいおい楽し過ぎるでしょコレ。体力のペース配分なんて考えずにバカみたいにはしゃいで騒ぐ。

ぶっ続けて演奏を聴き続けていたアタシたちだったが、さすがに一息入れるかというコトで、アタシたちはステージから少し離れた場所に持参したレジャーシートを広げて、少し遅めの昼食をとるコトにした。

「うっあー……コレ絶対に明日は筋肉痛になんぞ……っ」

会場で無料配布されている団扇でパタパタと扇ぎながら、フユはシートの上に寝そべっている。先ほど物販で買ったばかりのお気に入りのバンドのTシャツを早速着こんで、はしゃぎ過ぎて疲れた体

を休ませていた。

「フユはハシヤギ過ぎ。もうちょっと落ち着きなさい」

梓はそんなフユを呆れたように見ながら言った。

梓も物販で買ったばかりのキャップを被り、ドコとなくご満悦である。

「よお言つワ、梓だつてキャツキャワーワー騒いでただらうがよ」

「べつ、別に騒ぐのはイイでしょ。フユや純みたいに今にもダイブしそうなノリは危ないって言ってるの！」

「……俺らン中でイチバン真っ赤に日焼けしてるヤツの台詞じゃないな」

確かに梓はもうすでに日焼けで肌が赤くなっている。体質だと本人は言っているが、お互いあれだけ日焼け止めを塗っておいてこの差はひどいと思う。同じ女子として同情してしまうのだが、口には出さないでおこう。

「でもさあ、アタシ生でダイブ見たワケだけど、凄い楽しそうだね。女の子でもやる人いるのかな？」

「純、絶対しちゃダメだからね！ダイブって基本的にご法度行為なんだから。危ないし、周りの人にも怪我させるかもなんだし」

「えー、でもやってる人いっぱいいたじゃん」

「うーん……、とにかくダメなモノはダメなの！」

頭硬いなあ。まあ、マナー違反なのはわかるけどさ。

「俺も脚ケガしてなけりゃステージ最前列まで行ってモツシュたのになあ」

と、残念そうに言うフユ。憂がこの場に居たら、普段フユが絶対に言わない類の台詞だ。

フユは憂に対してこの手の気遣いを異常といっても過言ではないほどする。神経質というか過保護というか、フユのそういうトコってメンドクセって普通に思う。だけど、こうやってアタシたちの前では普通に喋ってくれているんだから別に気にするようなコトじゃないんだろうけど。

そうやって憂のコトを考えると、ちょうどフユの携帯電話からLOW IQ 01のTanktop Boyが流れ出した。フユの着うたはコロコロ変わる、ちなみ1コ前はGreen DayのAmerican Idiotである。

コイツの音楽の趣味はよくわからない。椎名林檎を静かに聴いていたと思ったら、次の瞬間にはホルモンでノリノリになっていたりする。よくわからない。

「メール？誰から？」

フユのケータイが鳴ったこういうとき、真っ先に訊くのはいつも梓だ。気になるんだろう。

「憂からー。田舎のじーちゃんばーちゃん家からだってさ、夏フェスどうよ？って」

「ふーん、憂から……」

ちよつと女友達からメール来たくらいでそんな顔しなくてもいいじゃない、とアタシは不機嫌そうにフユのケータイを見つめている梓に対してそう思う。

「憂も来りやよかつたのにさ。うはは、アイツ羨ましがるぜえ？…
…『こっちはサイコーに楽しいです、どーだ、羨ましいだろ（笑）
お土産ナニがいい？』、返信つと」

フユは嬉しそうにメールを打って送り返した。数十秒後、すぐさまメールが返ってきた。

「『フユくんの愉快的なセンスにお任せします（笑）』……うーん、梓ナニがいいと思う？」

「……知らない」

「おいおい、冷たいなあ。こういうときこそ慎重かつセンスフルなチヨイスをだな——」

「フユのセンスで選んだらいいでしょっ」

また始まった、いつものようにアタシは思う。

梓も梓だが、フユも大概だ。小学生じゃないんだから、いい加減に梓がフユに対してどういう感情を抱いているかさつさと悟るべきである。フユは素で気付いていないのだから、恐れ入る。そりゃ梓じゃなくてもイライラするわよ。

しかしながらフユは馬鹿で鈍感だと言って片付けてしまうのは簡単だけど、面倒なコトにそんな単純でもない。

梓がはつきりしないのが一番の原因なんだろうけど、今の関係が

壊れてしまうのが嫌で踏み込めないんだと思う。今のアタシたちの関係は、居心地が抜群に良くて楽しすぎる。性別も性格も境遇も関係ない、最高の友達だ。要は怖いのだ、今みたいに本気で笑い合えなくなってしまうコトが。

「……ふう」

フユと梓の阿呆なやり取りを眺めながら、アタシは思う。

そんな良い関係をもたらしているのは、間違いなくフユだ。アタシがとうの昔に無くしてしまった純粹さというか、無邪気さのようなモノをフユは持っている。

ま、子供っぽく見えるって言ったらソレまでなんだけどさ。

こんなトイレの長蛇の列は初めて見たよっくらにトイレは混んでいた。仮設トイレを含めてもとんでもなく混んでいて、梓と2人で待ち合わせ場所のフユの元へ戻ると妙な光景が展開されていた。

「「アルプス一万尺、小槍のうーえでっ、アルペン踊りを、さっあ踊りまシヨ、へい」」

5、6歳くらいだろうか。それくらいの年齢の見知らぬ女の子とフユが楽しそうに歌いながら手遊びをしていた。

ランラララ ララララ ラララララっ、へいっ」と、息を合わせてスキヤットして最後にハイタッチ。フユもその女の子もケタケタと楽しそうに笑った。

「フユ……アンタ何してんの？」

「この子もさ、俺と同じで、両親のトイレ待ちだってさ。あんまり暇だったから、この子に遊んでもらってた。なー？」

女の子も楽しそうに拳を突き上げ、なー！と声を上げる。

「あ、アレお前のとーちゃんとかーちゃんじゃねえ？……ほれ行けっ」

フユがそう言うと、女の子はおにーちゃんバイバイ！と叫んで、両親のトコロへ風のように走って行った。そのまま両親に体当たりをかまして抱き着く。そして、こちらを指差す。モンペじゃないかと一瞬不安になったが、笑顔でこちらに会釈をしてきてくれた。何故かアタシと梓も思わず会釈を返す。

「ちゃんとあの子には、実際にアルプスの小槍の上でアルペン踊りやったら死ぬってコト教えといたから大丈夫だぜ」

そんなデンジャラスな子供いないよ……、っていうかこの歌って

歌詞が結構アレなんだよね。

「前々から思ってたけどフユってさー、滅茶苦茶子供から懐かれるよね」

「フユは精神年齢が近いからじゃない？」

「おいゴラ、梓」

フユは子供からよく好かれる。

この間も迷子の男の子を迷子センターに連れて行ってあげてたら凄く懐かれちゃって、その子のお母さんが迎えに来るまでずっと一緒に遊んであげてたっけ。

梓の言い分じゃないけど、子供にはフユの良い意味で子供っぽい暖かな雰囲気を感じしやすいのだろう。ソレがわかっているから子供たちはみんな安心してフユに近づいてくるのだ。

「フユ、そんな子供好きなら、教育テレビで歌のお兄さんやりなよ？」

「あーあーあー、うるっせ。大体俺はガキとか好きじゃねえし。すぐ泣くし、キーキー騒がしいしなっ」

本当に子供が嫌いなら、絶対に先ほどのように楽しそうに相手をしてたりしない。

きつと寂しそうにしていた女の子を放っておけなかったんだろうな。あまりにもフユらしかった。

「そんなコトよりもさ、さっきの子が言ってたんだけど、あっちの方の小さいステージで一般の客でも参加できるイベントやってんだ

って。面白そうだし、俺たちも行ってみねえ？」

「イベントって、どんなの？その手の一般参加のイベントってなんか寒い企画が多い気がするんだけど……」

「さあ、よくわからんけど、あの子はすげえ楽しかったってさ」

梓の問いに、適当に答えるフユ。

「いいじゃん、アタシは行ってみたいな」

「お、さすがは純さん。ノリが良い」

「えー、2人とも本気？」

「梓はココで待っててもいいよ？アタシはフユと2人っきりで行くてくるし」

「だ、誰も行かないなんて言っていないでしょ！？わ、私も行くっ」

……梓ってこんな操縦しやすい単純な子だったかなあ？

『どなたか、やってみようという方、いらっしやいませんかー!?』

メインステージから離れた場所にある、ホントに小さなショボイステージの周りには、あまり人は集まっていなかった。

さつきからステージ上のMCだが進行の人だかがマイクで参加者を募っているが、空回りしている。

一体ナニするイベントなんだろう？フユも同じ疑問を思ったよう
で、早速近くにいた若いカップルに話しかけていた。

「すいませーん、コレってナニやってるのかわかります？」

こういうとき全く躊躇なく知らない人に話しかけられるフユは、
単純に羨ましいと思う。

「なんかねー、あのプロのバンドと一緒に演奏できるんだって」

「演奏……ですか？」

「うん。演奏って言っても単純に適当に好きな歌を歌ってください
なって感じらしいよ。楽器できる人はなんか触らせてもらえるみた
いだけ」

「うはは、そりゃまたレベル高いカラオケですね」

「さっき家族連れの子供が歌ってから、誰もやりたがらないみたい。そりゃそうだね、客集まってるないし、企画倒れだよ」

「お兄さんたちはやらないんですか？デュエットかましてきてくださいよ」

「あはは、やらないよ、恥ずかしい。僕の彼女オンチだし」

彼女にドツかれて、嬉しそうに笑う彼氏さん。フユがそんな世間話をしている間にもステージ上ではMCの人が募集している。さすがにヤバイと感じたのだろっ、声に焦りの色が見えてきた。

「な。俺たち3人でいこうぜ！」

フユならきつと。

絶対に言うと思った。

「ちょ、ちょっとフユ、本気なの！？やめようよ、恥かくってばっ」

梓は焦ったようにフユを抑止しようとしているけど、この後どうなるかアタシにはわかっていない。

「こんなおもしろーコトやらねえなんて嘘だろ。……なあ、純？」

きた。きたきた。

いつものフユだ。アタシの、フユの一番好きなトコロだ。アタシの、大切な目標。

「俺たち3人なら、すげえ楽しいぜ」

そう言って、フユは笑った。

ソレに対して、アタシは迷うべくもない。

「よっし、やろう！アタシたち3人で！」

アタシがそう叫ぶと、梓もしようがないあ、と嘆息しながら参加を承諾してくれる。

「はいはい！俺たち、やってもいいですかっ！？」

フユが手を振って、意思を表明する。

『おおー！ありがとーございまーすっ！ステージの上へどうぞ！

……次の演奏者はそちらの仲良し3人組でーすっ！』

疎らな拍手の中、アタシたちはステージに上がっていく。

ヤバイ、心臓がバクバクいつてる。

演奏する曲はすぐに決まった。

アタシたち3人が知っていて、なおかつバンドの人たちが演奏できる曲というコトで、WINDING ROAD に決定した。フユたちとカラオケに行く度に歌っている、アタシの大好きな曲だ。以前、フユと梓と遊びでスタジオを借りたときにふざけて演奏したコトもあった。

梓だけがギターを借りて、比較的簡単なコード進行をするコトとなった。リズム隊は当然プロなのでやりやすいハズだ。他にもトラペットやキーボードの人もいて、正直心強い。

そして、アタシとフユがボーカルである。

アタシも梓も、そしてフユも凄い緊張していたけど、高揚した気持ちは決して消えるコトはなかった。

この震えは、きつと緊張だけじゃない。

そして、ついにすべての準備が整った。

フユが、いつものようにニヤリとアタシと梓に笑いかけてくる。

アタシも梓も自然にフユと同じように楽しそうにニヤリと笑い返していた。

3人の呼吸がひとつに合う。

緊張と不安を中和してくれている温かい感情を肌で感じながら。

アタシたちは歌い出した。

曲が始まった。

アタシとフユの声に合わせて、様々な楽器の音が協和する。

梓のギターの音が聴こえる。梓のギターは、テクニクがどうかじゃなくて、聴いていてとても気持ちがいい。梓のように、とても綺麗な音だ。

フユの声が聞こえる。フユの歌声は、人を惹きつけるナニかを持っている。シンガーとしての才能だなんて大げさなモノじゃないかもしれないけれど、聴いていて温かい気持ちになる。フユのように、とても優しい音だ。

でも、アタシはどうなんだろうか。

アタシは主人公なんかじゃない。

アタシの——鈴木純の人生は、そんなに特別なモノじゃない。

でも、だけど。

それでいいんだと、アタシは思う。

自分の人生が特別じゃないなんて、アタシ以外の全員誰もが知っ

ている。どんなに自分のコトが好きで、どんなに自信家で、どんなに強くても、みんな心のドコかでそう思っている。自分が主役ではないことに気付いている。

フユだってそうだ。フユだって、アタシと同じコトを思っている。けれども、アタシと違ってフユは、いつも一生懸命なんだ。

自分に無いモノを他人が持っていて、関係ない。自分に様々なモノが欠けていても劣っていて、関係ないんだ。

一生懸命、人生を楽しもうとしている。

だからフユは何事に対しても受け身をとらずに、能動的に行動する。今みたいに自ら進んで楽しそうなコトに首を突っ込む。今日みたいに夏フェスに誘ってくれる。それだけじゃない。遊びに誘ってくれる、話しかけてくれる、笑いかけてくれる。

そういったコトは一見簡単なようで、いつしか周りからそうしてくれるのを待つようになってしまふ。だけど、フユは違うんだ。特別じゃなくなつて、自分で動くんだ。

だからフユと一緒にいると楽しい。だからフユを尊敬してしまふ。だからフユにこんなにも心を動かされる。

フユのようになりたいと、アタシは思う。

フユと歌いながら、アタシはそんなコトを考えていた。

フユと目が合う。フユはとても楽しそうに歌っていて、きっとアタシもフユと同じ顔をして歌っている。梓だつてきつとそうだ。

だって、楽しいんだ。アタシだって、楽しんでも、いいんだ。

最後は、梓も交えた3人でハモリながら、曲が終わった。

途端に湧き上がる歓声。歌っているときは全然気づかなかったけど、いつの間にか大勢の人たちが集まっていて、たくさんの歓声と拍手を送ってくれた。たくさんの人たちが、こちらに注目してくれている。

歓声に包まれながら、なんか今のアタシらって主役みたいだなあ、

と興奮した気分ですう思った。

「おい、純っ。俺たち、なんか今すげえ主役みたいだなっ！」

自分と全く同じコトを思っていたフユが、なんだか可笑しくて、アタシは声を上げて笑ったんだ。

「曲ーがーりくねったあ、道の先にー」

帰り道の電車の中、アタシは昼間にみんなで歌ったあの曲を口ずさんでいた。

「お前、その曲マジで好きだなあ。生でライブ聴けたコトよりそっちのが記憶に残ってるってどうなんだよ」

「うつるさいな、フユと梓だってそっちのほーが鮮烈だったでしょ

「？」

「まあ、そーだけどさ」

思い出すだけで、興奮が蘇ってくる。いつまでも覚えていたいなと思う。

「で。梓、純。2人とも今日はどーだった？」

「すつごく、楽しかった！」

間髪入れず、アタシは言った。

「前にジャズ研のみんなと一緒にジャズのコンサート行ったコトあるんだけど、フェスはそういうのとはまた違った面白さがあって、なんていうか熱量が半端なかったっ」

アタシは興奮冷めやらずといった感じでまくし立てるように今日の感想を言う。

「私も楽しかったよっ。野外フェスは行き慣れてるけど、今日みたいに友達と一緒に行ったの初めてだったし。……来年もまた来ようね？」

そんな梓の提案に、首を横に振る人間は誰も居なかった。

「絶対にまた行こう。俺もすげえ楽しかった。生であんな迫力ある演奏聴けて、いい刺激になったし、ナニより感動した。音楽って改めて凄いやなあ」

しみじみとフユは言う。確かに端末を通さない生の音楽というのは本当に凄かった。まだ、耳がキーンと鳴っている。

「あとやっぱりさ、みんなでステージの上で演奏できたのが楽しかったよな。……あのさ、俺ひとつ考えがあるんだけど、俺たちで――」

「フユ、ちょっと待ったっ！」

アタシは慌ててフユの言葉を遮る。フユがナニを言おうとしているかわかってしまったからだ。

「ソレは……絶対にあタシが言うっ」

フユにばかりいいトコとらせない。
楽しんでやるんだ。アタシだって、やってやる。

「アタシたちで、いつかバンド組もうっ！」

アタシがそう言うと、フユは全部わかっていたのかニヤリと笑った。梓はちょっとビククリしたような表情をしていたけど、次第に諦めたように優しく微笑んだ。

「おう、俺たちで」

「うん、私たちで」

「よし、アタシたちで」

アタシたちは子供のように拳をぶつけ合って、そして子供のよう

に笑った。

ソレからしばらく雑談しながら電車が駅に到着するのを待っていたのだが、ガタンと電車揺れると同時に、フユがコテンとアタシに頭を預けてきた。

「あらら、フユのやつ、寝ちゃったみたい。……今日はなんだかんだでイチバンはしゃいでたのコイツだもんね」

言いながら、アタシはバランスを崩さないよう注意しながら鞆から持ってきた上着を出して、ソレをフユの体に掛けてやった。

フユはアタシの肩の上で気持ちよさそうに眠っている。

「フユってさ、……ホント不思議なヤツだよね。最初は男子だからかな、とか思ってたけど、そういうんじゃないくて、フユはフユだからこんなに気になっちゃうのかなあ？」

独り言のように、アタシはフユに対する思いを梓に零した。

「き、き、気になるって……純、まさか……」

梓が青い顔で、物凄い迫力でアタシににじり寄ってくる。

……ああ、なるほどね。

「別に気になるって言っても、梓みたいにフユに恋してるとかそういうんじゃないから安心しなよ」

「そっか、よかったあ。安心するよ、純は私みたいにフユに恋して

——○! ? ? ■ ! ? % ! ?」

後半は宇宙語を喋っていた梓だが、まさかバレてないとても本気で思っていたのだろうか？

「な、な、な、……な」

「な？」

「なんつで私がフユと……っ！？そんなワケないじゃんっ」

青い顔から一転して真っ赤な顔で唾を飛ばしながら否定してくる梓。

「あーあーあー、もうソレでいいから」

フユの口癖を真似しながら、真っ赤になってパニックっている梓を鎮める。

そんなんだからフユに気付いてもらえないんだよ、と偉そうにアドバイスしてやろうと思ったけど、さすがに大きなお世話だと思ったので、あえて黙っているコトにした。

「うー……、じゃ、あ、さ。純……」

「ん？どうしたの、梓」

「席、代わってよ」

恥ずかしそうに懇願してくる梓に向かって、アタシは笑いながら言っていた。

「絶対、譲らない」

梓には悪いけれど、ソレとコレとは話が違っただぜ。

第15話 ムギ先輩と秘密特訓する方法

TO:フユ

SUB:(^O^)/

TEXT:よつすフユ、久しぶり！こっちは相変わらず先輩たちにしごかれまくってる毎日です、先輩と監督マジ鬼畜（笑）でもおかげで何とかユニフォーム貰えたぜ、当然ベンチだけど。松高行つたわっさんとタカはいきなりスタメンだつてさ、スゲーよな！城山先輩とこの経西大付属にはヨッシーとか根岸たちが入って層厚くなったし、今年の予選はマジ激熱だぜ！それで、だ。フユの学校も夏休み入ってんだろ？1回こっち帰ってこいよ、来づらいのはわかるけどさ、みんなの試合応援に来てくれ！俺やユウあたりとは今みたいにちよくちよくメールしたり電話してるからいいけど、他のみんなお前がどんな感じなんか心配してる。

みんな、フユに会いたがつてるぞ！

時計の針が朝の6時を回った頃、カーテンの隙間からこぼれる朝日によって、俺は目を覚ました。

他人に見せられないような不細工な欠伸を一発かまして、体を伸ばす。

寝ぼけ眼で部屋を出てふらつきながら杖をガコガコいわせてリビングへ行くと、台所にムギ先輩が立っていた。

「おおようございまーす……」

「おはよう、フユくん。まだ眠たそうだね」

ムギ先輩は眠たそうな俺とは違い、テキパキと朝食をつくっていた。エプロンをつけていつものように温かい笑顔のムギ先輩は、なんだか家庭的だ。安い言い方をすると、男としてグツとくるぜ。

「すげえ良い匂い。ナニ作ってるか訊いてもいいですか、ムギ先輩」

「どれも手抜きでごめんね。炊き込みご飯とお味噌汁と煮物と、あと鮭も焼くよ」

「うわあ、俺焼き鮭大好き……っ」

早くに目が覚めちゃったから勝手に作っちゃった、と照れながら自分の料理を手抜きだと謙遜するムギ先輩。どれも激しく食欲をそそられる香りを遺憾なく放出している。

さて、何故に朝から俺とムギ先輩がこのような新婚夫婦のごとくハートフルなやり取りをしているのか、疑問に思った人もいるだろう。

高校1年生の夏から数年が経ち、俺とムギ先輩は様々な紆余曲折を経て、結婚したのだ。彼女は毎朝俺の為に今朝のように美味しい朝食を甲斐甲斐しくつくってくれる。慎ましくも幸せな新婚ライフを2人で送っているのだ！

……………。

なんてのは、お察しの通り真っ赤な嘘である。そうなたらいいなあ、という俺の身勝手な憧れは置いておくとして。

ザ・合宿！

ぶっちゃけて言えば——いやぶっちゃけなくてもそうなのだが、今現在軽音部の合宿中なのである。今日はその合宿の2日目。初日からペース配分無視で騒ぎまくった結果、いきなり体に疲れが残ってしまった合宿2日目である。

「みんなが起きてきたら、朝ご飯にしましょう」

「つつても残りの連中は零先輩あたり以外は起きてくる感じしませんけどねー」

エプロンを外して、手際よくお茶を淹れてくれるムギ先輩。いつ

もの部室と同じように俺たちは向き合って紅茶を飲む。まだ覚醒しきっていない体に、じんわりと熱が流れてくる。

「昨日はいっぱい遊んで、みんな疲れてるんだと思うよ」

「ムギ先輩、コレは一応合宿なんスよね……？」

苦笑いするムギ先輩の言う通り、合宿初日の昨日は遊びに遊び倒してしまい、実質の練習時間は正味1時間くらいだった。いかにもウチの軽音部らしい、去年もこんな感じで滅茶苦茶楽しかったとムギ先輩は記憶を探りながら機嫌よく去年の合宿のコトを話してくれる。

合宿の舞台は海である。目的地に着いた途端に俺たちはハイなテンションに突き動かされるままに海に突撃してしまった。遊ぶだけ遊んで、アリバイ作りのようにちよこつと練習して、その後はBBQパーティ。花火に肝試し、と遊ぶコトに命を賭けるバーサーカーと化した軽音部一同。それらはすべて楽しかったなんて言うまでもないが、もういつそのコト合宿じゃなくてお遊び旅行に変更したらいかがだろうか。

「昨日は俺たち、何時くらいまでダベってました？2時くらいには先輩たちの大部屋抜けて自分の部屋のベッドまで突っ込んだ気はするんですけど、記憶あやふやで」

「それくらいじゃないかな、フユくんが部屋に帰ってからみんなスグに寝ちゃったし。私は興奮して中々寝付けなくて寂しかったよ」

「うはは、ソレなのに誰よりも早く起きてるって」

「今日も楽しみでしょうがなくて、目が覚めちゃった」

えへへ、と照れ臭そうに笑うムギ先輩。合宿をイチバン楽しみにしていたのは間違いなく彼女だろう。部室のカレンダーに合宿までのカウントダウンを毎日待ち遠しそうに書き込んでいたムギ先輩は、なんだか可愛らしかった。遠足前日のチビッコみたいでさ、こっちまで楽しくなってくるよな。

「さてと……せっかくお互い早起きたんですから、早起きの得が三文どころじゃねえってコト証明したいな」

また湯を張ってもらって朝風呂するのも悪くないけど、やっぱりここは練習だろ。

「ムギ先輩、秘密特訓しましょうよ、秘密特訓」

「秘密特訓？……ナニその面白そうな響き、やろっつやりましょっつ」

当然、秘密特訓だなんて言ってもどこも秘密でも特訓でもなく、フツーに楽器いじって遊ぶだけのモノだ。だけど、ムギ先輩はこの手の安っぽい表現が結構好きなのだ。

「シユート2万本とかするんでしょう？」

「それは違う」

「じゃあじゃあ、10倍の重力下で修業したりとかは？」

「いや、できないっす」

……そういや、こないだ律先輩から有名少年漫画借りて読んできた。意外に面白いつて言ってたなあ、ムギ先輩。

冗談は置いておいて。とにかく、俺の練習に嬉しそうに付き合ってくれるコトになった。

ヒミツ特訓、ヒミツ特訓、と楽しそうに呟きながらムギ先輩は意気揚々と立ち上がってティーカップを流しに力チャリと滑らせる。俺たちはスタジオへ向かうコトにした。

「にしてもホントにでっかい別荘ですよええ」

軽い足取りのムギ先輩についていきながら、俺は改めて感嘆の声をあげる。

ここらで疑問に思ったはずだ。スタジオ？別荘？おいおいアンタら一体ドコで合宿してるんだよ？音響設備の整った合宿所なんてあるのか？漫画やドラマみたいな別荘じゃあるまいし。と。

トコロがどっこいその通り、漫画やドラマのような別荘でこの合宿は行われているのだ。今だに俺も信じられないが、ムギ先輩の家はガチで別荘を持っていたりする。彼女の家が裕福なモノだというのはなんとなく察していたのだが、これほどまで巨大な別荘を有している琴吹家の財力はあまりに規格外。この別荘よりはるかに小さな家に住んでいる俺みたいな小市民は正直ビビっちゃうね。

「それでスタジオまで設備されてるってんだから、驚きだ」

部室よりも広いスタジオに入室する。新しいのかよく掃除されているのか、とても綺麗だ。機材も充実している。昨日みんなが来たとき、澪先輩や梓が機材のグレードに狂喜乱舞してたもんな。

ふと、ムギ先輩を見た。いつものような温かい笑顔。だけど、なんか違和感を感じる。そして、俺はその違和感の正体を微妙にわかっていたりするのだ。ムギ先輩から愚痴ってくれるのを待っていた

んだけど、もうこっちから言っちゃおう。

「ムギ先輩さ、本当はココで合宿やりたくなかったでしょ？」

「……………」

ムギ先輩はキーボードをセッティングする手を止めて、うーん、と困ったように苦笑いをする。

「勘違いだったら余計な気回してゴメンナサイだけどさ、なんかそんな気がするから」

「…………どうしてそう思ったの？」

「別荘のコト褒められてときのムギ先輩っていつもみたく笑顔だけどどっか気落ちしてるような気がして…………、で俺がムギ先輩の立場だったらあんまりいい気分じゃねえなって思ったダケ」

合宿が始まっている以上こんなコト言っても意味はない。むしろこんなコト言えば逆にムギ先輩は気を悪くするかもしれないけれど、ひよっとしたら力になれるかもなんて甘っちょろいコトを思ってしまったのだ。

「…………やっぱりらん世話でした？」

「ううん、違う違う。ただ…………フユくんってよく見てるなあって」

「そりゃ視野狭いガードなんて意味ないですから」

「がーど？」

「あわわわ……っ。なんでもないつす」

いかんいかん、調子乗って口を滑らせてしまった。話を戻そう。

「俺が言いたいののは『そんなに気にするコトじゃない』とかそーゆーんじゃないよ？」

極端なコトを言ってしまうと、ムギ先輩の気持ちはムギ先輩にしかわからない。ムギ先輩は裕福で、恐らく彼女は自分の環境と周りの人の環境が大きく異なるコトを知っている。俺が勝手にムギ先輩の気持ちになつて、その相違点をムギ先輩が嫌っているかどうか勝手に予想しているに過ぎない。本人しかきつとわからない。

だから、俺が言いたいのはそのいうコトじゃなくて。

「ムギ先輩ってさ、ウチの面々の中じゃイチバン大人ですよ。だからつつうケでもないんでしょうけど、周りに気を遣って言いたいコト言わないときありません？ いつもニコニコ笑って、我慢してさあ」

なんで後輩にそんな偉そうなコト言われなきゃならないんだ、とムギ先輩は思っているかもしれないけれど、彼女はニコニコしながら俺の話を聞いてくれる。

「もっとワガママになった方が楽だよ、きっと。うはは、ワガママなムギ先輩ってのも想像しづらいけど。家が裕福だろうが貧乏だろうが、優しかろうがワガママだろうが、みんなムギ先輩が好きだから先輩の周りにみんな集まってくるんですよ」

「嬉しいコト言ってくれるなあ、フユくんは」

そうやってニコニコと笑っているムギ先輩は、やっぱり大人だ。心の中で、俺は舌打ちをした。正直、ムギ先輩には感情丸出しにして内心を話して欲しかったけれども、やっぱり彼女はニコニコ笑っているだけだ。

ムダなコト言っちゃったなあ、と反省しながらギターのチューニングを始める。さっさと練習して俺が作ってしまったこのヘンな雰囲気を払拭させよう。

そう思ったのだが。

「フユくんって苦手な食べ物ってある？」

「……へ？」

いきなりムギ先輩は突拍子もないコトを言いだした。おまけに俺のすぐ後ろにまで近づいていた、チカイチカイ。

「私ね、昔から椎茸がどうしても食べられなくてね」

「えっと……ムギ先輩？なんの話ですか？」

ど、どうしたんだ？いつもに増して天然ってるぞ、ムギ先輩。ちなみに俺はレバー系がNG。感触がなんかムリなんだよなあ。

「一緒なんだと思うの」

「一緒？ナニがです？」

「私の家が他の人とちょっとばかし違ってるのって、食べ物のスキライが人それぞれっていう程度のコトと一緒になんだよ？」

極論、だよな。

「みんな、自分が周りの人と違っていたらイヤだよな。フユくんが気付いてくれた通り私なんて言うまでもないし、フユくんだってそうでしょ？」

ムギ先輩のそんな言葉に、俺は思わず自分のポンコツな右脚に視線が移ってしまう。みんなと違う、決定的な欠陥点。

「ま、そりゃそーですけど、人とは違う個性が欲しいってのも誰にだってある心理ですよ」

自分の脚のことを見抜かれたみたいな気持ちになって、俺は反抗したいだけのガキっぽい思考で反論をする。

本当は俺だって、みんなと同じ脚が欲しい。

「うん、そうだね。だけど私は個性よりも、みんなとの共通点が欲しかったんだ。高校入って軽音部のみんなと出会って、ひとつナニか共通点あったら嬉しくて、ひとつナニか相違点あったら焦ってね……」

ムギ先輩は表情変えずに続ける。

「でもいいんだよ。ありきたりで普通のコトなのかもしれないけれど、みんなと一緒にいるとね、そういうの気にならなくなるの。いや、気にしなくてもいいんだって気持ちになれる……かな」

「まあ、わからなくもないですけど」

「だから、大丈夫つ。心配してくれてありがとね、フユくん」

別に心配なんてしてねえよ、と否定しようとしたけど、冷静になつて考えてみればどうやら俺はムギ先輩のコトが心配だったらしい。ムギ先輩は大人だし、今みたいに強い考え方ができる強い心の持ち主だ。ただどんなで俺はムギ先輩に対して、こんな風に思ったのかよくわからなかった。

「すーっってね」

「……？」

ムギ先輩は自分の胸に手を当てて、すー、と息を吐きながら微笑む。

「フユくんと話していると、胸がすーっってなつて物凄く気分が楽になるの」

なんだそりゃ？

「今みたいに、フユくん心配してくれてるんだあつてわかったときすーっってなるの。とってもとっても嬉しいんだよ。だからそのお礼。ありがとっ」

「……どういたしまシテ」

ちえ、結局ムギ先輩にはぐらかされた感じするなあ、なんて思ったけど、褒められ慣れていない俺は簡単に機嫌がよくなって、実際はぐらかされてしまう。

ムギ先輩みたいに、強くなりたいって思った。

「あーあーあー、まあムギ先輩がソレでいいなら、俺もソレでいいや」

ちよつとばかり熱を持ってしまった自分の頬を誤魔化すために、いつもの軽口を叩く。

「でも、言いたいコトはちゃんとやってくださいよ? 『てめえ後輩の癖にチヨーシ乗って説教垂れてんじゃねえぞ』とかさつ。うはは、ムギ先輩が逆立ちしても言わなさそうな――」

「てめえ後輩の癖にチヨーシ乗って説教垂れてんじゃねえぞっ! ?」

「……………」

「……………で、いいの? こ、コレでよかった?」

逆立ちしても言わなさそうなセリフをかますムギ先輩。

「ま、マジで言いおつたで、この先輩……………!」

「え? え? ダメなの!? 言っちゃダメってコトだったのっ? ちよ、ちよつと待ってごめんなさいフユくん! …… もう1回、もっかい最初からお願いっ」

「なんスか、もっかい最初からって! ? イイ感じの話の流れじゃなかったんかいっ」

「もう1回、もっかいチャンス頂戴フユくんっ! ? テイクツー!」

と、そんなこんなで楽しくも阿呆なやり取りを繰り返しながら、俺とムギ先輩は他のみんなが起きてくるまで秘密特訓をして遊んだ。ジブリのピアノロックとか、ムギ先輩の語り弾きとか、相当レアだったんじゃないか？早起きの得は、やっぱり三文程度じゃ釣り合わないってね。

「やたらみんな午前中の練習のとき気合入ってんなーと思ってたら、コレかい……」

青い空。青い海。白い砂浜。

オン・ザ・ビーチ！である。

パラソルの下、俺は目の前に広がる光景を眺める。梓と唯先輩と律先輩と漣先輩が、波打ち際でビーチボールを使って楽しそうに遊

んでいた。

俺の隣では、ニコニコと笑顔のムギ先輩がレジャーシートに座っている。

ムギ先輩との秘密特訓の後、午前中はみっちりみんなで練習メニューをこなしたワケだが、昼飯食ってから今現在まで昨日と同じように海で遊んでいるのだ、ウチは。

あんだだけ練習したんだから午後は遊ぶぞーっ、と声高らかに宣言しやがったウチの部長を、最初は止める側にいた澪先輩と梓も見ての通り、非常に良い笑顔でビーチバレーボールに興じている。唯先輩に至っては言うまでもない。

「まあまあまあ、息抜きも大切ってコトだよ、フユくん」

「息抜き過ぎて、カラダに空気無くなっちゃいますよ」

息抜きだと言っているムギ先輩は、実際は遊びたくてしょうがなかったらしく、早々に水着に着替えていた。

海にいる以上当然のコトだが、俺たちは全員水着を着用している。俺もムギ先輩も、砂浜で遊んでいる先輩たちも、である。女の子の水着姿、それも自分の部活の愛すべき先輩方の水着姿。ソレらについて細かく描写し、ソレに対して俺がどういう感想を抱いて、どれほどテンションが上がったなんてのを細々説明していると、本当に日が暮れてしまうのと同時に俺が変態扱いされてしまうので割愛させていただく。とりあえず、生きていてよかったと、そう思いました。

「フユくん、海で遊ぶの嫌い？」

「や、嫌いじゃないですけど……」

海で遊ぶなんて滅茶苦茶楽しいコトが嫌いな人間なんているのかどうかかわらないけど、今回に限り俺は嫌だった。脚の怪我の所為で満足に遊ぶコトができないのは、まだいいんだ。ただ、右脚の傷跡や手術痕をみんなに見られるのがたまらなく嫌だった。

右足首周辺の肌は濁ったように変色し、刃物を入れた痕がはつきりと残っている。当然、優しいみんなは気を遣って見ないフリをしてくれる。俺も気付かないフリをする。女々しいってわかっているんだけど、それがどうしても辛い。

「また砂のお城作らない？昨日よりおっきいの」

「んー……、もうちょっと休憩します。ムギ先輩も部長たちに混ざってきたら？」

「じゃあ、私ももう少し休憩っ」

ムギ先輩はこうやって俺を一人にしないよう気遣ってくれる。まあ日に焼けたくないっていうのもあるんだろっけど、こういうのって嬉しいけど申し訳なくなるんだよね。

俺はごろんとレジャーシートに寝転がった。ムギ先輩の水着姿最高だなあ、なんて邪な眼でムギ先輩を盗み見ていると、彼女もチラリと俺の右脚を盗み見ているコトに気付く。みんなにはいつか治ると言っているポンコツの右脚。この嘘はいつまで続くんだろっか。

「ムギ先輩、今朝の話の続きだけどさ」

「うん、どうしたの？」

「人とナニか違うトコあっても、そんなん食い物のスキキライの違いだって言ってたスよね？」

いい話だと思った。ムギ先輩らしい強い考え方だと。

「例えば、例えばの話だけど。登場人物Aくんはさ、もうコレしか食べたくないってくらいに大好物があつてさ、ある日突然その大好きな食べ物食べられなくなっちゃったら……どうなんだろう？」

こんなコト訊いても、意味なんて無い。

「もうAくんの人生って、終わってない？2番目3番目の好きなモンで妥協して生きていきなさいってコトなんかなあ……」

ほとんど独り言だ。ムギ先輩は俺がナニ言ってるかわけわからな
いだろう。俺もよくわかってない。

ぽかんと口を開けたムギ先輩を見て、俺はアホなコトを言っ
てしまったコトに気付く。やっぱ、構ってもらいたがりの恥ずかしい
コト言っちゃった。優しいムギ先輩に、そんなコトないよ、って慰
めてもらいたいのが俺は。

「とかなんとか言っちゃったりしてっ。俺の大好物は和食だから、
今朝のムギ先輩の作ったご飯チョー美味しかったツスよ！」

誤魔化すように馬鹿丸出しの声をあげる。ちなみに本当に俺は和
食が大好きで、朝食はストライクゾーンの真ん中であつた。煮物と
が大好き。

「焼き鮭ウマかつたし、煮物も最高っ。ムギ先輩はゼツタイ将来い
いお嫁さんになりますねっ」

「え、えっ？ぶ、フユくん？急にどうしたのっ？」

アホなノリでゴリ押しじゃ、ゴリ押し！どさくさに紛れて言うてやろう！

「ムギ先輩の作る味噌汁なら俺毎日飲みたいなあ。あ、そーだつ。よかつたら俺と結婚してください——ぐえええっ！？」

いつの間にか近くまで来ていた梓の力カト落としが俺の腹に炸裂した。

突然の衝撃に、俺悶絶。

「なーにーしてるのか、なあ？フユウ……！？」

俺にネリチャギを叩き込んだ犯人は、とんでもねえ迫力で俺を見下ろしている。ムギ先輩の優しい笑顔とはベクトルが180°異なる恐ろしい笑みを浮かべている。

「冗談に決まってるんだろが、バカ梓っ！？」

「冗談に聞こえないっての、バカフユっ！」

この場合、怒っていいのは俺の方だと思っただが、何故か梓まで怒っている。突発的にブチ切れる梓の性格は何とかしてほしいモンだ。原因不明ってのがタチ悪い。

「ビーチバレーでぎったぎたにしてやるあ、梓……！」

「怪我人が調子乗らないでよね。ムギ先輩、こんなバカ放つという、こっちで一緒に遊びましょう？」

「まあまあまあ、落ち着いて梓ちゃん」

俺たちはパラソルから出て、律先輩たちの方へ向かう。容赦ない日差しが、何故か心地よい。

「フューっ、ムギーっ！早くこっち来いよーっ！」

大声を上げて、俺たちを誘う律先輩。唯先輩は落ち着きなくピョコピョコ跳ねていて楽しそうだ。傍で澪先輩がこっちに向かって大きく手を振っている。

そんなみんなを見てみると、右脚の怪我のコトが、すーっと薄れていくような気がした。

「確かに、みんなと一緒にいると、みんなと違ってるトコあっても、気にしないでいいやって気持ちになれるなあ……」

小さくつぶやきながら、思う。今朝ムギ先輩が言っていたのは、こういうコトだったのだろうか。

ソレは所詮、錯覚なのかもしれないけれど、悪くない錯覚だと思った。

「フユ、早くしなさいよ」

まだ不機嫌そうだけど、俺のコトを必要としてくれる梓。

「フユくん、一緒に行こう?」

俺の手を取って、いつものようにニコニコ笑ってくれるムギ先輩。

大丈夫だ、みんないる。みんなと一緒になら、気にしてるヒマなんてないぐらい毎日が楽しい。だから、大丈夫だ。

俺は幸せだ。

だけど。

俺は、この夜、目が覚めてしまう。
自分が泣いているコトに、気が付いたからだ。

第16話 泣く方法

合宿の2日目の真夜中に、俺は目を覚ました。
自分が泣いているコトに、気が付いたからだ。

楽しかった日の夜は、たまにこうなる。

楽しさの反動なのか、決まって1人になると鬱な気持ちがこみ上げてくる。

なんで俺はこんな脚なんだろうか？

なんでこんなに楽しいのに苦しいのか？

軽音部に救われたんじゃないのか？

バスケットを忘れることができたんじゃないのか？

ムギ先輩と昨日、あんな話をしたからだろうか。

考え出したら止まらなくなり、醜くて汚い感情が湯水のように湧き出てくる。

ぐるぐると溜めこんできた大きな問題や悩みが小さくて空っぽの頭の中で蠢いている。

逃げようとしても。どんなに逃げても。

それは追ってくる。それはとても足が速い。

俺みたいな弱い人間には、振り切れないんだよ。

別荘から、外へ出た。

そこはおとぎ話のような綺麗で神秘的な風景があった。

満天の星空。星の光を反射させて薄く光っている砂浜。真っ黒な海面にぽつんと描かれた三日月。

綺麗で神々しいそれらは、まるで場にそぐわない醜い俺のことを責め立てている気がした。

「う……………」

泣くな。泣くな。泣くな。

いつまでお子様やつてる気なんだよ、俺は。

突然、雨が降っているワケでもないのに右脚がじくじくと痛み始めた。

痛い。痛い。痛い。

その痛みから逃げるように俺は砂浜を歩き出す。だんだんと早足になって、ついには走り出す。右脚が悲鳴を上げて痛みを訴えてくる。知ったこっちゃねえよ、全力疾走だ。

当然、壊れた俺の右脚でそんなコトができるわけもなく、支えを失った俺は顔面から砂浜にダイブ。起き上げるワケもなく、仰向けに寝っころがって夜空を見上げる。夜空や月が涙でぐにやりとゆがみ始めたあたりで俺は目を閉じた。

波の音がする。寄せては返す、規則的で優しい音だ。

波が寄る音。

波が返る音。

波が寄る音。

波が返る音。

波が寄る音。

波が返る音。

そんな波の音を聞きながら、俺は激情を抑えようと、静かな音に集中する。

一体どれくらい経っただろうか。1時間かもしれないし、30分くらいかもしれないし、実際のトコロ数分程度だろう。

このまま消えてなくなりたい、と思った。
そのとき。

「え？」

俺の隣に、唯先輩が座っていた。

夢だと思った。

ふと、俺の隣を見ると、そこには唯先輩が座ってこっちを見ていた。

俺は起き上り、目を擦ってもう一度目の前の唯先輩を見た。ワケわかんないプリントTシャツをきている唯先輩がいつもの笑顔とは

違う不思議な顔をしていた。

「う、はははははっ！ビックリしたなあ、もう。マジで神出鬼没です
ね唯先輩は」

いつからいた？どこまで見られた？

俺は涙をぬぐいながら、壊れたように笑った。

「先輩も夜の散歩ですか？俺も急に外に出て寝っ転びたくなって、
そしたら砂が目に入っちゃって。もうここで寝ちゃってもいいか！
ってな感じで気持ちよくなってるって、そんで俺――」

「フーちゃん」

俺のバレバレのガキみたいな言い訳を、唯先輩は一言で遮る。
いつものふわふわした笑顔ではなく、真剣でどこか泣き出しそ
うな顔でじつと俺のコトを見つめてくる。

「話してよ」

「ナニを？」

「悩み、あるでしょ？」

「ないッスよ」

「あるよ」

「ないですって」

「ある」

「ない」

なんで俺はこんなに張らなくていい意地を張っているんだ？

「辛かったら言いなよ。苦しかったら吐き出しちゃいなよ」

「……それでナニになるんですか？」

「話してみても解決するコトだってあるよ」

解決……？なんだそりゃ、食えんの？

「解決って……うはは、そりゃ……笑える」

「フーちゃんの気持ち、私わかる。でも、誰だって話さなきゃ変わらないんだよ？」

俺の気持ち？わかる？ダレが？変わる？ナニが？

「変わる……ってなんスか、ソレ？そんなんでも解決できりゃ、この世から悩み事なんて無くなりますよ」

「逃げてるだけじゃん」

ああ、もう。

「ソレは嫌なコトから逃げてるだけだよ。フーちゃんは、そんな臆病者じゃないでしょ？フーちゃんは——」

ああ、もう。我慢できない。

頭の中でナニかが決壊した音がした。

「誰かに話してナニが変わんだよっ！！？」

もうゼンブどうでもいい。

「唯先輩に話したら、俺の脚が治んのかよ！？また走れるようになるのかよ！？またバスケさしてくれんのかよ！？違えだろおがよ、俺のキモチがわかる？気休め言っただけじゃねえよ偽善者あつ！！」

悩みのある後輩のことを心配して、こんなトコまで追いかけてきてくれて、それで相談に乗ってくれようとした優しい唯先輩。

事情もナニも知らない彼女は、いきなりブチ切れた最低な俺のコトを嫌うだろう。軽蔑するだろう。

でも、もうどうでもいいや。

「言っても周りが迷惑するだけなんだよ！アンタの妹の所為で一生走れない障害者になりましたって話したら満足か！？生きがいだつたバスケが一生できなくなりました、夢ブチ壊れたんですよって全部1から10まで話せばナニが変わんのか！？」

止まらない。

口を開けば開くほど、自分がゴミ以下のクズに成り下がっていく。言え言え言え、大好きで大切な先輩を傷つけていく。

「自分でもわかってんだよっ！わかってんだけど、どーしよーもねーんだよ、畜生！あるとき憂を助けなきゃアイツ死んでたかもしれねえんだぞ！？それでも後悔してるよ、自分が醜いのも知ってるよ、

助けなきゃよかったって何度も思うよ！でもそんなの助けるしかねーだろ！これでよかったんだよ！俺なんてブツ壊れてよかったんだよ！」

もう自分でナニ言ってるのかわからない。目の前が真っ赤だ。
唯先輩は今どんな顔しているだろうか？

「わかってんだよ、悪いのは全部俺なんだよ！どいつもこいつもバカみてえにイイヤツばかりで、今も唯先輩は俺のコト本気で心配してくれて！それに比べて俺は、俺が俺が、って自分のコトばかりで、醜くて汚くて！バスケなんてくそくらえだ、たかがガキの球遊びなんてさっさと忘れて前向きやいいのに！憂のコト心配してるフリして逃げて、いつだって可愛いのは自分だけだ！」

腹の底から、本音を叫ぶ。

本音。本当の音色。俺の本当の音色は、こんなにも汚い音なんだと改めて実感する。

「脚のコト抜きにしたってさあ、俺は醜いんだよ、汚えんだよっ！汚い汚い汚い、ああ吐き気がするっ！アンタらみてえに綺麗じゃねんだよ、アンタらみてえにマトモじゃねんだよ、アンタらみてえに大切なモノ持ってねんだよ！何もねーんだ、俺には大切なモノなんてねえんだよっ！」

言うだけ言って。

喋りすぎて、大声を上げ過ぎて、俺はむせてしまう。痰が絡んでゲホゲホとせき込む俺の背中を唯先輩は優しくさすってくれていた。唯先輩の顔を見ることができなかった。

怖かった。怖くて振り向けなかった。

今更ながら、自分がしてしまったコトの重大さに気づく。

俺の荒い息遣いだけが、耳に入ってくる。

唯先輩に、すべてぶちまけてしまった。紛れもない、罪だった。

「……ごめん、なさい。イミわかんねえよな、いきなりキレて怒鳴り散らして八つ当たりして……。唯先輩は俺のコト気遣ってくれただけなのに——」

「知ってたよ」

……？

「ずうっと前から、フーちゃんの脚が治らないコト、私知ってたんだ」

「嘘……っ」

「嘘じゃないよ？フーちゃんがバスケットボール大好きですっごい上手だってコトも知ってる。去年の全中ですっごい活躍したんでしょ？それでスポーツ推薦もらって、桜校じゃなくて部活強い学校に入学するつもりだったんだよね」

……なんで？どうして？

あのいつもふわふわ笑って、どこか間が抜けている、唯先輩が全部知っている？

「私ね、フーちゃんが事故にあって入院してるときにね、お父さんとお母さんがフーちゃんの怪我のコト話しているのが聞こえちゃったの。フーちゃんは覚えてないみたいだけど、私1回だけお見舞いにいったコトあるんだよ？」

彼女は続ける。

「お父さんのパソコン借りてね、あんまりよくないコトだとは思ってたんだけど、フーちゃんのこと調べたの。そしたら事故の記事以外にバスケットボールの大きな大会でスゴイ賞を取ったっていうことが分かって、フーちゃんスゴいねっ」

「憂はこのコトを……?」

「憂は知らないよ。私誰にも言っていないから」

全部、お見通しだったってワケだ……。

「ねえ、フーちゃん——」

「……もういいよ」

「え?」

「もういい。ナニをどうしたって俺の脚は治らねえし。憂とも縁切るよ、2度と会わねえ。軽音部も、もう辞める。唯先輩にあんなひでえコト言って、どんなツラしてればいいかわかんないよ……」

全部自業自得だ。結局こうなるのがオチだったんだ。

「俺のコト嫌いになっただろ?本性はこんなヤツなんだって失望したる?気味悪くなっただろ?……俺は唯先輩たちが思ってるような人の良い後輩じゃ——」

唯先輩が突然にじり寄ってきて、すげえ形相で俺の肩を掴んだ。

ブン殴られる、と本気で覚悟した。

「嫌いになんかならないよ」

俺は唯先輩に抱きしめられていた。

俺の首に両手を回して、恐らく全力で抱きしめてくれている。

「フーちゃんはね、フーちゃんが思ってるような汚い人間じゃないよ？」

「……………」

「だから、嫌いになんかなるワケ、ない」

唯先輩は少し力を弱めて、顎を俺の肩に乗っけるようにして、静かに囁く。

「憂のためにずっと隠してくれたんだよね、ありがとう」

「憂は……………」

「憂だけじゃないよ。他のみんなにも心配かけたくなくて、ずっと1人で頑張ってたんだよね」

「そんなコト——」

「辛かったねえ」

唯先輩はトントンと波の音に合わせて俺の背中を叩いている。まだ自分が赤ん坊の頃、こうやって母親にあやされていた気がする。

「世界中の人たちがね、みーんなフーちゃんのコト嫌いになってもね、私だけはゼツタイに嫌いにならないよ」

こんなコトを。

「澪ちゃんもりっちゃんもムギちゃんもあずにゃんもさわちゃんも純ちゃんも憂も。みーんな、優しくて頑張り屋さんのフーちゃんのコトが大好きなんだよ？」

こんなコトを言ってくれる人が、本当にいていいのだろうか。

「私もね、フーちゃんのコト大好き」

もう限界だった。

「……うつうつ」

ナニ泣かせるコト言ってるんすか？と強がろうとしたけど、俺の口

からこぼれ出たモノは情けない嗚咽だった。

「ひぐっ……へぐっ……」

なんか喉の調子が悪いな、と誤魔化そうとしたけど、やっぱり口から出るのは幼い子供みたいな泣き声だった。

「うえええ……ふええ」

いつ以来だろうか？人前でこんなに泣きわめくなんて。誰かにこんなに弱みを見せるだなんて。

「大丈夫だよ、ずっと一緒にいるからね」

そう言いながら、唯先輩は昔母さんがやっていてくれたように泣きじゃくる俺の背中を一定のリズムでトントンと叩いてくれる。

唯先輩の声が妙に震えていた。ひょっとして、俺なんかの為に泣いてくれているのだろうか？

そうやって、俺は唯先輩に抱きしめられながら、全力で泣いた。

そんな俺たち2人を、月と星だけが、静かに見守ってくれていたんだ。

第17話 もう1度やり直す方法

相も変わらず、夏休みは続いていた。

「暑い」

炎天下の中、俺は公園のベンチに座って、スライムのように溶けていた。やかましく鳴く蝉の鳴き声を聞きながら、今にも溶けて崩れ落ちそうなアイスを口に含む。あからさまに身体によろしくない毒々しい味が口に広がる。このアイスこんな味だったっけか。

「……ぼーくーは、透明ニンゲンさー」

お気に入りの東京事変の透明人間が、耳にさしているイヤホンから流れてくる。

アイスの棒を咥えてヒョコヒョコさせながら、公園で元気に遊んでいる子供たちを眺める。砂場で落とし穴を作って、キャツキャ言いながら楽しそうに笑っている。

俺にもあんな時分があったのか、と感慨に耽っていた瞬間、何者かによって咥えていたアイスの棒が引き抜かれた。

「やったね、フーちゃん。アタリだってっ」

「そりゃ……嬉しいね」

唯先輩が、やって来た。

「いきなり呼び出したりして、スイマセン、唯先輩」

「んーん、全然いーよ」

俺たちは、ベンチに並んで座っている。互いの顔を見ないように前方だけを見つめて、俺も唯先輩も子供みたいに脚を投げ出すようにだらけて座っていた。

「……………」

「……………」

手前で呼び出した癖に、俺は話し出すコトができなかった。話す内容はちゃんと決めてきたのに、俺の口は縫い付けられたかのように開かない。

聞こえてくるのは、蝉と子供たちのやかましい賑やかな声だけ。そんな沈黙を破ったのは、やっぱり唯先輩だった。

「……合宿終わってからさ、もう1週間が経つね」

「そうつすね」

「合宿が終わってからさ、フーちゃん部活に1回も来ないね」

「そう、すね」

「けっこう寂しい、とか私思っちゃったりするんだけど」

「部長にちゃんと休む理由は連絡したんですけどね。律先輩から聞いてないですか？」

「聞いたよ。地元に戻ってたんでしょ？」

うん、と俺は肯く。

「りっちゃんからそう聞いたけど、なんか不安になっちゃって」

「不安？ナニが？」

「フーちゃんが軽音部辞めちゃうんじゃないかって不安」

「……………」

あの日の夜のコトがフラッシュバックする。

感情をただひたすらに爆発させてしまった、あの日。

今まで溜めこんできたモノを爆発させたかのように、怒るだけ怒り。

恥も外聞も無く、ただひたすらに泣くだけ泣いた。

唯先輩を傷つけて、そして唯先輩に押し付けた。

「辞めない……よね？あるときフーちゃんが言ったのって、嘘だよ
ね？」

か細い声が隣から聞こえてくる。こんな声、唯先輩じゃねえって
思う。そんな泣きそうな顔、あんたみたいな人がすんなよ。

「唯先輩、覚えてる？この公園のまさにこのベンチ。……いつだっ
たかなあ、多分2、3ヶ月くらい前？そんなくらい前にさ、こうやっ
て並んでベンチ座って一緒にいちご牛乳飲みましたね」

俺は先輩の問いには答えず、逃げるように全く関係ない話を始め
る。

「……………」

「あーあーあー、覚えてないのね、ショックだぜ……」

唯先輩はどうやら覚えていないらしく、不思議そうに首をかしげ
ていた。

まあこついうのって言った本人は覚えてないらしいしな。

「そのとき、唯先輩はすげえ良いコト言ってくれてさ。俺、メチャクチャ感動したんだ」

唯先輩の言葉には、重みがある。誠実さがある。温かさがある。俺には、無い。

「唯先輩が言うコトってさ、ズバっていうか、ズシンとくるつつか、グサって感じに心に響く。だから合宿んときのあの日の夜、唯先輩が言ってくれたコトっていろんな意味で効いたよ。逃げてるだけってのもグサリときた、うはは」

「ゴメン、私そんなそんなつもりで言ったんじゃ——」

「うん、わかってる。ちゃんとわかってるから。……でも、本当のコトなんだ。俺は逃げてるばっかだった」

ナニから逃げていたんだろう。心当たりが多すぎる。

「あの日からたくさん考えたよ。どうしたらいいのかって。どうしたら逃げずにできるんだろうって。いっぱい考えた」

「……それで、フーちゃんはどうしたの？」

「俺バカだからさ、やっぱり難しいコトはわからなかった。だからわかりやすいコトからしていこうって思ったんだ。今まで逃げてきて、先送りしてきた問題を目に見える形で、ちゃんと向き合おうって考えたんだ。解決はともかくとしてね」

わざと明るい声で、俺は話す。そうでもしないと、声が出せない。

「すっげーくだらねえし、長いし、面白くもない話だけど、我慢して聞いてくれるかな？唯先輩に聞いて欲しくて、俺は今日唯先輩を呼んだんだ」

唯先輩は、迷わず肯いてくれた。優しくて、頼りになる、俺の先輩だ。

俺は、話し始めた。

俺、クルマにちゃんと乗れたよ。あの事故以来、怖くてクルマに乗れなかったんだけど、ちゃんと乗れた。途中のサービスエリアで1回吐いちゃったけど、父さんの運転は上手だったし、隣に妹がいてくれたから平気だった。

地元に戻って、友達と会ったよ。みんな背が伸びていたり、髪型が変わっていたり、雰囲気が変わっていたりしたけれど、結局は変わらない大好きな友達のままだったよ。話もたくさんした。昔みたいに、笑いながらふざけ合ったよ。楽しかった。

バスケット部の友達とも再会したよ。先輩も後輩もたくさん会いに来

てくれて、もみくちやにされて頭とかバシバシ叩かれた。みんな俺の脚のコト心配してくれたけど、ヘンに気を遣ったりしなかったんだ、みんな俺の気持ちをわかってくれてた、嬉しかった。

最初は行くつもりはなかったんだけど、ちゃんと試合の応援にも行った。高校生の運動量ってハンパじゃない。凄いイイ試合で、大きな声で応援した。

半年ぶりにボールにも触ったよ、みんなと本当に久しぶりにバスケットした。楽しかったけど、同じくらい辛かった。俺、ちゃんと笑えてたかな？

母さんにも会いに行ったんだ。離婚して家出て行った後にさ、実は数年前くらいに母さん、俺と姉ちゃんに会いに来てくれたんだ。でもそのとき、俺と姉ちゃんはひどいコト言っちゃって、それっきり会ってなかった。だから、勇気出してひとりで会いに行ったよ。

母さんはやっぱり老けてて、昔とは全然違った。お互い敬語だし、俺のコト冬助さんとか呼ぶし。俺も母さんって呼べなかった。でも、たくさん喋ったよ。家族のコトとか、学校の友達のコトとか、部活のコトとか、いっぱい。そしたら母さん泣いちゃってさ、ごめんねごめんねって言いながら泣いてさ。なんかわかんないけど、俺も一緒に泣いて泣いた。

母さんはまた会おうって言うてくれた。次会うときは今の家族を紹介したいって、笑ってくれた。笑った顔は昔のままだったよ。

ひたすらに、話した。

クルマに乗れないコトやバスケットへの葛藤、出て行った母さんのコト。家族以外の誰にも言ったコトがない、そんなコトまで話した。唯先輩に、ゼンプ聞いて貰いたかった。

唯先輩に、隠し事をしなくなかった。だから、余計なコトまで話したと思う。道中クルマの中で食べたおにぎりの具がおかだったコトとか、中学のときの真面目な友達が髪をブリーチしていて驚いたコトとか、応援した試合の展開が速くて凄いとランジションゲームになったけど全員走り切っていたコトとか、母さんが2人も子供産んでいて良い名前をつけていたコトとか、全部話した。

えらく長い時間喋っていたと思う。気付いたら、もう夕日が沈みかけて、ひぐらしが鳴いている。

唯先輩は真剣に俺のクソ長い話を聞いてくれた。時折、相槌を打ちながら、懸命に耳を傾けてくれる。

「と、まあこんな感じの1週間でして。どれもしょーもないコトですけど、いろいろやってきました。くだらないけど」

「くだるよ!」

「……くだりますか」

「それに、しょーもある!」

大真面目な顔でそんなコト言ってくる唯先輩が可笑しくて、俺は思わず笑ってしまう。

笑いながら、この流れで言っちゃおう。

「俺さ、いろいろ考えてさ。それで、決めたコトあるんだ」

公園からどんどん子供たちがいなくなっていく。母親たちに手を

引かれながら、騒がしそうに笑っていた。

そんな様子を眺めながら、俺は今日イチバン言いたかったコトを言った。

「もう1度、やり直すよ」

唯先輩の反応を見ずに、そのまま続ける。

「こんなコトばっか言ってるから、リセット世代だとか大人たちに馬鹿にされるんだろうけど」

ボタンひとつで元通り。そんな甘い嘘みたいな。

「……やり直すよ。何度だって、やり直してやる」

俺は唸るように低い声ではっきりと、でも独り言のように言う。

決意表明だなんて大層なモノじゃないけど、確かにこの気持ちは本気だ。だからこそ、唯先輩に聞いて欲しかった。

「やり直すって……ナニを？」

「いろいろ！まずは、コレから」

俺は勢いよく立ち上がって、唯先輩の方へ向き直す。

そして思い切り頭を下げて、バンジージャンプかますくらいの勢いでこう言った。

「あのと、唯先輩にひどいコト言ってるめんど！俺のコト、嫌いになって欲しくない」

唯先輩は、ナニも言ってこない。

俺は頭を下けたまま、足元のスニーカーを睨めつけながら続ける。

「軽音部だって辞めたくねえ。唯先輩たちと話してないコトとかやってないコトが山ほどあるんだ」

唯先輩は、ナニも言ってこない。

「俺、軽音部に居て、いいの、かな？」

唯先輩はナニも言ってこない。

「唯……先輩？」

そろり、と恐る恐る頭を上げて、目の前に座っている唯先輩を見る。

唯先輩は、笑っていた。

笑っているけど、いつもと違う笑顔だ。

楽しそうな子供っぽい笑顔じゃない。

優しい慈愛に満ちた、素敵な笑顔だった。

そして、おかえり、って言ってくれたんだぜ。

めでたしめでたし、ってな感じで1日が平和に終わろうとしていたんだけど。

奇妙なコトが起こった。

ソレに気付いたのは、唯先輩と2人で日が落ちてすっかり暗くなってしまうた帰り道を並んで歩いていたときだった。

「……あれ？唯先輩、髪型変えました？」

「え、どーしたの突然。別に変えてないよ、美容院にも行ってないし」

ん？なんかおかしいぞ。

「服装も……別にいつも通りっすよね」

「うん、別に普通だよ。フーちゃんどうしたの？」

「いや、……あれ、おかしいな。じゃあなんで——」

なんでこんなに、唯先輩があり得ないほど可愛く見えるんだろう？

「フーちゃん、ホントにどうしたの？具合悪いの？……ってフーちゃん顔真っ赤だよ！？」

「え、嘘」

本当だった。俺は自分の顔面が激しく熱を帯びているコトに気付く。

それと同時に、別のコトにも気付いた。さっきからドンドコうるせえ音が聞こえてくると思ったら、その音の正体は俺の心臓の鼓動だった。あり得ないほど短いインターバルで、それでいてあり得ないほど力強く心臓が動いている。

「だ、大丈夫っ？フーちゃんっ」

唯先輩が心配そうに近づいてきた。すると、もっと心臓がドキドキし始める。胸が締めつけられているかのような妙な感覚を覚えた。顔を覗き込んでくる唯先輩を、俺は何故か直視できない。直視できないのに、唯先輩の存在を強烈なまでに意識してしまう。

「な、んだコレ……？」

「フーちゃん、ひょっとして夏風邪でもひいちゃったんじゃない！？」

「かも、……ですね」

「タイヘンだよっ、早くお家に帰らなきゃ！」

絵に描いたように慌てる唯先輩。今度は逆に、そんな唯先輩から視線が外せなくなってしまう。胸のドキドキが止まらない。

……本当に俺どうしたんだろう？頭おかしくなっちゃったのか？
マジで風邪ひいたのかもしれない。

こっという日は、パブロン飲んで、さっさと風呂入って、さっさと寝よう。

だけど、俺は一睡もできなかった。

何故だかわからないけれど、唯先輩の笑顔が頭から離れなかったからだ。

なんでだろう？

第18話 自分の気持ちに気付く方法

夕焼けによってオレンジ色になっている軽音部の部室にて、俺と梓は2人きりで向かい合っていた。

「正直、フユにはガッカリした」

呆れるように、梓は言う。

おいおいなんでそんなコト言われにやなんねんだよ、と俺は思った。今日ナニか梓を怒らすようなコトしたっけか？

意味があるかどうかはわからないけれど、今日の記憶を辿っている。

遡るコト数時間前、相変わらず続く夏休みを利用して今日も軽音部の部室で練習をしていた。

「なんだかフユのギターの弾き方って、段々と唯に似てきたな」

澪先輩にそう言われたのは、練習がひと段落ついて休憩になったときだった。

唯先輩、という単語が出てきて、俺は少しギクリとしてしまうが、平静を保ちつつ応答する。

「えー、ドコがつすか？俺があんなに落ち着きの欠片も無い弾き方をしているとでも？」

「そうじゃなくってさ。ドコとなく、としか言えないけどね。ここ最近よく思うよ」

「どっちかつつと澪先輩や梓みたく静かで綺麗に弾きたいんだけどなあ」

ぼやきながら、俺は自分の頬が緩んでいるコトに気付く。唯先輩に似てるって言われてここまで喜んでんのってやっぱりおかしいよね……。

「あーあーあー、やっぱりおかしい」

そう、俺はおかしい。

なんだか思考回路が自分のモノじゃないみたいだ。ちょっとでも

気を抜くとあるコトを——唯先輩のコトを考えてしまう。そして、抜け出せなくなる。ナニも手がつかなくなってしまうのだ。

ケータイを弄る時間も心なしが増えた気がする。意味も無く唯先輩から送られた昔のメールを読み返したり、履歴でいつ唯先輩が俺に電話かけてきたのか確認したり、漑先輩から貰った今までの軽音部の写真を見直したり。俺は変態か。

食欲もめっきり減った。胸が詰まったように感覚がいつまでも続き、胃が食べ物を受け付けない。眠りも浅い、似たような夢ばかり見ている。時期を考えれば夏バテというコトも考えられるのだが、なんか違う気もするし。

元気が無くなった、というワケではない。何故なら、唯先輩本人に会つと妙に嬉しくてハイになつてしまう。唯先輩みたいなアツパ一系女子と話しているとこっちまでそのテンションが感染していくコトが多いが、最近はそれに拍車がかかっている。

なんて、俺がそんなコトを考えているなんて全く知らない唯先輩は現在、律先輩と一緒に氷水の入ったタライに足を突っ込んで楽しそうに騒いでいる。クーラーが無い我が部室において、ムギ先輩のアイスティーと団扇に次ぐ暑さを凌ぐ方法である。

タイツを脱いだ唯先輩の生脚が視界に映り、一瞬邪なコトを思ってしまったが、頭をブンブンと振って煩惱を揉み消す。うつわ、俺マジでキモチワル……、自分で自分に引いちまうワ。やっぱり頭おかしくなったのか。

「あーあーあー、俺きめえ」

自己嫌悪に陥りながら、そんな唯先輩たちを横目に自分の席に着く。ネクタイを取っ払い、着ているカッターも脱いでＴシャツ一枚になるコトで少しでも涼もうというワケだ。いつもなら、だらしがな何とか言つて目くじら立ててくる漑先輩もさすがに暑いのか俺に対してナニも言つてこない。

「はいフユくん、どーぞ。暑かったでしょう」

「ん、ありがとうございまっす、ムギ先輩」

ムギ先輩から差し出された涼しげな氷がいくつも入ったアイスティーのグラスを受け取る。クーラーボックスから出されたばかりのそれはすげえ美味そうだ。一気に飲み干してしまいたい衝動に駆られたが、ぐっと我慢してちびちび貧乏臭く飲んでいくコトにする。

澪先輩とムギ先輩と梓がナニか話しているみたいだけど、頭に入ってこない。耳を通り抜けていく。

俺は少し離れた場所にいる唯先輩と律先輩を眺める。氷水をバシヤバシヤいわせてはしゃいでいるその様は、なんだか見ていて気分が良い。落ち着かないけど。

しばらくそうやってぼーっとしていたら、いきなり目の前に誰かの手が伸びてきた。

「うわっ、でけえ手っ!？」

「誰がデカイ手だ、コラ」

ほらアレだよ、ボーっとしてる放心状態のヤツの顔の前で手をかざしてチラチラさせるヤツ。澪先輩のそのデカイ手でポカンと頭をはたかれる。彼女曰くコンプレックスらしい。

「せっかく褒めてやったのに、もう絶対言ってやんない」

「え、ナニナニ、なんすか？澪先輩なんて言ったん？」

「しかも聞いてないし……」

やばい、全然聞いてなかった。

「フユくんのギター、本当に上手になったよねって話してたんだよ」

澪先輩に代わってムギ先輩が言ってくれた。

「たった半年で不器用そうなアンタがここまでウマくなるだなんて誰も想像してなかったもんね？」

「梓さあ、手放して喜べないタイプの褒め方やめてくんない？」

そんな俺を見て、意地悪そうに笑う梓。俺のギターのレベルが少しでも上がったのなら、その理由の中で最もウエイトを占めている要因は、俺の隣で肩を揺らして笑っている梓だろう。コイツがいなければ絶対に今の俺はいない。……や、そんなん言い出したらみんなそうだよな。

「もう完全に唯を抜かしたな、フユは」

澪先輩は唯先輩たちの方へ目を向けながら、そんなコトを言ってくれた。

けど。

「んなコトねえよっ！」

……あ。

「……フユ？」

「あ、や、……その、俺なんかまだまだっすよっ。」

みんな少し驚いたようにヘンな目で俺のコトを見ている。当然だ、いきなりテンション上げて怒鳴るとかあり得ない。

ナニやってんだ、俺は。なんで今そんなコト言っただ？ドコに引っかった？

もうワケがわからない。

「び、びっくりしたなあ、もう。いきなり大声出すなよ、フユ」

「うはは。零先輩、すいません」

「フユくん、おかわりいる？」

「あ、もちろん貰います。ガバガバ飲んでいいですか？」

なんとか誤魔化せたみたいだ。

だけど、梓だけは。

俺の隣で、梓だけは、俺のコトをじっと見ていたんだ。

なんやかんやで、部活が終った。あまり覚えていないけれど、無難に切り抜けられたと思う。

夕焼けをバックに、俺たちはいつものように下校しようと校門を出たトコロで、俺はあるコトに気が付いた。

「あーあーあー、めんどくせ。俺ケータイ部室に忘れてるワ」

ポケットをパンパン叩いても、そこにあるはずの携帯電話がない。

「俺ちよつと取ってきますね、みんなは先帰っててください」

「え、別に待つよ？」

唯先輩たちはそう言ってくれたが、俺の歩く早さを考えたらすぐえ遅くなるのでやっぱり先帰ってもらおう。

「いいですつてば、俺歩くのおっせえし。……明日はバイトあるんで、早めに終わったら顔出しますね。じゃ、おつかれさまでっす！」

逃げるようにみんなと別れて校舎へと戻る。

職員室へ行って部室の鍵を取り、階段を上って再び部室にやってきた。杖をガコガコいわせて急いで来たので、少し息が上がっている。昔に比べてホント体力落ちたよな。

「お、あつたあつた」

俺のケータイはテーブルの上に放つてあつた。型落ちの薄汚れた白いケータイをポケットに滑らせて、さっさと帰ろうと踵を返す。そのとき、視界にフォトボードが映った。

「……………」

不思議と吸い寄せられるように、俺は部室の壁に掛けられている大きなフォトボードの前に歩いていく。ボードにはたくさんの写真が張り付けられている。こんなの飽きる程見たはずなのに、何故か改めて見てしまう。

この写真は俺が入部したときのヤツだ。これは初めてみんなと遊びに行ったヤツで、これは合宿のヤツか。写真の中の俺はギターを抱えて満面の笑みでこっちにピースしている。律先輩にヘッドロックかけられてる写真やムギ先輩にキーボード触らせてもらってる写真や澪先輩に勉強教えてもらっている写真、数えきれないほどの写真が所狭しとフォトボードに貼りつけられている。

俺や梓が入部する前の写真もたくさんあつた。その中で、唯先輩がひとりで写っている写真があつた。写真の中の今とそんなに変わらない唯先輩がワケわかんないポーズで楽しそうに笑っている。

「唯先輩……………」

自然と口を突いて出てくる言葉。
突然。

「唯先輩がどーしたの、フユ？」

——梓が俺の真後ろにいた。
心臓が口から飛び出たかと思った。

「——っお、おま……いきなり……っ！」

驚きのあまり、言葉が整わない。

「つか、マジでなんで梓がいるんだよ！？さっきコイツ帰らなかったか！？」

「びつくりしすぎだから、ちょっと落ち着きなよ」

……………。

まあ梓の言う通りだ、驚き過ぎだぜ。別にやましいコトなんかひとつも無いのに、なんでこんなにビビってたんだか。

「お前ナニしてんの？」

「私も忘れ物——だけど、勘違いでしたー。ナニも忘れてなかった、忘れ物じゃなくて覚え物だねっ」

「……………」

「唯先輩っぱく言ってみただけど、どう？」

「……………」

梓は笑いながら言ってくるが、目が全く笑っていない。機嫌が悪いときの梓だ。

「……お前さ、なんか言いたげな顔だな」

「フユは逆に言いたくないって顔してるよ」

「回りくつでえな、言いたいコトあんなら言えよ」

「絶対答えてくれないと思うけど……、唯先輩とナニがあつた？」

なんとなく、梓がそう訊いてくる気がした。

「ナニ……って、なんだよ？」

「それを私がフユに訊いてるの」

妙に高圧的な梓だが、どこか寂しそうな顔をしていた。今日の梓も俺みたいにワケわかんねえ。

「別に大したこっちゃねえよ。ちょっと相談乗ってもらっただけ」

「ふーん」

梓はそれ以上ナニも追及せず、俺から視線を外して窓の外に目を向ける。夕日に染まったグラウンドを眩しそうに見つめる。

「合宿終わった、ぐらいからかなあ。フユさ、なんか様子ヘンだよね」

……おっしゃる通りだ。

「それも唯先輩に対して、異常に」

……全くもってその通り。

「それがなんでなのか自分でもわかってないでしょ？」

……知るかよ。

「私が教えてあげるよ」

梓とはつきりと目が合った。

「フユは唯先輩が好きなんだよ」

………はい？

え、ナニ？なんつったのコイツ？あずにゃん頭ボンしたんか？

「ナニ驚いたフリしてんの？ホントはフユだって心のどこかで薄々わかってたでしょ？」

あ、ちなみにひとりの人間としてなら好きだよとか抜かしやがったら叩くよ？と、意味の分からない凄みを見せている梓。

「フユのさ、いかにも気付いてませんでした、みたいなそーいうトコ。……見てて本気で苛々するよ」

「頼むからさ、梓。もうちょつと柔らかい言い方してくれない？俺みたいな絶食系男子はメンタルケア面倒臭えからあんまりヒビいれんでやってや」

「まだわからないならもう1度言ってあげるね。……フユは唯先輩に惚れちゃったの、恋してるんだよ？」

俺の安い茶々を小馬鹿にするように、梓は明るい声で言う。今日の梓はいつもに輪をかけておかしい。彼女にもナニかあったのだろうか。

「仮にそうだとして、梓がキレてんのがわかんねえな」

「別に怒ってなんかないよ。ただ呆れてるだけ」

「……呆れる？」

「正直、フユにはガツカリした」

ここで、ようやくと冒頭に戻るワケだが。

結局ナニがここまで梓を呆れさせたのか全くわからない。唯先輩と喧嘩でもしたのだろうか？きつとそうだ、2人ともしょーもないコトですぐ口論すつからなあ。

「一体全体ナニが梓さんをガツカリさせてしまったか訊いても？」

「私は、フユは唯先輩じゃない他の女の子が好きなんだと思ってた。

いや、好きになるって思ってた」

「……………続けてどーぞ」

「なのに唯先輩に馬鹿みたいに尻尾振ってて、なんか呆れた」

「……………それだけ？」

「じゃあもう話終わろうか？フユ、露骨に面倒な顔してるし」

そう言つて、梓は本当に呆れた表情で俺を見る。

正直なトコロ、さつさと話を切り上げてしまいたかった。梓とこんな居心地の悪い雰囲気話していたくなかった。気楽に、いつもみたいに肩の力抜いて笑いながら話したい。

だけど、俺は逃げたくない。

「いや、続けてくれよ。梓の話、俺ちゃんと聞きたい」

「……………意外。てつきりフユのコトだからいつものように『あーあーあー、もうめんどくせえからさつさと帰って一緒にフルハウスの再放送でも見よーぜ？』とか言つて逃げるんだと思ってた。……………心境の変化？」

「そんな大層なモンじゃねえよ。ただ——」

「ただ？」

「——やり直してるだけ」

「……………は？ナニ言つてんの？」

「まあ意味わかんねえわな。単純に逃げんのヤになったってだけだよ」

「へー、フユ立派じゃん。……でもどうせ、ソレって唯先輩のおかげでしょ？」

「そうじゃないって言ったら嘘になるけど、珍しく自分自身で決めたコトだから。梓にやいやい言われる筋合ねえっつの」

「格好いいね。でもソレ本当なの？ なんだかんだ言って、逃げてるコトあるんじゃない？」

梓にそう言われた瞬間、ぞわりとする。頭の中を覗かれたみたい
に寒気が走る。脳裏に真っ先に浮かんだのは憂のコトだ。絶対に梓
は知らないハズだ。だけどのを得ていた。

結局俺は、憂に脚のコトを言っていない。このまま騙し続けても、
いつかはバレる。憂はきつと泣くだろう、悲しむだろう。絶対に避
けたい。でもどうしたら逃げずに済むのか。その答えは、やっぱり
まだ見つからない。でも、逃げるのだけは駄目なんだ。

憂のためにも。

「フユ、今誰のコト考えてる？」

梓の声で、我に返る。

「その人のコト、フユはどう思ってるの？ 大切なんでしょ」

……俺は考えた。ナニを言えばいいのか、どう結論付けられ
いいのか。

考えて、考えて、考えて。

「……………」

それでもナニを言ったらいいかわからずに歯を食いしばる。
すると。

梓が俺に手を伸ばしてきた。撫でるように、そっと俺の頬に手を触れる。

「ごめん、ね。フユにそんな顔させたくて言ったワケじゃないんだ……、ごめん」

梓はそう言っで、悲しそうに謝った。
俺は一体どんな顔してんだよ。

「いつかわかるよ。唯先輩のコト好きなんですよ、それでもいいよ。そうしているうちに、イロイロなコトがわかるから」

「イロイロなコト？」

「きつとフユならわかるよ」

梓は、力強くそう言った。

「ん、わかった」

「嘘つき、絶対わかってない」

「梓が俺のコト心配してくれてたつてのがわかった。いやー、優しいね、おねーさん」

「……うっさい、フユのバーカ」

そう言っで、梓は俺の胸に軽いパンチを入れて、俺たちはくすりと笑う。いつもの調子が戻ってきた。

それと同時に、スーッと肩の力が抜けて楽になっていく感じがした。

「そろそろ帰るか、梓」

「うん、そうだね」

「あーあーあー、なんか久しぶりにメツチャ腹減ってきたっ。なんか食って帰ろうや」

「もうすぐ晩ご飯でしょー」

「じゃあ甘いモンは別腹ってコトで、ドーナツはどうスか？付き合っでやってや」

「……しょーがないなあ、付き合っであげるよ」

俺たちは部屋を出て、真っ赤に染まった夕焼けの中、並んで帰り道を歩く。

「なあ、梓」

「うん」

「俺さ、イロイロ考えてみるよ、もっと」

「うん」

ようやく、というか今更って感じだけど。

俺は気付いた。

なんで唯先輩を見ると、あんな気持ちになるのか。

これは巷で有名ないわゆる恋ってヤツで。

恋は俺みたいな安い人間にでも、誰にでもあるワケで。

俺は、自分の気持ちに、気付いたんだ。

「俺、唯先輩が好きだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147x/>

けいおん！ 大切なモノを見つける方法

2012年1月8日15時53分発行